

東潮年譜・研究業績目録・海外調査行程記録

I 年譜

- 1946年**(昭和21)
12月 大阪府中河内郡矢田部町で生まれる
- 1965年**(昭和40)
3月 大阪市立天王寺商業高等学校卒業
- 1966年**(昭和41)
4月 兵庫県立神戸商科大学経営学科入学
- 1967年**(昭和42)
3月 兵庫県立神戸商科大学経営学科中途退学
- 1968年**(昭和43)
4月 岡山大学法文学部史学科(考古学専攻)入学
- 1973年**(昭和48)
3月 岡山大学法文学部史学科(考古学専攻)卒業
- 1973年**(昭和48)
4月 九州大学大学院文学研究科修士課程(考古学専攻)入学
- 1975年**(昭和50)
4月 九州大学大学院文学研究科修士課程(考古学専攻)修了(文学修士)
4月 九州大学大学院文学研究科博士課程(考古学専攻)入学
7月～8月 邪馬台国への道踏査－古代復元船「野性号」の航海実験に参加
- 1976年**(昭和51)
6月 奈良県立橿原考古学研究所附属考古博物館学芸員補(嘱託)
- 1978年**(昭和53)
3月 九州大学大学院文学研究科博士課程(考古学専攻)単位取得満期退学
- 1979年**(昭和54)
5月 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館学芸員(～昭和56年9月)
- 1981年**(昭和56)
4月 国立歴史民俗博物館共同研究員(～昭和59年3月)
10月 奈良県立橿原考古学研究所技術職員技師(～昭和38年6月)
10月 奈良芸術短期大学非常勤講師(東洋美術史)(～昭和60年3月)
- 1983年**(昭和58)
7月 奈良県立橿原考古学研究所技術職員・主任研究員(～昭和58年9月)
10月 奈良県教育委員会事務局技術職員・主査(～昭和60年9月)
- 1985年**(昭和60)
10月 奈良県立橿原考古学研究所技術職員・主任研究員(～平成4年3月)
- 1987年**(昭和62)
4月 国立歴史民俗博物館特定研究共同研究員(～平成4年3月)
- 1988年**(昭和63)
4月 奈良芸術短期大学非常勤講師(東洋美術史)(～平成3年3月)
4月 国立歴史民俗博物館考古研究部非常勤講師(～平成4年3月)
- 1989年**(平成元)
4月 四国地区国立大学放送公開講座講師(～平成2年11月)

1990年(平成2)

- 3月 国立歴史民俗博物館「装飾古墳研究プロジェクト」委員
- 4月 大阪外国語大学朝鮮語学科非常勤講師(文化概論)(～平成3年3月)

1991年(平成3)

- 2月 ユネスコ「海のシルクロード」中国福建省泉州－韓国釜山・慶州
- 4月 大阪外国語大学朝鮮語学科非常勤講師(文化特殊研究)(～平成5年3月)
- 4月 島根大学教育学部非常勤講師(比較文化史)(～平成4年3月)
- 8月 ソ連バジリク発掘調査。8.21政変。10月ソ連邦崩壊、12月ロシア建国

1992年(平成4)

- 3月 奈良県立橿原考古学研究所退職
- 4月 徳島大学総合科学部助教授(～平成5年8月)
- 4月 徳島大学教養部講師(兼担)(～平成5年3月)
- 4月 国立歴史民俗博物館考古研究部助教授(～平成5年8月)
- 4月 徳島大学埋蔵文化財調査委員会委員(～平成6年3月)
- 4月 徳島大学埋蔵文化財調査室長(～平成6年3月)
- 4月 古代学協会四国支部幹事
- 5月 徳島市文化財保護審議委員(～現在)
- 10月 徳島県文化財保護審議委員(～現在)
- 10月 朝鮮学会幹事(現在に至る)

1993年(平成5)

- 4月 大阪外国語大学朝鮮語学科非常勤講師(文化特殊研究)(～平成15年3月)
- 9月 徳島大学総合科学部教授(現在に至る)
- 9月 国立歴史民俗博物館考古研究部教授(併任)(～平成6年3月)

1994年(平成6)

- 4月 国立歴史民俗博物館共同研究員(～平成7年3月)
- 4月 徳島大学埋蔵文化財調査委員会委員(～平成8年3月)
- 4月 徳島大学埋蔵文化財調査室長(～平成8年4月)
- 4月 板野町文化財保護審議会委員(～平成8年3月)
- 8月 日本学術振興会特定国派遣(韓国)慶北大学校考古人類学科(～平成7年5月)
- 8月 韓国・慶北大学校博物館研究員(～平成7年5月)

1995年(平成7)

- 6月 埋蔵文化財調査委員会委員(～平成8年3月)

1996年(平成8)

- 2月 文学博士(九州大学)
- 4月 国立歴史民俗博物館展示プロジェクト委員(～平成9年9月)
- 4月 鳴門教育大学学校教育部非常勤講師(考古学)(～平成9年3月)

1998年(平成10)

- 2月 康楽賞
- 4月 鳴門教育大学学校教育部非常勤講師(考古学)(～平成11年3月)
- 4月 四国地区国立大学放送公開講座講師(～平成11年3月)

1999年(平成11)

- 4月 広島大学教育学部非常勤講師(文化論)(～平成12年3月)

2000年(平成12)

- 4月 文科省在外研究(中国)武漢大学・西北大学・南京大学(～平成12年5月)

2001年(平成13)

- 4月 鳴門教育大学学校教育部非常勤講師(考古学)(平成14年3月まで)

2002年(平成14)

- 3月 徳島市中心市街地都市整備懇談会委員(～平成15年3月)

2003年(平成15)

- 3月 徳島市中心市街地都市整備懇談会委員(～平成16年3月)
- 4月 日本学術振興会特定国派遣(中国)吉林大学・西北大学・鄭州大学・南京大学(～平成15年8月)
- 12月 史跡徳島藩主蜂須家墓所整備委員会委員

2004年(平成16)

- 4月 九州大学大学院文学研究科非常勤講師(古代東北アジアの考古学的研究)(～平成18年3月)
- 7月 徳島市立考古資料館協議会委員(～平成17年6月)

2005年(平成17)

- 4月 国立歴史民俗博物館『三国志』魏書東夷伝の国際環境プロジェクト(人間文化研究機構連携研究(ユーラシアと日本：交流と表象)(～平成20年3月)
- 10月 第22回国民文化祭藍住企画委員会文化探訪企画委員

2006年(平成18)

- 4月 国立歴史民俗博物館共同研究員(～平成19年3月)
- 4月 藍住町勝瑞城館跡調査整備委員会委員(～現在)
- 7月 鳥居龍藏博士の顕彰等に関する検討委員会委員(～平成19年10月)

2007年(平成19)

- 3月 史跡徳島城跡整備委員会委員(～平成23年3月)
- 4月 国立歴史民俗博物館共同研究員『三国志』魏書東夷伝の国際環境(～平成20年3月)
- 4月 人間文化研究機構連携研究員(ユーラシアと日本：交流と表象)(～平成20年3月)
- 5月 国立歴史民俗博物館客員教員(教授)(～平成20年3月)
- 7月 鳥居龍藏博士の顕彰等に関する検討委員会委員(～平成19年10月)

2008年(平成20)

- 4月 人間文化研究機構連携研究員(ユーラシアと日本：交流と表象)(～平成20年3月)
- 4月 阿波国分尼寺跡史跡整備策定委員会委員(～現在)
- 6月 国立歴史民俗博物館展示プロジェクト委員(～平成21年3月)
- 12月 日本学術振興会・海外学術調査審査委員(～平成21年11月)

2009年(平成21)

- 4月 徳島大学大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部教授(～平成24年3月)
- 4月 国立歴史民俗博物館展示プロジェクト委員(～平成22年3月)
- 4月 人間文化研究機構連携研究員(ユーラシアと日本：交流と表象)(～平成22年3月)

2010年(平成22)

- 10月 文化学園大学ファッション研究機構共同研究員(～平成24年3月)

2012年(平成24)

- 3月 徳島大学大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部停年退職

Ⅱ 研究業績目録

1971年

「分銅形土製品の研究(1)」『古代吉備』7、11－35頁、11月

1975年

『志賀島－「漢委奴国王」金印と志賀島の考古学的研究』(共著)、3月

1976年

『むら・まつり・こふん』(共著)、奈良県立考古博物館図録、10月

1977年

『大和考古資料目録』第5集(共著)、奈良県立考古博物館、3月

1978年

「朝鮮無文土器時代および原三国時代鉄器出土地地名表」『たたら研究』第22号、たたら研究会、3月

1979年

「楽浪漢墓鉄器出土地地名表」『たたら研究』第23号、たたら研究会、3月

「古新羅有棘利器考」『古代学研究』第89号、4月

「慶州の寺院と奈良時代の寺院の伽藍」『月刊歴史教育』第1巻第2号、東京法令出版、5月

「朝鮮三国時代の農耕」『橿原考古学研究所論集』第4、吉川弘文館、9月

『大和考古資料目録―二上山北麓旧石器資料―』第7集、奈良県立橿原考古学研究所附属博物館、3月

『大和出土の国宝・重要文化財』（共著）、奈良県立橿原考古学研究所附属博物館、10月

1980年

『橿原考古学研究所附属博物館展示解説』（共著）、奈良県立橿原考古学研究所附属博物館、10月

1981年

『磯城・磐余地域的前方後円墳』『奈良県史蹟名勝天然記念物調査報告』第42冊(共著)、奈良教育委員会、5月

1982年

『大和の考古学』（共著）、奈良県立橿原考古学研究所附属博物館、3月

「大和郡山市笹尾古墳発掘調査概報」『1981年度奈良県遺跡調査概報』、奈良県立橿原考古学研究所、3月

「新庄町脇田遺跡第2次発掘調査概報」『1981年度奈良県遺跡調査概報』、奈良県立橿原考古学研究所、3月

「上牧町松里園古墳発掘調査概報」『1981年度奈良県遺跡調査概報』、奈良県立橿原考古学研究所、3月

「考古学的資料からみた4世紀の朝鮮」『歴史公論』第8巻第4号、通巻77号、雄山閣、4月

「東アジアにおける鉄斧の系譜―古代朝鮮の資料を中心として―」『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』、4月

「分銅形土製品とその祭祀」『福岡市歴史資料館開館10周年記念特別展・古代の顔』『福岡市歴史資料館図録』第7集、10月

1983年

「明日香村塚本古墳発掘調査概報」『1982年度奈良県遺跡調査概報』、奈良県立橿原考古学研究所、3月

「大和郡山市郡山城・三ノ丸跡―筒井時代本丸推定地発掘調査概報」『1982年度奈良県遺跡調査概報』、奈良県立橿原考古学研究所、3月

「磯城郡郡田原本阪手遺跡発掘調査報告」『1982年度奈良県遺跡調査概報』、奈良県立橿原考古学研究所、3月

「シンポジウム奈良県出土の鉄刀剣の分析・古墳時代の鉄をめぐって」『橿原考古学研究所研究紀要・考古学論攷』第9集、11月

1984年

「大和郡山市郡山城・三ノ丸跡発掘調査報告」『1983年度奈良県遺跡調査概報』、奈良県立橿原考古学研究所、3月

「高取町の古墳発掘調査概報」『1982年度奈良県遺跡調査概報』、奈良県立橿原考古学研究所、3月

『大神神社境内地発掘調査報告書―防災工事に伴う調査―』（共著）、大神神社、12月

「蛇行状鉄器考」『橿原考古学研究所論集』第7、吉川弘文館、12月

「慶州」「金冠塚」「天馬塚」「梁山夫婦塚」「青堤碑」「新羅土器」『世界百科事典』、平凡社、11月～1985年6月)

1985年

- 「古代朝鮮の祭祀遺物に関する一考察—異形土器をめぐって—」『国立歴史民俗博物館研究報告』第7集、3月
- 「奈良県北葛城郡河合町穴闇—西大和ニュータウン建設にともなう化石発掘調査報告」『1984年度奈良県遺跡調査概報』（共著）、奈良県立橿原考古学研究所、3月
- 『福岡市西区徳永古墳群発掘調査報告（伊都の里団地内古墳群の調査）』（共著）、徳永古墳群調査会、4月
- 「新羅の線刻文土器をめぐって」『末永雅雄先生喜寿記念献呈論文集』坤、6月

1986年

- 「慶州」「金冠塚」「天馬塚」「梁山夫婦塚」「青堤碑」「新羅土器」『朝鮮を知る事典』（共著）、平凡社、3月
- 「平城京左京三条六坊七坪・奈良町発掘調査概報」『1985年度奈良県遺跡調査概報』、奈良県立橿原考古学研究所、3月
- 「平城京右京四条十五坪（西三坊大路）発掘調査報告」『1985年度奈良県遺跡調査概報』、奈良県立橿原考古学研究所、3月
- 「平城京右京一条六坊十五坪（東一坊大路）発掘調査報告」『1985年度奈良県遺跡調査概報』、奈良県立橿原考古学研究所、3月
- 「古代朝鮮との交流と文物交流」『日本の古代 第3巻 海をこえての交流』、293～334頁、中央公論社、4月
- 「鉄・銅の武器—鉄剣・鉄刀・鉄矛・鉄戈—」『弥生文化の研究』第9巻、弥生人の世界、70～87頁、雄山閣、9月

1987年

- 「鉄鋌の基礎的研究」『橿原考古学研究所研究紀要・考古学論攷』第12集、3月
- 「冠・冠帽・装飾品」「甲冑」『アサヒグラフ』通巻3368号、4月
- 「新羅於宿知述干壁画墳に関する一考察」『東アジアの考古と歴史』上、同朋舎出版、11月
- 「シンポジウム鶏の考古学」『古代学研究』第114号、9月

1988年

- 「王冠の系譜をたどる」『韓国再発見』朝日文庫、朝日新聞社、3月
- 『平城京左京三条四坊十二坊発掘調査報告』（共著）『奈良県文化財調査報告』第52集、奈良県教育委員会、3月
- 『下井足遺跡群』（共）『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』52、奈良県教育委員会、3月
- 「佐味田別所下古墳」（共）『1987年度奈良県遺跡調査概報』、奈良県立橿原考古学研究所、3月
- 「韓国における遺物をみる」『朝日新聞』1987年4月22日号
- 「武器」『季刊考古学』第23号、雄山閣、5月
- 「鉄」『明日香風』25、8月
- 「朝鮮考古学の現状と課題—1985年の成果を中心として—」（宮本一夫共著）『考古学評論』第1集、5月
- 『韓国の古代遺跡1 新羅（慶州）篇』（森浩一・田中俊明共著）、中央公論社、総354頁、7月
- 「集安の壁画墳とその変遷」『好太王碑と集安の壁画古墳』、木耳社、98～163頁、9月
- 『石舞台から藤ノ木古墳』（共著）、奈良県立橿原考古学研究所、9月
- 「東アジアにおける鉄斧の系譜—古代朝鮮の資料を中心として—」『研究紀要』第1集、由良大和古代文化研究協会、7月
- 「高句麗文物に関する編年学的一考察」『橿原考古学研究所論集』第10、吉川弘文館、10月
- 『大和の考古学50年—橿原考古学研究の歩み—』（共著）、学生社、11月

1989年

- 「藤ノ木古墳と古代東アジア」上・中・下『沖縄タイムス』1月5日ほか、『月刊文化財発掘出土情報』74号収録、ジャパン通信社、2月

『韓国の古代遺跡 2 百済・伽耶篇』（森浩一・田中俊明共著）、中央公論社、2月
「藤ノ木古墳古墳出土遺物の系譜をめぐって」『季刊考古学別冊 1 藤ノ木古墳が語るもの』、雄山閣、3月
「多くを語る冠の意匠」『朝日新聞』文化欄、1988年12月23日号、『月刊文化財発掘出土情報』75号収録、ジャパン通信社、3月
「カタビ古墳群発掘調査報告」（共著）『1988年度奈良県遺跡調査概報』、奈良県立橿原考古学研究所、3月
「藤ノ木古墳の冠の系譜関係」『斑鳩藤ノ木古墳概報』、吉川弘文館、6月
「鉄の生産－5世紀の鉄素材の供給地をめぐって－」『五世紀の北九州－“倭の五王”時代の国際交流－』、北九州市立考古博物館、7月
「冠・履・馬具の系譜と製作地」『国際シンポジウム藤ノ木古墳の謎』、朝日新聞社、7月
「中山大塚古墳」「東殿塚古墳」「タニグチ1号墳」「新沢千塚古墳群」「波多子塚古墳」「大和6号墳」『日本古墳辞典』東京堂出版、9月
「馬韓文化と鉄」第10回馬韓・百済文化国際学術会議『馬韓文化研究の諸問題』、円光大学校馬韓百済文化研究所、益山、11月

1990年

「東アジアとの交流」『古墳時代の工芸』『古代史復元』7、講談社、1月
「伽耶諸国の領域をめぐって」『東アジアの古代文化』62号、大和書房、1月
「古代の鉄をめぐって」『歴博』39、2月
「馬具の系譜－歩揺付雲珠形飾金具と馬装－」『斑鳩藤ノ木古墳第1次調査報告書』、1月
「古代朝鮮における墳丘の問題」『古代学研究』第123号、古代学研究会、8月
「勢多橋と慶州月精橋」『勢多唐橋－橋にみる古代史－』、206－232頁、ロッコウブックス、六興出版、9月

1991年

『伽耶はなぜほろんだか』（共著）大和書房、2月
「弁辰と伽耶の鉄」『東アジアの古代文化』68号、大和書房、7月
「鉄素材論」『古墳時代の研究』5、雄山閣、9月

1992年

「伽耶と倭一人と文物の交流」『古代史シンポジウム巨大古墳と伽耶文化』、全日空・朝日新聞社、3月
「鉄器と木器」（共著）『図解・日本の人類遺跡』、東京大学出版会、9月
「対外交流」『図解・日本の人類遺跡』東京大学出版会、9月
「新羅・伽耶の政治的領域をめぐる諸問題」『東アジアの古代文化』73号、大和書房、10月
「鉄の生産はいつ始まったのか」『日本の歴史1 原始古代』朝日新聞社、11月
「近畿の古墳と東アジア」『考古学の世界』第3巻近畿、ぎょうせい、11月
「朝鮮渡来の文物」『吉備の考古学的研究』山陽新聞社、11月
「伽耶と倭一人と文物の交流」『巨大古墳と伽耶文化』、角川書店、12月

1993年

「朝鮮考古学と日本古代文化」『考古学その見方と解釈』下 筑摩書房、3月
「朝鮮三国時代における横穴式石室墳の出現と展開」『国立歴史民俗博物館研究報告』47、3月
『雁鴨池発掘調査報告書』（共訳）、大韓民国文化財管理局、学生社、5月
「遼東と高句麗壁画－墓主図像の変遷－」『朝鮮学報』第147輯、10月

1994年

「前方後円墳がなぜ韓国に存在するか」『幻の伽耶と日本』、文芸春秋、142～154頁、1月

1995年

「栄山江流域と慕韓」『展望考古学』、240－248頁、考古学研究会、7月

1996年

「慕韓と秦韓」『碩晤尹容鎮教授停年退任紀年論叢』、197－236頁、同刊行会、大邱、12月

1997年

「加耶史と古代国際関係」(鈴木靖民・早乙女雅博共著)『東アジアの古代文化』90、2月

『高句麗考古学研究』、吉川弘文館、総649頁、2月

『阿波海南大里2号墳発掘調査報告書』(共著)、徳島大学考古学研究室・徳島県海部郡海南町教育委員会、3月

「馬韓の国際関係」『三韓の歴史と文化』、自由知性社、230－250頁、ソウル、10月

「朝鮮古代の王墓」『東アジアの王墓』、21－39頁、はびきの歴史シンポジウム発表要旨、羽曳野市教育委員会、11月

「百済・新羅初期の製鉄遺跡」『最新海外考古学事情Ⅱ』通巻185号、82－88頁、ジャパン通信情報センター、12月

1998年

『増補改訂版伽耶はなぜほろびたか』(共著)、大和書房、3月

『シンポジウム古墳時代の考古学』(共著)、学生社、3月

「吉野川流域の自然と歴史環境」『川と人間－吉野川流域史－』、溪水社、26－48頁、8月

「巨石墳の出現－6・7世紀の阿波」『川と人間－吉野川流域史－』、溪水社、167－199頁、8月

「高句麗・王字文壁画の系譜関係」『高麗美術館紀要』第2号、37～52頁、12月

1999年

『古代東アジアの鉄と倭』、溪水社、総516頁、2月

「北朝・隋唐と高句麗壁画－四神図像と畏獣図像を中心として－」『国立歴史民俗博物館研究報告』第80集、261～325頁、3月

「鉄の生産・流通にみる日朝関係」『図説古墳研究最前線』、新人物往来社、93～99頁、6月

「新羅金京の坊里制」『条里制・古代都市研究』通巻15号、69－93頁、12月

2000年

「開発に伴う発掘相次ぐ」『考古学クロニカル2000』、朝日新聞社、232－236頁、2月

「朝鮮三国と倭国」『考古学による日本歴史』6、雄山閣出版、37－51頁、9月

「渤海墓制と領域」『朝鮮学報』第176・177輯、1～20頁、10月

「倭と栄山江流域」(朝鮮学会大会発表)、10月

「高句麗之前的東北亜」趙天詠『歴史と考古信息』2000－2、吉林省文物考古研究所、12月

「朝鮮三国と倭国」『考古学による日本歴史』6、雄山閣出版、37－51頁、9月

「渤海墓制と領域」『朝鮮学報』第176・177輯、1～20頁、10月

2001年

「高句麗初期の領域と積石塚」『日本人と日本文化』15、『先史時代の生活と文化』『日本人および日本文化の起源に関する学際的研究論文集』所収、463頁、2月

「古代東アジアにおける鉄生産と流通」『先史時代の生活と文化』『日本人および日本文化の起源に関する学際的研究論文集』、397～412頁、2月

「カネガ谷遺跡(鳴門市)の発掘」『徳島新聞』2001年2月26日

「倭と栄山江流域－倭韓の前方後円墳をめぐる－」『朝鮮学報』第179輯、67～112頁、4月

「分かった勝山古墳の築造年代」『徳島新聞』2001年6月21日

2002年

「弁辰と加耶の鉄」歴博国際シンポジウム『古代東アジアにおける倭と加耶の交流』、29～43頁、3月

「キトラ古墳壁画の獣首人身十二支像」『奈良新聞』2002年2月23日

『古代東北アジアにおける都城と墓制の研究』平成11～13年度科学研究費補助金(基盤C2)研究成果報告書』1～196頁、3月

「古代東北アジア諸国と倭」『日本人および日本文化の起源に関する学際的研究成果報告書』Ⅱ、25～128頁、3月

「古代朝鮮の古墳壁画」『東アジアと日本の考古学Ⅱ』、165～188頁、同成社、3月
「古代鉄文化の交流」千田稔編『東アジアと「半島空間」－山東半島と遼東半島』、213～229頁、国際日本文化研究センター、3月
「鳥居龍蔵と東北アジア研究」『論集徳島の考古学』、793～808頁、3月
「高句麗の王陵と王権」『韓半島考古学論叢』、すずさわ書店、331～354頁、5月
「倭と栄山江流域－倭韓の前方後円墳をめぐる－」『前方後円墳と古代の日朝関係』、127～172頁、6月
「解説」『シルクロードと朝鮮半島の考古学』、337～343頁、第一書房、7月
「鉄の生産」『アエラムック古代史がわかる』、朝日新聞社、102～105頁、8月
「北朝鮮の遺跡を訪ねて」徳島新聞2002年9月15日、岐阜新聞2002年9月27日、京都新聞9月25日、沖縄タイムズ9月29日

2003年

「古代日朝の鉄の交易と技術移転」『東アジアの古代文化』114号、17～27頁、2月
「古代鉄文化の交流」千田稔・宇野隆夫編『東アジアと「半島空間」－山東半島と遼東半島』、74～92頁、思文閣出版、1月
「キトラ古墳壁画と唐新羅文化」『徳島大学総合科学部人間社会文化研究』10、74～76頁、3月
「アジア調査－中国東北部・朝鮮半島」「没後50年、今鳥居龍蔵を考える」、徳島新聞2003年2月15日
「中国東北地方と高句麗文物の比較研究」『第27回韓国考古学全国大会高句麗考古学の諸問題』、81～91頁、ソウル、11月
「韓と倭の馬形帯鉤」『樞原考古学研究所論集』14、193～215頁、八木書店、11月
「魏晉・北朝・隋・唐と高句麗壁画」『高句麗研究』16、89～135頁、学研文化社、ソウル、12月

2004年

「弁辰と加耶の鉄」『国立歴史民俗博物館研究報告』110、31～54頁、2月
「晋式帯金具と馬韓・百濟」『地域と古文化』、364～369頁、地域と古文化刊行会、3月
「鳥居龍蔵の東北アジア踏査－朝鮮半島・遼東半島・大興安嶺・蒙古－」『史窓』34、63～85頁、地方史研究会、3月
「高句麗壁画の風景」『韓国古代史学会』、364～369頁、ソウル、3月
「高句麗壁画の風景－山水・日月・狩猟図像－」韓国文化研究財団『青丘学術論集』24、5～44頁、韓国文化研究財団、4月
「土器からみた高句麗の正体性」高句麗研究会、ソウル、6月
「伽耶と倭の国際環境」第55回朝鮮学会講演、10月
「高句麗壁画の風景」『高句麗の歴史と文化遺産』、237～291頁、書景文化社、ソウル、9月

2005年

「再び鳥居龍蔵を考える(上)陵の文化を探る旅」『徳島新聞』2005年2月1日
「再び鳥居龍蔵を考える(下)高句麗遺跡」『徳島新聞』2005年2月2日
「高句麗の都城と古墳群」『中国世界遺産の旅』1、講談社、159～172頁、2月
「高句麗墓制の変遷と王権」"Koguryo Tombs and the Power of Kings" The Harvard Conference on Koguryo History and Archaeology pp.1～31、April 6、2005
「加耶と倭の歴史環境」『朝鮮学報』196、1～55頁、朝鮮学会、7月
「高句麗と日本壁画の比較」"Vergleich von Goguryeo-Wandmalerei mit japanischer Wandmalerei" Wandmalereien aus dem Goguryeo-Konigreich、pp.1～8、21～23、Oktober
<栄山江・長鼓山古墳>、韓国KBS歴史スペシャル、2005年放映
「高句麗壁画の世界」『高句麗シンポジウム日本と高句麗』、九州大学韓国学研究中心、11月
「高句麗の漢城支配と営農」『考古論集－川越哲志先生退官記念論文集－』、757～772頁、川越

哲志先生退官記念事業会、11月

「コメント新羅王京と泗沘都城について(金報告)」『東アジアにおける古代都城と宮殿』『奈良女子大学21世紀COEプログラム報告集Vol.5』(共著)、175～177頁、12月

2006年

「金冠塚」「角抵塚」「四神塚」「高霊池山洞古墳群」「壺杆塚」「皇南大塚古墳」「修山里古墳」「天馬塚」「江西三墓」「江西大墓」「清岩里土城」『日本古代史大辞典』、194～195、240～242、302、366～367頁、大和書房、1月

「東アジアの壁画古墳①」『朝日新聞』2006年1月20日、奈良

「東アジアの壁画古墳②」『朝日新聞』2006年1月27日、奈良

「東アジアの壁画古墳③」『朝日新聞』2006年2月3日、奈良

「東アジアの壁画古墳④」『朝日新聞』2006年2月10日、奈良

「東アジアの壁画古墳⑤」『朝日新聞』2006年2月17日、奈良

「東アジアの壁画古墳⑥」『朝日新聞』2006年2月24日、奈良

「東アジアの壁画古墳⑦」『朝日新聞』2006年2月3日、奈良

「東アジアの壁画古墳⑧」『朝日新聞』2006年3月17日、奈良

「東アジアの壁画古墳⑨」『朝日新聞』2006年3月24日、奈良

「東アジアの壁画古墳⑩」『朝日新聞』2006年3月31日、奈良

「遼代壁画資料」『徳島大学総合科学部人間文化研究』第14巻、33～231頁、2月

「徳島市八人塚古墳測量調査報告」(共著)『徳島大学総合科学部人間社会文化研究』13、61頁、3月

『倭の五王の時代の国際関係に関する研究』科学研究費研究成果報告書、3月

「任那加羅と慕韓」加耶史国際学会議、金海、2006年4月13日

「白虎、唐代の図像に類似」『朝日新聞』2006年6月2日

〈古代ロマンよみがえる国宝・七支刀〉、NHK ハイビジョンスペシャル、2006年6月7日放映

「高句麗王陵と巨大積石塚―国内城時代の陵園制―」『朝鮮学報』199・200、1～36頁、7月

『倭と加耶の国際環境』吉川弘文館、1～357頁、8月

「高句麗壁画の図像学」橿原考古学研究所講演会、2006年9月10日

2007年

「自著を語る」『ISANEWS』Vol.12、26頁、4月

「鳥居龍藏と慶陵調査」『徳島新聞』2007年4月21日

「瑞鳳塚、隍城洞遺跡群、草堂洞古墳、領津里1号墳、栗洞古墳群 皇吾里1・33号墳、仁旺洞古墳群、皇南里151号墳、金尺里古墳群、蛇行鉄器、順興壁画古墳、龍江古墳群、大朱屯古墳群、山垣子古墳群、大城子古墳群、石場溝古墳群、羊草溝古墳群、紅鱒漁場古墳群、北大古墳群、査里巴古墳群、ヨンチャコル古墳群、河南屯古墳、馬滴達塔基、新沢千塚古墳群、新沢109号墳、新沢126号墳、太王陵、牟頭婁塚、湖南里四神塚、修山里古墳他37項目」『東アジア考古学辞典』(共著)、東京堂出版、5月

「大学博物館のある風景」『とく talk』徳大広報No.128、4頁

「東北アジア考古学研究的現在」『現代の考古学1現代社会の考古学』朝倉書店、38～54頁、9月

「高句麗王陵と陵園制―国内城～平壤城時代―」『高句麗王陵研究』韓国東北アジア歴史財団、1～36頁、ソウル、12月)

2008年

「総合討論」『人間文化研究機構連携研究シンポジウム ユーラシアと日本―境界の形成と認識―移動という視点報告書』133～136頁、3月

「百済の製鉄技術と七支刀」『王権と武器と信仰』同成社、658～667頁、3月

「鳥居龍蔵の中国西南部調査一足跡をたどる上」『徳島新聞』2008年5月21日

「鳥居龍蔵の中国西南部調査一足跡をたどる下」『徳島新聞』2008年5月22日

2009年

『任那四県書』問題と歴史教科書『東アジアの古代文化』137号、184～186頁、1月

「高句麗・百濟・新羅・加耶の王陵」『百舌鳥・古市大古墳群展―巨大古墳の時代』『大阪府近つ飛鳥博物館特別展図録』47、122～130頁、1月

「研究の経緯と成果・課題」『国立歴史民俗博物館研究報告』151、1～6頁、3月

『三国志』東夷伝の文化環境『国立歴史民俗博物館研究報告』151、7～62頁、3月

〈日本と朝鮮半島2千年②任那日本府の謎〉NHK・ETV特集5月31日放映

『고구려의 역사와 유적』(田中俊明共著、朴天秀訳)、東北亜歴史財団、ソウル、7月

「高句麗王陵と陵園制」『高句麗王陵研究』韓国語、日本語、51～195頁、4月

「鳥居龍蔵のアジア踏査行―中国西南・大興安嶺・黒龍江(アムール川)・樺太(サハリン)―」『徳島大学総合科学部人間文化研究』第17巻、65～164頁、12月

2010年

「高句麗の考古学史」『考古学ジャーナル』596、ニューサイエンス社、18～21頁、1月

「辰韓・濊・秦韓・新羅・統一新羅」『北東アジアの歴史と文化』149～163頁、北海道大学出版会、12月

「東アジア古代の王権・王陵・境域」『人間文化研究機構連携展示 アジアの境界を越えて』国立歴史民俗博物館、178～185頁、7月

『三国志』東夷伝と天下観『邪馬台国九州と近畿』『大阪府立弥生文化博物館図録』44、64～71頁、10月

『日本と朝鮮半島2000年上』(共著)、日本放送協会、10月

2011年

「蛇行状鉄器再考」『勝部明生先生喜寿記念論文集』216～225頁、同刊行会、2月

「キトラ・高松塚壁画をめぐる古代の歴史環境―唐・新羅・日本の国際環境―」『慶北大学校考古人類学科30周年記念考古学論叢』1149～1257頁、同刊行委員会、大邱、2月

「鳥居龍蔵とアジアの近代」『地域科学FDフォーラム民族と民俗学から考える地域科学』20～49頁、1月

『高句麗壁画と東アジア』学生社、総406頁、4月

「高句麗壁画と東アジア」朝鮮史研究会大会講演、10月22日、立命館大学

〈鳥居龍蔵の旅―東アジア史上の諸民族と現在〉、日本解剖学会第66回中国・四国支部学術集会講演、徳島大学歯学部、11月12日

「倭の五王の時代と渋野丸山古墳」〈渋野歴史シンポジウム〉講演、11月23日

「朝鮮古代の墓制と領域」『講座日本の考古学7古墳時代(上)』590～614頁、青木書店、12月

Ⅲ 海外調査行程記録

1975年07月14日～08月05日(韓国古代復元船「野性号」の航海実験) 07/14福岡―ソウル―慶州07/15慶州(博物館、天馬塚、皇南大塚、雁鴨池)07/16慶州―釜山07/17釜山07/18釜山―梁山―釜山07/19釜山大学校07/20釜山(弘益書林)―金海(金海貝塚、支石墓)―釜山07/21釜山港―07/21対馬厳原港

1977年08月23日～09月06日(韓国) 08/23福岡―釜山(東亜大学校博物館)08/24釜山(東亜大学校博物館、釜山大学校博物館)08/25釜山―馬山―釜山(釜山大学校)08/26釜山―梁山

(梁山夫婦塚)－慶州(邑南古墳群、校洞古墳群、瞻星台、雁鴨池)08/27～08/28慶州(邑南古墳群、国立慶州博物館、皇龍寺跡)08/29慶州－大邱(慶北大学校博物館)08/30大邱9:50－10:30高靈(主山城、高靈壁画古墳、良田洞岩画、池山洞古墳群、国民會館・博物館)－18:00大邱08/31大邱9:40－10:00昌寧(博物館、昌寧碑、校洞古墳群)－大邱09/01大邱－慶山(嶺南大学校博物館)－大田(忠南大学校博物館)－扶餘09/02扶餘(国立扶餘博物館、定林寺、軍守里寺跡、宮南池跡、扶蘇山城)09/03扶餘(陵山里古墳群、東下塚壁画)12:00－13:00公州(国立公州博物館、宋山里古墳群、公州師範大学校)17:10公州－20:00ソウル09/04ソウル(国立中央博物、同和書籍、通文館、国立民俗博物館)09/05ソウル(梨花女子大学校博物館、延世大学校博物館)－ソウル金浦空港－ソウル大学校－ソウル09/06ソウル(九宜洞、石村洞古墳群)－大阪

1981年03月01日～03月24日 (韓国) 03/01大阪－釜山(釜山市立博物館)03/02釜山大学校博物館(礼安里遺物)03/03釜山(福泉洞古墳群、徳川里古墳群)－慶州03/04慶州(国立慶州博物館、聖徳王陵、朝陽洞遺跡、九政洞石室墳、四天王寺跡、望徳寺跡、月城)03/05慶州(興輪寺跡、忠孝里古墳群、金尺里古墳群、感恩寺跡、文武王陵、金冠塚、瑞鳳塚)03/06慶州(慶州博物館；天馬塚鉄鋌、皇龍寺跡、月城)03/07慶州(邑南古墳群)－大邱(啓明大学校博物館)03/08高靈(池山洞古墳群)03/09大邱(慶北大学校講義、不老洞古墳群)03/10大邱－釜山(東亜大学校博物館)03/11釜山(東亜大学校博物館、釜山大学校博物館)03/12釜山－晋州(水精峯古墳群)03/13光州博物館－潘南(大安里古墳群、新村里古墳群)－全南大学校博物館(齊月里遺物など)03/15完山橋停留所－井邑(隱仙里古墳群)－扶安－金堤(碧骨池)－03/16全州(全北市博物館、全北大学校)－裡里(円光大学校博物館)03/17益山(弥勒寺跡、石像物、弥勒山城、王宮里跡)－金馬－扶餘(扶蘇山廢寺)03/18扶餘博物館03/19扶餘－大田(忠南大学校博物館)－公州(公山城、武寧王陵)03/20公州(公州博物館、柿木洞古墳、熊津洞古墳群)03/21ソウル(中央博物館、民俗博物館)03/22石村洞、可楽洞、芳荑洞、夢村土城、風納里土城、漢沙里、岩寺洞03/23ソウル大学校考古美術学科、崇田大学校博物館03/24ソウル(中央博物館)－大阪

1981年10月02日～10月17日 (中国) 10/02大阪15:40－17:00上海18:40－20:25北京－22:30北京站(夜行)10/03大連18:30着(大連賓館)10/04大連(營城子古墳、楼上遺跡付近、双砬子、大連自然史博物館)(東山賓館)10/05大連站08:35－15:45瀋陽站－北陵(遼寧賓館)10/06瀋陽－遼陽(棒台子古墳、白塔、遼陽博物館)－瀋陽(遼寧賓館)10/07遼寧省博物館、瀋陽故宮、新樂遺跡、鄭家洼子遺跡10/08瀋陽08:20－長春(春誼賓館)、吉林省博物館)10/09吉林(吉林芸術学院、吉林省博物館)10/10長春13:30－哈爾濱－阿城縣文物管理处－金上京會寧府－哈爾濱10/11顧鄉屯10/12哈爾濱13:52－20:38吉林10/13吉林(龍潭山城、東團山)－吉林站17:14－(直快172)(夜行)10/14北京站16:25着－北京10/15北京(中国歴史博物館、故宮)－涿縣－北京10/16北京(中国社会科学院考古研究所)10/17北京14:10－19:25東京

1983年08月27日～09月24日 (韓国) 08/27大阪09:30－釜山－釜山大学校博物館08/28固城(東外洞貝塚、松鶴洞1号墳)－馬山－釜山 08/29釜山大学校博物館(福泉洞22号墳鉄鋌)08/30東亜大学校博物館、釜山女子大学校博物館08/31昌原(城山貝塚)09/01釜山－馬山－咸安末山里古墳群09/02中村古墳群－咸陽白山里古墳群－晋州玉峯古墳群09/03釜山市立博物館09/04慶州博物館、九政洞古墳群、九政洞方形墳09/05～09/07慶州(慶州博物館、南山仏跡、茸長寺跡、鮑石亭、掛陵)09/08興徳王陵、西岳洞障山古墳、浜田耕作博士永思碑09/11高靈本館洞古墳群発掘現場09/12慶北大学校博物館、不老洞古墳群、解顔面古墳群09/13嶺南大学校博物館、暁星大学校博物館－山洞09/14義城塔里古墳09/15丹陽－順興於宿知述干墓09/16安東古墳、安東造塔洞古墳群09/17忠南大学校博物館09/18扶餘(陵山里古墳群、亭岩里古墳、扶蘇山城)09/19扶餘定林寺跡09/20扶餘(扶蘇山城、青山城、双北里)－ソウル(雲堂旅館)09/21中央博物館、芳荑洞古墳群09/22湖巖美術館、民俗村09/23ソウル09/24ソウル－大阪

1985年08月19日～08月29日 (中国) 08/19大阪09:40－10:45成田16:50－17:10北京(21:00北京飯店)08/20北京站00:20(哈爾濱行)－17:30長春站－長春市内(長白山ホテル)08/21長春(吉林大学、吉林省文物考古研究所、春誼飯店)－長春站20:03－(夜行)08/22通化站06:20－通化賓館－通化站08:03－12:00集安站－集安県博物館(山城下152号墓帯金具)08/23集安(將軍塚、滿浦鎮、広開土王碑、五盔墳)08/24集安(国内城、角抵塚、舞踊塚)8/25集安(五盔墳、丸都

山城、集安県博物館)－瀋陽08/26瀋陽(新楽遺跡・博物館、遼寧省博物館)08/27瀋陽07:45－09:20北京－北京大学－北海公園－中国歴史博物館〈鎮江文物精華展覽〉08/28中国歴史博物館－琉璃廠08/29北京－大阪

1986年12月12日～01月02日(韓国) 12/12大阪10:45－釜山－釜山大学校博物館12/13居昌－陝川ダム発掘現場12/14居昌東洞古墳－晋州12/16昌原大学校博物館12/17釜山大学校博物館、東亜大学校博物館12/18慶州博物館12/19龍江洞古墳群12/20慶州－榮州(於宿知述干墓、順興壁画墳)－金泉－星州(星山洞古墳群発掘)12/21星山洞古墳群－大邱－慶州12/22慶州(南山土城、都堂城土城、月城、仙桃山城、西岳洞古墳群、月城路発掘現場)12/23慶州発掘事務所、望星窯跡、定康王陵、憲康王陵、伝閔哀王陵、僖康王陵12/24大邱－慶山(嶺南大博物館、林堂洞古墳群)12/25清州(鉄幢竿支)柱－報恩(三年山城)12/26忠北大学校博物館－大田(忠南大学校博物館)12/27光州(光州博物館)－海南(龍頭里古墳、長鼓山古墳、造山古墳)－光州駅21:35－23:30大田12/28光州西部ターミナル08:55－扶餘(国立扶餘博物館、宮南池、定林寺跡)12/29扶餘－公州(公州博物館)－ソウル(教保文庫)12/30ソウル12/31ソウル(中央博物館、通文館)01/01ソウル(石村洞古墳群)01/02ソウル－大阪

1988年02月15日～02月26日(韓国) 02/15大阪－釜山金海空港－釜山(蓮山洞古墳群、釜山立博物館、釜山大学校博物館)02/16釜山－晋州(晋州城、国立晋州博物館、慶尚大学校博物館)02/17晋州－丹城(断俗寺跡石塔)－山清(伝九衛王陵)－実相寺・百丈庵－南原(草村里古墳群)－南原－大邱02/18大邱－善山(洛山里古墳群)－尚州(伝沙伐王陵、化達里三層石塔)－軍威(石窟三尊)02/19大邱－安東(新世洞七層塔、石氷庫、東部洞五層塔、陶山書院、石塔洞模塔、造塔洞五層塔)－義城(石塔洞模塔、塔里古墳群、塔里五層石塔)－大邱02/20大邱－漆谷(松林寺)－大邱(達城公園、啓明大学校博物館)－高靈－陝川(玉田古墳群)－星州(星山洞古墳群)－慶州02/21月城、国立慶州博物館、隍城洞古墳群、四方仏、掘仏寺石仏、栢栗寺、脱解王陵、憲德王陵、興德王陵、淨恵寺十三層塔、獨樂堂、玉山書院、北兄山城、羅原里寺石塔02/22皇南洞古墳群、鷄林奈勿王陵、月城月精橋跡、慶州博物館(南山新城碑)、日精橋跡、仁旺里寺跡、天官寺跡02/23天柱寺跡、沿岸寺跡、閔門城、崇福寺跡、甘山寺跡、慶州工業高校校庭寺跡、靈廟寺跡、財買井跡、蘿井、南潤寺跡、逸聖王陵、天恩寺跡、昌林寺跡、狼山西麓木塔跡、模塔02/24断石山神仙寺、鵲城、芳内里古墳群、金尺里古墳群、孝峴洞三層石塔、法興王陵、西岳洞三層石塔、真興王陵、憲安王陵、文聖王陵、金山斎、忠孝里古墳群、東国大学校、皇龍寺発掘事務所、味吞寺跡石塔、皇龍寺道路遺構02/25普門里跡、真平王陵、普門洞古墳群、祇林寺跡、骨窟庵、獐項寺、普門洞古墳群、錫杖寺跡－釜山02/26釜山－大阪

1988年03月21日～03月30日(韓国) 03/21大阪13:00－ソウル(文化財研究所)03/22ソウル(中央博物館、岩寺洞、二聖山城)－清州(国立清州博物館)03/23慶山林堂洞古墳群03/24ソウル大学校博物館、夢村土城、漢陽大学校博物館03/25中央博物館03/26水原－泰安磨崖仏－雲山磨崖仏－海美邑城－修德寺－聖住寺－無量寺－扶餘03/27定林寺－東南里廃寺－扶餘博物館－益山弥勒寺跡－金堤碧骨堤－羅州(徳山里古墳群、興德里古墳、大安里古墳群・新村里古墳群)－木浦03/28文化財研究所木浦保存処理施設－木浦大学校博物館－海南龍頭里古墳－華嚴寺－智異山03/29鷲谷寺－雙溪寺－晋州城－晋州博物館03/30梵魚寺－金海空港－関空

1989年03月18日～04月01日(韓国) 03/18大阪－ソウル金浦空港－春川(翰林大博物館、江原大学校博物館)03/19南原城－温陽民俗博物館03/20ソウル－春川(翰林大学校博物館、江原大学校博物館、中島積石塚、芳洞里古墳)03/21ソウル(文化財研究所、ソウル大学校博物館)－大邱(慶北大学校博物館、啓明大学校博物館)03/22大邱－江陵－襄陽－03/23江陵駅11:50－18:24慶州03/24慶州博物館03/25東亜大学校博物館〈蔚州華山里城址発掘調査中間評価討論会〉03/26釜山－晋州(国立晋州博物館)－釜山市立博物館(筒形銅器、馬形帶鉤)、慶星大学校博物館(槐亭洞鉄錠)03/27慶星大学校博物館－義昌茶戸里－城山貝塚－昌原大学校博物館03/30皇龍寺道路遺構発掘、千軍里廃寺04/01釜山市博物館－金海空港－関空

1989年07月01日～07月05日(韓国) 07/01大阪－釜山－KBS釜山本社07/02釜山－晋州博物館－釜山市立博物館)07/03釜山－慶州(月城垓字発掘現場)－大邱－大田07/04大田－ソウル(文化広報部)07/05ソウル－大阪

1989年07月31日～08月14日（韓国） 07/31大阪10:10-11:40ソウル（文化財研究所、中央博物館）08/01ソウル-木川土城-公州博物館-大田儒城08/02大田-12:20慶州（国立慶州博物館）-釜山KBS-海雲台08/03シンポジウム（コモドホテル）、〈なみはや〉08月07日に入港延期08/04華山里古墳群・山城、ソラボルホテル-東萊08/05慶州08/06慶州駅09:20-清涼里駅08/07石村洞古墳群、芳萇洞古墳群、夢村土城発掘、岩寺洞08/08ソウル大学校博物館-二聖山城-春宮里石塔08/09公州（公州師範大博物館、宋山里古墳群、公山城）08/10扶餘博物館-扶蘇山城東門発掘-益山弥勒寺-木浦（海洋博物館、郡谷里貝塚）08/11海南（龍頭里古墳）-莞島（将島、法華寺）08/12潘南面古墳群-光州博物館08/13晋州（晋州博物館、慶尚大学校博物館MBC晋州インタビュー）-08/14馬山（中山里古墳群発掘）-義昌（茶戸里遺跡）-金海

1989年09月14日～09月18日（韓国） 09/14大阪-釜山（釜山市博物館、福泉洞古墳群）09/15慶州（慶州博物館、雁鴨池、日精橋）09/16慶州-公州宋山里古墳群-扶餘（官北里跡、定林寺跡、百濟古墳模型館）09/17ソウル中央博物館09/18ソウル-大阪

1989年11月09日～11月19日（韓国） 11/09大阪-12:45ソウル-裡里（円光大学校）11/10円光大学校、弥勒寺、金堤碧骨池-裡里11/11馬韓百濟研究所〈学術会議〉11/12〈学術会議〉11/13円光大学校博物館-光州（全南大学校博物館）11/14光州09:15-大田-忠州-大田駅19:33-大邱11/15大邱（慶北大学校）-善山古墳発掘現場（暁星女子大学校）-大邱（花園古墳群）11/16大邱-慶山（林堂洞、造永洞古墳群）11/17慶州（隍城洞、明活山城、月精橋）-釜山11/18釜山（福泉洞古墳群）11/19釜山-大阪

1990年03月27日～04月02日（韓国） 03/27大阪-12:30金浦空港-春川（翰林大学校博物館、江原大学校博物館、芳洞里古墳群）03/28中島積石塚-襄陽（鰲山里、洛山寺）-東草（権金城、神興寺）03/29平昌（上院寺、月精寺）-江陵（烏竹軒）-溟州（下詩洞古墳群）-蔚珍（鳳坪里新羅碑）03/30榮豊（浮石寺、順興壁画墳）-安東（鳳亭寺、新世洞塔、河回民俗村）-醴泉（東本洞三層石塔、開心寺五層石塔）-開慶（鳥嶺第1関門）-中原-水安堡03/31中原（弥勒寺）-丹陽赤城碑-忠州（彈琴台）-中原（塔坪里七層石塔）-驪州（梅龍里古墳群、神勒寺、英陵）-原州04/01原州-ソウル-江華島（草芝鎮、江華城、高麗王宮跡）04/02景福宮-金浦空港-大阪

1990年07月04日～7月10日（韓国） 07/04樞原-阿倍野10:30-大阪13:10-金海空港-金海（大成洞古墳群発掘現場、首露王陵）07/05梁山古墳群（新基里・北亭洞）発掘現場（東亜大学校博物館）07/06釜山-慶州（隍城洞遺跡）07/07慶州-慶山（嶺南大学校博物館）-大邱（慶北大学校博物館）07/08大邱-07/09金海（大成洞古墳群）07/10金海空港-関空

1990年12月31日～01月07日（中国） 12/31樞原07:32-08:50大阪10:50-13:05上海（豫園）-上海站16:30-18:30蘇州站-南林飯店-22:40寒山寺01/01蘇州（水郷、蘇州博物館）-南京（金陵飯店）01/02南京（南京博物院、石頭城、長江大橋、老虎山、幕府山）01/03南京（南唐二陵、南京大学博物館、蕭景墓、蕭憺墓、蕭恢墓、蕭秀墓、栖霞山石窟寺院）01/04永寧陵-鎮江（鎮江博物館）-丹陽（修安陵、永安陵、泰安陵）01/05興安陵、建陵、莊陵、修陵-陵口-南京-常州（江南之春飯店）01/06常州（淹城、常州博物館）-常州站15:44-18:30上海01/07上海博物館-上海14:10-15:45大阪

1991年02月12日～02月26日（中国・韓国）〈ユネスコ・シルクロード「海の道」調査〉 02/12大阪伊丹空港10:30-13:00上海虹橋空港-上海02/13上海虹橋空港08:05-09:25福州-福州（福建省博物館）-泉州（金泉酒店）02/14泉州入港（フルカム・サラーム号）02/15～02/18シンポジウム開元寺、清真寺、泉州海外交通史博物館、アラ伯穆斯林後裔在陳埭02/19泉州出港02/22韓国釜山入港12:00-（釜山市長主催歓迎レセプション）-慶州（慶州市長主催デナー）（コンコルドホテル）02/23慶州（月城、古墳公園）-慶州博物館館長主催昼食-ユネスコ韓国国内委員会事務局主催デナー02/24セミナー、文化大臣主催デナー02/25冷水里古墳群02/26釜山-大阪。03/06～03/08ユネスコ・シルクロード海洋ルート調査・奈良国際シンポジウム1991

1991年07月12日～07月17日（韓国） 07/12大阪13:10-14:15釜山-釜山東萊07/13〈釜山九州考古学共同研究会〉（釜山大学校博物館）07/14釜山（研究会）-光州07/15咸平新徳古墳、光州（全南大学校）-大邱-慶州07/16慶州（龍江洞古墳群、隍城洞）-釜山07/17釜山-大阪

1991年08月09日～08月30日（ソ連）〈バジリク発掘調査〉 08/09大阪－新潟－ハバロフスク－ハバロフスク08/10ハバロフスク空港－イルクーツク空港－ノボシビルスク空港－ソ連極東民族考古学研究所－ノボシビルスク08/11ノボシビルスク（ヘリコプター）－ゴルノアルタイスク－ウコック08/12～18ウコック08/19キャンプ（ヘリ）－クチャラ岩壁画見学－ウスチカクサ空港－（17:00ごろ政変の情報）－19:10キャンプ08/20岩壁画見学08/21 08/22朝ゴルパチョフ復権のニュース。3日間のクーデターが終結。15:16離陸－17:01ゴルノアルタイスク空港17:40－19:29ノボシビルスク歴史民族野外博物館08/23アカデミー歴史民族研究所シベリヤ支部 08/24野外博物館11:07－13:00ゴルノアルタイスク13:45－14:30デニソフ洞窟08/24デニソフ洞窟08/25カタボン遺跡14:40－14:50シベ積石塚15:00－17:26デニソフ08/26 08/27 08/28ノボシビルスク08/29ノボシビルスク－ハバロフスク08/30ハバロフスク－新潟空港－大阪空港。12月ソ連邦崩壊、ロシア成立。

1992年04月28日～05月06日（韓国） 04/28大阪伊丹空港－釜山04/29馬山－咸安城山山城04/30昌原－昌寧（校洞4号墳発掘）－金海05/01東亜大学校博物館、東義大学校博物館 05/02慶州（皇龍寺跡発掘）－大邱05/03大邱09:09－セマウル号－ソウル駅－風納洞土城05/04ソウル（文化財研究所、百済開発研究院）05/05北漢山城05/06金浦空港－岡山空港－徳島

1992年10月12日～10月27日（朝鮮） 10/12徳島空港08:25－09:35大阪13:35－上海17:10－北京10/13北京－故宮博物館〈文物精華展〉－北京15:00－16:35ピョンヤン順川空港10/14社会中国社会科学院歴史研究所との交流会－江西三墓－徳興里古墳（NHK撮影）10/15平壤城（七星門、乙密台、玄武門）－大城山城、安鶴宮跡10/16朝鮮歴史博物館－金日成綜合大学－楽浪区域－平壤城（万寿台、大同門）－平壤城碑石（人民大学広場）10/17沙里院－信川－安岳3号墳－長寿山－黃州山城－ホテル（NHK取材陣）－平壤駅20:50－夜行10/18咸興駅着05:40－新興山旅館－咸興歴史博物館－真興王磨雲嶺・黃草嶺碑－支石墓10/19咸興駅02:50－04:10高原駅－（専用車）－07:08元山松寿園、元山観光ホテル－08:10通川（旧邑里古墳、山城付近）－待虫台・待中湖－金剛山鉄道線路敷－14:15新坪－太白山脈越え－16:30ピョンヤン－ホテル（懇談会）10/20中国集安訪問班出発。平壤（大城山城、安鶴宮跡、高句麗井戸跡）10/21平壤（平壤城、歴史博物館、土浦里・南京里・湖南里古墳群）－開城（民族旅館）10/22開城（恭愍王陵、成均館跡（高麗博物館）、大興山城）10/23開城（満月台、羅城、瞻星台、南大門）10/23開城－ピョンヤン（美術博物館、民俗博物館）10/24ホテル08:15－順川空港－10:00北京首都空港－北京市内－10/27北京－上海－成田10/28羽田19:00－徳島

1993年03月24日～04月07日（韓国） 03/24徳島07:40－大阪－ソウル金浦空港－ソウル（幸州山城）－高陽（碧蹄館跡）－揚州（桧巖寺）－ソウル03/25坡州（六溪土城、舟月里）－漣川（通岷里支石墓）－鉄原（到彼岸寺）－抱川－ソウル03/26牙山（李舜臣將軍墓）－洪城（洪城邑城、結城邑城跡、新衿土城、無量里古墳群）－庇仁（五層石塔）－群山03/27金堤（金山寺、碧骨堤）－扶安（鎮西里陶窯跡、來蘇寺）－井邑（隱仙里古墳群、隱仙里三層石塔、知土里古墳群、内蔵寺）03/28長城（白洋寺）－潭陽（邑内里石幢竿、五層石塔、齊月里）－光州（民俗博物館）－長城（鈴泉里古墳）－木浦03/29木浦大学校博物館－靈岩（王仁博士誕伝承地、道岬寺）－海南（支石墓、月松里古墳）－完島（将島青海鎮跡、法華寺跡）03/30光州（全南大学校博物館）－光州空港－金浦空港－04/03晋州－咸安（馬甲塚、院洞10号墳鉄鋌）－徳川里支石墓04/04金海（龜山石室墳）04/06中央博物館－河南04/07ソウル－大阪

1993年10月17日～10月29日（中国） 10/16徳島高速船乗場（南海シャトル）－和歌山港－大阪10/17大阪09:50－10:55福岡12:10－13:40大連－金県（大黒山城）－大連10/18大連－瀋陽（遼寧省文物考古研究所、上柏官屯古城）10/19瀋陽（遼寧省博物館）－撫順（労働公園古城、撫順博物館、高爾山城）10/20撫順－薩爾滸城－元帥林（鉄背山城）－南雜木－木奇城跡－永陵鎮古城－老城－新賓10/21新賓－永陵－桓仁（上古城子墓群、下古城子土城、米倉溝墓）10/22桓仁（五女山城、高力墓子村墓群）－花甸－関馬塋閣隘－集安（集安市博物館）10/23集安10/24集安－沙尖子10/25寛甸－丹東（鬲河尖古城）－九連城古城10/26丹東－鳳凰城山城－本溪（本溪博物館、官山城、下堡山城、小市鎮高句麗墓群）10/27本溪－蘇家屯・塔山山城－遼陽－燕州城－遼陽（遼東城跡）10/28遼陽－析木城支石墓－英城子山城－蓋縣高麗城山山城－大連10/29

大連13:15-16:35福岡

1994年03月24日～04月04日（韓国） 03/24徳島港00:30-大阪南港-大阪10:00-ソウル金浦空港-ソウル(娑婆山城)03/25原州興法寺跡-法泉寺跡-法泉里古墳03/25居頓寺跡-中原七層石塔-樓岩里古墳群03/27三陟-江陵(安仁里古墳群)03/28金剛山展望台03/30春川(翰林大学校)04/02大邱(慶北大学校)04/03慶州駅18:17-20:10釜田駅04/04東亜大学校-鎮海-金海空港-大阪

1994年04月29日～05月08日（中国） 04/29徳島空港10:50-12:40羽田空港12:50-成田空港18:00-21:35北京(天橋賓館)04/30北京09:15-10:55長春(吉林省文物考古研究所)04/30長春站18:30(夜行)05/01延吉着08:00着-和龍(西古城、河南古墓、北大墓、貞孝公主墓、帽兒山)-延吉05/02延吉08:30-11:30敦化(敦化賓館)-六頂山墓群-敦化05/03敖東城-城子山城-松江河-白河-長白賓館05/04長白(白山街、靈光塔、長白古城)、惠山(国境)05/05長白05:00-長白山脈-松江河(延辺朝鮮族自治州招待所)09:00-(列車)-15:30通化(自安山城)-列車05/06長春08:24着-吉林省文物考古研究所-長春站-列車05/07北京站10:50-北京大学(博物館)05/08北京09:55-14:55成田-羽田18:45-20:00徳島

1994年08月01日～1995年06月30日（韓国） 08/01徳島港-関西空港16:36-金海空港-21:00大邱08/02慶北大学校博物館08/07竹谷洞古墳発掘08/16咸安道項里8号墳発掘08/20安東造塔洞古墳群発掘08/25慶北大学校博士硕士学位授与式08/28光州明花洞前方後円墳08/29光州月桂洞前方後円墳墳輪(全南大学校博物館)-全州08/30国立晋州博物館、慶尚大学校博物館08/31咸安道項里8号墳09/01「崇山江流域と慕韓」執筆09/15大田〈講演会〉(忠南大学校)、博物館(大王銘土器)、09/16註山里古墳群-蔚山09/26「新羅王京」論原稿。慶州隍城洞遺跡発掘09/29慶州(皇龍寺跡)10/02扶餘(第40回百済文化祭)、扶餘博物館10/06「新羅金京と坊里制浄書」10/07扶餘-第7回国際学術会議〈百済社会の諸問題〉10/10慶州10/16〈高句麗展〉(大邱芸術会館)10/21釜山(釜山市博物館・慶星大学校・東義大学校の鉄器調査)10/27-28大学博物館協会大会(陸軍士官大学博物館)-漣川三串里積石塚-敬順王陵11/05-06〈韓国考古学会全国大会〉(釜山大学校)11/10全州博物館〈高句麗模写展〉-竹幕洞遺跡11/11〈国際学術講演会〉-光州博物館11/12福泉洞38号墳発掘(甲冑・鉄鋌等)11/16〈第3回文化財研究所国際学術大会; 東アジアの青銅器文化〉(国立民俗博物館)11/16清州博物館-鎮川石張里製鉄遺跡発掘11/18〈慶北大学校大学院史学科学学位請求論文発表〉11/19吉林市博物館火災記事(朝鮮日報)11/25忠北大学校博物館11/27東国大学校博物館11/28文化財研究所11/29春川(翰林大学校博物館、鳳儀山城)11/30洪川(三層石塔)-五台山(上院寺、月精寺)-江陵(溟州城跡)12/01東海(長安)城跡-蔚珍(蔚珍碑)-盈徳12/02冷水碑-興徳王陵-玉山書院-北兄山城-岬山寺12/03月城12/04月城-鵲城-金尺里古墳群-大邱12/05善山-尚州(屏風山)-安東12/06安東造塔洞古墳-順興(壁画墳)-丹陽赤城碑-忠州12/07忠州市立博物館-忠州山城-中原高句麗碑・中央塔12/16嶺南埋蔵文化財研究院開院式12/20高靈池山洞古墳群発掘01/17阪神大震災09:00のKBSニュース。23:00〈ニュースライン〉日本大地震(死亡1456人、行方不明1068人)02/07金海空港-関空-淡路島-徳島02/19徳島-大阪-釜山-大邱02/26江陵(滅土城、江陵大学校博物館、関東大学校博物館)03/15東大邱駅14:51-榮州-清涼里駅03/16ソウル大学校博物館03/16清涼里駅-春川駅-翰林大学校博物館-萬泉里石室墳03/17春川駅-清涼里駅-議政府03/18〈高句麗壁画展〉(KBS)-大邱03/21高靈池山洞古墳群発掘03/22大邱-濟州島03/23拏山03/24濟州大学校博物館(MBC濟州インタビュー)-北村岩陰-城邑民俗村03/25法華寺-郭支里貝塚-龍潭山支石墓-郷校-濟州邑城03/27濟州空港-木浦空港-木浦海洋博物館-月南寺跡03/28珍島-海南-海南-始終面万樹里古墳-羅州潘南面古墳群-光州明花洞古墳-月桂1・2号墳03/29光州-泰安寺-順天支石墓公園-泗川-固城松鶴洞古墳群-馬山03/30馬山慶南大学校博物館04/09道洞龍岩山城04/10大邱-扶餘(文化財研究所)-公州(公州博物館、公州大学校博物館)-扶餘(宮南池)04/11扶餘文化財研究所、扶餘博物館、陵山里古墳群発掘現場04/13大邱大学校博物館04/15高靈池山洞古墳群(鉄鋌出土)04/18昌寧(火旺山城)04/19金海空港、藤池澄子さんら来韓。小泉顕夫先生ゆかりの地訪問04/22科学技術研究会(大田)04/23馬山-固城-泗川04/24河東(南山里古墳群、南山土城、

姑城山城)04/27慶州富山城04/29嶺南考古学会第4回大会(国立大邱博物館)05/02慶州西兄山城05/06中央博物館〈スキタイ展〉05/07宗廟大祭、阿旦山城05/09忠州薔薇山城05/12南山新城05/13高靈池山洞古墳群－南原(月山里、斗洛里古墳群)－雲峰05/15全州博物館05/17宜寧(博物館、中里古墳群)－三嘉古墳群05/19智異山－華嚴寺－泉隱寺－全州－南原満福寺跡05/20円光大学校－扶餘(扶餘博物館、青馬山城、宮南池、石城山城)05/26水原(韓国文化研究院、京畿大学校)－ソウル05/28義城－安東06/30釜山－大阪

1995年10月22日～11月06日(中国) 10/22大阪09:40－11:40大連(金州大和尚山城)10/23大連－蓋州(高麗城子山城－海城(海城賓館)10/24海城(英城子山城－遼陽(白塔、遼東京城、東京陵)(遼陽賓館)10/25遼陽－燕州城－瀋陽(遼寧省博物館、遼寧省文物考古研究所)(中山大酒店)10/26瀋陽(塔山山城)10/27撫順－南雜木－永陵－新賓10/28新賓－転水子山城－通化(赤柘松古城)10/29通化－財源(霸王朝山城、望波嶺関隘)－集安10/30集安(牟頭妻塚、環文塚、下解放31号墳、將軍塚、臨江塚)10/31山城子山城(09:10～18:00)11/01禹山下墓群、麻線溝墓群－雲坪里墓群－七個頂子関隘－桓仁11/02桓仁(五女山城、ダム湖)11/03桓仁(下古城子土城、上古城子墓群、湾々川積石塚、聯合積石塚)－寬甸－虎山山城－丹東11/04丹東賓館(日本テレビロケ)－岫岩(娘娘城山城)－庄河11/05庄河－吳姑城－城山山城－瓦房店11/06瓦房店－大連－福岡－大阪

1996年05月11日～05月25日(中国) 05/11大阪－北京－中国歴史博物館05/12北京空港－瀋陽空港－石台子(石台子山城)－鉄嶺05/13催陣堡(観音閣山城、青龍山城)05/14鉄嶺－開原(龍潭寺山城)－西豊(西岔溝)05/15西豊－涼泉(城子山山城)－和龍(張家堡山城)05/16開原八棵樹(古城子山城)－清原(英額門山城)05/17清原－南山城(南山城山城)－東豊横道河子(城址山山城)－梅河口05/18梅河口－大通溝(羅通山城)－柳河05/19柳河－通化(自安山城)05/20通化－石湖(石湖関隘)－鴨園(二道溝関隘)－通化5/21通化－集安(霸王朝山城)－通化05/22通化－快大茂(赤柘松古城)－黒溝山城－桓仁05/23桓仁－木孟子(高俟地山城)－本溪05/24本溪－辺牛(辺牛山城)－瀋陽空港－北京空港05/25北京－大阪

1996年07月26日～08月02日(韓国) 07/26徳島港－関空10:00－11:30釜山－釜山市博物館－釜山駅－大邱(慶北大学校博物館)07/27嶺南考古学会・九州考古学会合同研究会〈4～5世紀の韓日関係〉(啓明大学校博物館) 07/28 07/29慶北大学校博物館07/30大邱－大田－扶餘(国立扶餘博物館)07/31扶餘－公州(国立公州博物館、宋山里古墳群発掘現場)－ソウル08/01ソウル大学校博物館08/02韓国文化財研究所、国立中央博物館－金浦空港13:40－関空

1996年10月30日～11月05日(韓国) 10/30徳島港0709－08:30関空10:00－11:30釜山金海空港－釜山(釜山大学校博物館、釜山市博物館福泉洞分館)－大邱10/31慶北大学校博物館11/01～11/03第30回韓国考古学全国大会〈新羅考古学の諸問題〉(慶州教育文化会館)11/04慶州(新羅王京)－釜山11/05釜山－大阪

1997年03月13日～03月19日(韓国) 03/13徳島港－大阪－ソウル03/14シンポジウム〈梁山江流域の歴史と文化〉03/15金浦空港－光州空港－羅州(伏岩里古墳群、角化洞石室墳、雲中洞古墳)－大田03/16大田－天安(清堂洞古墳群、月支国問題)－ソウル(中央博物館)03/17新村－延世大学校博物館－風納洞土城発掘(環濠・住居跡・土器窯)03/18峨嵋山高句麗堡壘城－夢村土城03/19中央博物館－金浦空港18:30－関空

1997年03月24日～04月04日(韓国) 03/24大阪14:20－15:45釜山－影島(朝島貝塚、東三洞貝塚、太宗台)03/25釜山港－忠武港(統営)－巨濟大橋－沙等(烏良城)－巨濟(玉山金城、芳下里古墳群、巨濟博物館)－多大浦－長承浦03/26長承浦(鵝洲洞三層石塔－鵝洲洞支石墓)－新縣(古縣城)－沙等城－忠武(忠烈祠)03/27忠武－三千浦－泗川(船津里城、船津里古墳)－順天(順天大学博物館、順天城)－麗川(興国寺、龜船造船所)－麗水03/28麗水－順天－筏橋－烏城(冬老古城)－高興(興陽邑城)－道家(鳳龍里古墳群)－南陽(南陽県城跡)03/29順天－河東(錢島里城跡)－南海(古鼎城、平山浦鎮城跡)－辰橋(古梨里遺跡)－晋州(晋州博物館)－昌原(昌原大学校博物館)03/30昌原－晋州(晋州城、大坪遺跡)－釜山03/31釜山大学校博物館(下岱遺物)04/01釜山－慶州04/02慶州博物館－大邱(慶北大学校博物館)04/03大邱04/04大邱－釜山－大阪

1997年04月24日～05月06日（中国） 04/24徳島港20:20-22:20泉佐野04/25関空09:45-12:00上海（上海博物館）（和平賓館）04/26上海10:30-12:00鄭州-大河村遺跡、博物館、鄭州商城、鄭州市博物館04/27鄭州市-密県打虎亭漢墓-中岳廟-少林寺-二里頭-洛陽城-洛陽燒溝漢墓04/28洛陽古墓博物館、景陵、長陵、北魏洛陽城、永寧寺跡04/29洛陽市博物館-洛陽站17:28-夜行04/30漢口08:36着-武漢大学05/01武漢市博物館、湖北省博物館05/02江陵（紀南城）-荊州博物館、05/03大冶銅鉞跡、大冶博物館、鄂州博物館05/04京劇05/05武漢09:50-上海空港-上海（上海博物館）05/06上海12:20-大阪

1997年10月23日～11月04日（中国） 10/23成田空港10:40-13:25北京10/24北京-瀋陽-魏家樓子古城-燕州城-遼陽（遼陽博物館）（遼陽賓館）10/25遼陽-千山-鞍山-海城（英城子山城）-瀋陽10/26瀋陽（遼寧省博物館-撫順（高爾山城、労働公園古城）（撫順友誼賓館）10/27撫順-永陵（永陵鎮古城、老城、旧老城高句麗山城）-新賓-英額（英額山城）-通化10/28通化-石湖（石湖関隘）-関馬牆関隘-集安（集安市博物館）10/29集安（牟頭婁塚、環文塚、下解放31号墳、將軍塚、広開土王碑、太王陵、五盔墳、臨江塚）10/30集安（山城子山城、山城下墓群）10/31集安-麻線溝（千秋塚、西大塚）-小板盆嶺-沙尖子-北溝（北溝関隘）-桓仁11/01桓仁（五女山城、下古城子土城）-寬甸11/02寬甸-鳳城（劉家堡土城、鳳凰山城）-丹東（鬲河尖古城）11/03丹東-庄河-城山（城山山城）-星台（吳姑城）-瓦房店 11/04瓦房店-金州（大和尚山城）-大連14:05-17:45成田

1997年11月03日～11月14日（韓国） 11/03大阪10:00-11:20釜山（慶星大学校博物館、大成洞29号墓等、釜山市立博物館）-慶州11/04慶州（文化財研究所、東川洞道路跡）11/05大邱-尚州（青里古墳群、屏風洞古墳群発掘）11/6光州-木浦-光州11/07韓国考古学会全国大会（全南大学校）-羅州伏岩里古墳群11/08伏岩里古墳群11/09光州-清州博物館特別展〈鉄の歴史〉11/10清州-忠州（完五里製鉄跡、鉄鉞山）-ソウル 11/11峨嵋山城、峨嵋山第4堡壘城、風納洞土城11/12中央博物館（九宜洞）、二聖山城11/13金浦空港-金海空港-茶戸里墓群発掘11/14大成洞古墳群-金海空港-関空

1998年03月28日～04月05日（韓国） 03/28大阪-釜山-金海杜洞墓群（釜慶大学校、釜山市立博物館発掘）03/29大邱-永川新月洞三層石塔-金谷寺跡-慶州（慶州博物館敷地内道路遺構、聖徳女子高遺跡）03/30東川洞-金海空港14:00-15:00江陵空港-江陵客舎跡、江陵大学校博物館03/31関東大学校博物館、峨嵋山城04/01江陵-清州（清州博物館、忠北大学校博物館、清州大学校）04/02公州博物館-扶餘博物館、扶餘文化財研究所（宮南池木簡）-大田-大邱04/03慶北大学校博物館（皇吾里5号墳遺物）04/04晋州〈嶺南考古学会大会〉-釜山東萊04/05福泉洞古墳群-金海空港-大阪

1998年04月25日～05月08日（中国） 04/25大阪10:00-11:50ソウル（中央博物館、民俗博物館）04/26ソウル09:50-10:45瀋陽（遼寧省博物館）-撫順（高爾山城、労働公園玄菟郡治推定地）（撫順友誼賓館）04/27撫順-新賓（永陵、永陵鎮土城、旧老城高句麗山城、老城）-通化（自安山城）（通化賓館）04/28通化-清河（関馬牆関隘）-集安（博物館、將軍塚、広開土王碑）（集安賓館）04/29集安（山城子山城、山城下墓群、千秋塚、西大塚）-桓仁（桓仁賓館）04/30桓仁（五女山城）-本溪（富佳大酒店）05/01本溪-瀋陽-ソウル18:45-20:30福岡-熊本05/02熊本-徳島

1998年10月16日～10月28日（中国） 10/16徳島港18:50-和歌山港-大阪10/17関空-ソウル（文化財研究所、中央博物館、軍事博物館）10/18ソウル09:50-11:40瀋陽-山龍支石墓-馬和寺山城-10/19釣魚台土城10/20揮發城-紙房溝山城10/21盤石（大馬宗嶺山城）-烟筒山山城-吉林（龍潭山城）10/22龍潭山城-東团山城-三道嶺山城10/23吉林-榆樹（大坡古城、老河深墓、上河灣山城）10/24徳恵-農安10/28瀋陽-ソウル-大阪

1999年03月25日～03月31日（韓国） 03/25大阪-ソウル-江華島支石墓-河帖面五層石塔-江華山城-高麗高宗洪陵-江華山城（南門）03/26仁川寿峰公園内支石墓、安山官衙跡、邑城跡-城南南漢山城-漢沙里遺跡-岩寺洞遺跡03/27ソウル-中部高速道路陰城休憩所遺物展示館-鎮川郡石張里製鉄跡-清州（新鳳洞古墳群、上党山城、国立清州博物館）-忠州（忠州博物館、倉洞廢鉄鉞山）-水安堡03/28清風文化財団地（望月山城）-堤川長樂洞七層模磚石塔-義

林池－竹嶺－慶尚北道奉化(北枝里磨崖如来座像)－安東(陶山書院)03/29安東(東部洞五層塔、新世洞七層塔、造塔洞塔、造塔洞古墳群、安東大学校博物館)－英陽(化川洞三層石塔、三池洞、三層模塔石塔、龍化洞三層石塔、鼎洞五層模塔石塔、幢干支柱、鳳甘五層模塔石塔)03/30慶州(龍江洞苑池、陰城洞製鉄跡)－蔚山(彦陽邑城、石南寺)－清道郡(雲門寺)03/31慶州－金海空港－大阪関空

1999年04月29日～05月09日(ロシア・中国・ロシア) 04/29徳島08:00－11:00大阪12:35－14:30新潟空港16:40－19:00ウラジオストック04/30ウラジオストック－ウスリースク(スタロリエチェンスカヤ土城、ユジノウスリースク土城)－ウスリースク05/01ウスリースク－シニェリニコヴォ山城－ブルカフカー大城子古城－牡丹江05/02牡丹江－東京城(上京龍泉府、興隆寺、三靈屯墓群)－牡丹江05/03東京城(上京龍泉府)－敦化(六頂山墓群、貞惠公主墓)05/04敦化－官地二十四石－延吉05/05延吉－西古城－河南屯古城－貞孝公主墓－延吉05/06延吉－琿春(八連城、温特赫部城)－琿春05/07琿春－土城－長嶺子－ハサン－クラスキノ城－ハサン05/08ハサン－スラビアンカーボシェト湾－ウラジオストック(極東科学アカデミー研究所・博物館)05/09ウラジオストック－アルセーニエフ博物館－ウラジオストック14:50－15:15新潟空港17:50－大阪－19:45新大阪－徳島

1998年10月16日～10月28日(中国) 08/22関空10:20－12:50台北中北空港－台北(故宮博物館)08/23台北－烏来－(トロッコ)－烏来文化村(泰雅族)－台北14:30－17:45花蓮08/24花蓮－台東(台東県文化センター、原住民展示室)－高雄08/25高雄－台南(安平古堡、天后宮、民芸館)－台北08/26関渡(媽祖宮)－龍山寺－空港14:15－17:40関空

1999年10月17日～10月28日(中国) 10/17徳島港06:09－07:40大阪09:45－13:20瀋陽(桃仙)空港－撫順－新賓－清原(英額府山城)－山城鎮(城址山山城)－梅河口10/18梅河口－通化(自安山城)－白山－臨江(臨江賓館)10/19臨江－樺甸子古城－東甸子積石冢第2地点－第1地点－西馬鹿泡子積石塚－夾皮溝城址－東馬城址－長白10/20長白(靈光塔、長白古城)－撫松－楡樹川(楡樹川山城)－撫松(撫松賓館)10/21撫松－万良(大方頂子山城)－二道白河－富興(松月山城)－和龍(和龍賓館)10/22和龍－勇化(三層嶺山城惠章渤海墓)－和龍－八家子(西古城、八家子山城、北大墓群)－龍水10/23龍井－帽兒山－延吉－琿春(干溝子山城、薩基城、八連城、温特赫部城)－琿春10/24琿春－延吉(興安古城、城子山山城、延吉市博物館)10/25延吉－石門(城門山山城、五虎山山城)－安図－敦化10/26敦化(敖東城、城子山山城)－蛟河－吉林(龍潭山城)－吉林(霧松賓館)10/27吉林－長春(吉林省博物館、吉林大学)－瀋陽10/28瀋陽(遼寧省博物館)－瀋陽14:30－14:30大阪

1999年11月02日～11月02日(韓国) 11/02大阪13:10－ソウル金浦空港－ソウル(中央博物館、文化財研究所)11/03ソウル(中央博物館〈百濟特別展〉)－扶餘(扶餘文化財研究所)11/04扶餘－公州(国立公州博物館、公州大学校博物館)－公州鷄足山城11/05大田－大邱(韓国考古学大会全国大会、啓明大学校)11/06大邱－慶州11/07慶州(皇吾里100番地古墳発掘現場)－金海空港12:30－13:40関空

1999年12月24日～01月02日(韓国) 12/24大阪－釜山－金海博物館(1998年7月開館)12/25慶州(博物館、月城、日精橋、雁鴨池、邑南古墳群、西岳洞古墳群)12/28慶州－大邱－光州12/29全南大学校博物館－羅州－木浦大学校博物館12/30月也面古墳群(木浦大発掘)－羅州(潘南面古墳群、松堤古墳、竹東洞五層石塔)－馬山01/02金海博物館－金海空港－関空

2000年02月14日～02月16日(韓国) 02/14徳島港07:20－08:45大阪関空－釜山金海空港－馬山－固城(松鶴洞1号墳発掘現場)02/15固城－慶州(路東洞発掘現場、鬼橋発掘現場)02/16慶州－釜山金海空港

2000年04月05日～06月04日(中国) 04/05徳島06:20－08:40関空11:20－上海15:55－17:25武漢－武漢大学(專家楼)04/06武漢大学(3～9世紀研究所)04/07武漢大学・研究発表〈3～5世紀の東アジアの国際関係〉04/11湖北省博物館、湖北省文物考古研究所04/24武昌駅－13:30長沙(長沙市文物考古研究所・走馬楼木簡)04/25湖南省博物館、馬王堆展示館04/26長沙黄花国際空港－昆明04/27昆明－石寨山－昆明04/28雲南大学(博物館)－昆明13:00－武漢天河空港04/29武漢(盤龍城)05/05武漢天河空港12:00－西安－15:30西北大学05/12咸陽国際

空港14:30-18:00敦煌-莫高山荘05/13敦煌(莫高窟、敦煌市博物館)05/16始皇帝陵05/17順陵05/18杜陵05/19陝西省歴史博物館、陝西省考古研究所、半坡遺跡 05/20西安駅09:30-16:00洛陽(洛陽賓館)05/21北魏洛陽城、洛陽博物館05/22洛陽17:00(夜行)05/23南京着07:30-南京大学(教育学院宿白所)-南京博物院、南京市博物館05/24南京城、石頭城05/25南京大学博物館・北園大墓帯金具05/27~06/02淳化墓、宋野堡墓、長寧陵、蕭暎墓、蕭偉墓06/03南京10:30-14:30上海(上海博物館)06/04上海浦東空港14:50-関空

2000年06月08日~06月12日(韓国) 06/08大阪-釜山06/09釜山-光州-木浦06/10〈前方後円墳シンポジウム〉(木浦大学校)06/11光州-晋州(慶尚大学校博物館)-宜寧-釜山06/12釜山-大阪

2000年07月15日~07月21日(韓国) 07/15徳島-下関(下関市立博物館講演会)-下関07/16下関-博多駅-博多港12:15-(ビートルズ)-14:55釜山港-釜山(東亜大学校博物館、釜山大学校博物館)07/16釜山-馬山-固城(松鶴洞古墳発掘)-四川-三千浦-14:45勒島15:00-晋州-22:15ソウル07/17ソウル(国立中央博物館、文化財研究所、ソウル大学校博物館)07/19~07/20「考古学からみた弁・辰韓と倭」シンポジウム-ソウル07/20ソウル金浦空港-金海空港-釜山東萊07/21釜山-大阪

2000年07月31日~08月15日(中国) 07/31徳島06:20-08:45関空10:20-13:00西安-西北大学賓館08/01礼泉(昭陵、昭陵博物館)08/02西安站-西北大学-西安站16:20-列車-08/03固原站着-開元賓館-固原博物館08/04秦長城08/05銀川(西夏王陵、西夏王陵博物館)08/06雲武窯・土城-水道溝-大夏統万城08/07鹽地県博物館、寧夏博物館08/08銀川-固原(固原城)08/09長城08/10田弘墓08/12固原08:30-西安咸陽国際空港(航空飯店)-18:00西北大学08/13長安城、明德門跡08/14咸陽国際空港-孝陵-順陵08/15陝西省考古研究所-西北大学賓館-咸陽国際空港14:55-19:55大阪

2000年10月15日~10月20日(中国) 10/15大阪15:35-17:05上海10/16上海10:20-12:00鄭州-河南省文物考古研究所10/17鄭州(密県打虎亭漢墓、西平県、古西平製鉄跡)10/18鞏県鉄生溝-少林寺-中岳廟10/19河南省博物院、鄭州市博物館、古栄鎮製鉄跡-鄭州16:10-17:40上海10/20上海11:10-14:05関空

2000年10月25日~11月04日(中国) 10/25大阪10:05-13:15瀋陽桃仙空港-撫順(撫順市博物館)-太平(太平溝山城)-撫順(撫順友誼賓館)10/26撫順-大夥房ダム-乗船-薩爾溝山城-鉄背山城-元帥林-桓仁(桓仁賓館)10/27桓仁-大川(建設山城)-通化-臨江-二道河子墓群-臨江(臨江賓館)10/28臨江-八道溝-蛤蟆川墓群-十二道溝墓群-十二道湾関隘-下威子遺址-長白(長白賓館)10/29長白(霊光塔)-金華墓群-良種場西北墓群-干溝子墓群-十四道溝遺址-安楽墓群-臨江(臨江賓館)10/30臨江(臨江城、臨江遺址)-松樹-西川墓群-永安遺址-黄泥威子遺址-撫松-二道白河(信達賓館)10/31二道白河(宝馬城址-万宝古城-六頂山-敦化(江東二十四石)-敦化(敦化賓館)11/01敦化-通溝嶺関隘、通溝嶺山城-官地二十四石-鏡泊湖-東京城(上京龍泉府)-寧安11/02寧安-東京城(興隆寺、三霊屯墓群)-春陽(中大肚川遺跡)-延吉11/03延吉-龍井-西古城、河南屯古城-延吉-延吉站17:02-06:46瀋陽站-瀋陽(遼寧省博物館)-瀋陽桃仙空港14:25-19:30大阪

2000年11月23日~11月27日(韓国) 11/23関空-釜山-慶州11/24~11/25慶州〈「皇南大塚の諸照明」-大邱-金海11/27国立金海博物館(密陽製鉄跡遺物)-金海空港-関空15:10-15:51津名港-18:18徳島港

2001年07月05日~07月09日(韓国) 07/05関空09:45-11:00釜山金海空港-亀浦-大田-公州07/06国立公州博物館07/08公山城-ソウル07/09土地博物館-仁川空港

2001年08月03日~08月21日(中国) 08/03関空15:45-17:30青島08/04青島-14:19済南(山東省博物館、老堂山)08/05済南-邯鄲-鄴城-蘭陵王陵-西陵08/06邯鄲-響堂山石窟-太原08/07五台山-仏光寺-邯鄲-太原08/08太原-大同08/09~10大同(北朝史学国際学術研討会、雲崗石窟)08/11大同(華嚴寺、大同博物館、善化寺、平城明堂、九龍壁)08/12方山永固陵、万年堂、思遠寺08/13雲崗石窟08/14大同-盛楽城-ホリソール-盛東城-呼和浩特08/14呼和浩特(白道城)-武川鎮城-美岱村土城08/16内蒙古博物館、大召(無量寺)-五塔寺

(清真大寺)－呼和浩特16:30－17:50北京－北京駅21:33(夜行)08/17赤峰駅07:10着－建平涼源(牛河梁)－朝陽(博物館、北塔)(朝陽賓館)08/18朝陽11:00－12:15北票(馮素弗墓)08/19朝陽(朝陽市博物館、佑順寺、袁台子墓、十二台子)08/20朝陽空港09:00－10:15北京空港－王府井－北京大(勾園)08/21北京空港09:40－14:45閑空

2001年04月02日～04月09日(エジプト) 04/02大阪14:00－20:55カイロ04/03考古博物館－ピラミッド(クフ王墓、メンカウラー墓)、スフィンクス04/04カイロ空港06:15－07:15アブシンベル宮殿－アスワン空港04/05アスワン空港06:15－ルクソール(カルナック神殿、ルクソール神殿)04/06メムソン石像物－王家の谷(ラメセス6・9世墓)04/07メンフィス04/08カイロ04/09大阪

2001年09月23日～月07日(韓国) 09/23大阪－釜山－金海博物館(楽浪展準備中)09/24機張城09/25慶州－浦項10:00－13:00鬱陵島(南西洞・南陽洞・玄圃里古墳群、竹岩古墳)09/26島一周(遊覧船)09/27鬱陵島資料館、郷土資料館(農具)09/28鬱陵島－江陵(客舍門、関東大学校博物館、柄山古墳群発掘)－利川09/29利川－京畿道博物館－ソウル－大阪09/30和歌山港－徳島港

2001年10月24日～11月07日(中国) 10/24大阪10:05－13:15瀋陽－長春10/25長春－吉林(龍潭山城、帽兒山)－蛇河－拉法(拉法山城)－敦化10/26敦化－東陽(東四方台山城、広興山城)－汪清10/27汪清－百草溝－亭岩(亭岩山城)－琿春10/28琿春－春化(通肯山山城、城牆砬子山城)－図們10/29図們－豆満江－船口(船口墓群、船口山城)－智新(金谷山城)－延吉10/30延吉－龍井－富裕(朝東山城)－三合(清水山城－延吉)10/31延吉－宝興－城子溝山城－石門(城門山)－安図－敦化11/01敦化－漂河(横道子山城)－蛇河－六家子(六家子山城)－吉林11/02吉林－長春11/03長春07:15－10:30瀋陽－瀋陽站14:40－17:34錦州11/04錦州－義県(万仏堂石窟)－錦州11/05錦州－大石橋(石棚谷支石墓、金牛山旧石器遺跡)－蓋州11/06蓋州－瀋陽11/07瀋陽14:25－19:30大阪

2001年12月09日～12月16日(韓国) 12/09大阪－ソウル12/10ソウル大学校博物館袁台子墓復元模型)－忠州(忠州博物館、完五里製鉄跡)－鎮川(石張里製鉄跡)－大田儒城12/11国立全州博物館－竹幕洞遺跡12/12晋州(慶尚大学校博物館)12/13釜山(東亜大学校博物館、東義大学校博物館)12/14慶州博物館12/15中央博物館12/16ソウル－大阪

2002年03月03日～03月09日(韓国) 03/03大阪－釜山金海空港－済州島(国立済州博物館)03/04済州島(国立済州博物館、済州文化財研究院)03/05済州大学博物館03/06済州空港09:00－10:00金海空港－釜山(東義大学校博物館)03/07釜山大学校博物館－海雲台古墳群発掘現場－老圃洞－大邱(慶北大学校博物館・考古人類学科、留学生センター)－大邱03/08大邱06:00－08:00光州(全南大学校博物館)－潭陽前方後円墳－光州駅15:10－18:55ソウル03/08文化財研究所、中央博物館－仁川空港－閑空

2002年07月20日～07月27日(朝鮮) 07/20大阪10:05－13:15瀋陽15:10－17:00平壤07/21東明王陵、定陵寺、雪梅里古墳群7/22歴史博物館(鎔范)、大城山城、安鶴宮跡、徳興里古墳、水山里古墳、江西三墓)07/23安岳3号墳－開城(高麗博物館、満月台、南大門)07/24大同江閘門－九月山(九月山城、月精寺)－智塔里土城・智塔里新石器遺跡07/25壇君陵－湖南里四神塚、土浦里古墳群07/26薬水里古墳－双楹塚－黄龍山城07/27順川空港－瀋陽－大阪

2002年08月26日～09月02日(中国) 08/26大阪10:30－12:10青島空港－乳山－石島08/27石島－赤山法華院、張保臯記念塔－山頭－威海08/28威海(威海港、威海博物館)－船－劉公島(甲午戦争博物館)－船－烟台(烟台市博物館)08/29烟台－蓬萊(蓬萊水城、古船博物館、蓬萊古城)08/30蓬萊－烟台港11:00－船－16:30大連港08/31大連－金州(大黒山城、金州博物館)－大連13:40－14:40済南空港09/01済南(山東省博物館)－青州(仏跡、青州博物館)－青島(青島市博物館)09/02青島13:30－16:45大阪

2002年10月23日～11月08日(中国) 10/23大阪－ソウル10/24ソウル10:10－11:00瀋陽10/25～11/01本溪(辺牛山城)－新賓(葦子峪杉松山城)－桓仁(五女山城)－寛甸(石棉村山城、老姑山城、鶏冠山城、高台堡山城)－鳳城(鉛山山城)－岫巖(馬圈山山城、松樹溝山城、老城溝山城)－本溪(草河口山城)－瀋陽(塔山山城)11/02瀋陽－仁川空港11/05大邱博物館11/06

扶餘(国立扶餘博物館、扶蘇山城)11/08ソウル市歴史博物館〈風納里土城特別展〉—仁川空港—大阪

2002年12月17日～12月24日(中国) 12/17徳島—関空—上海—南京12/17南京博物院、中山門12/18蕭景墓、蕭恢墓、蕭秀墓12/19蕭融墓、蕭暎墓、蕭偉墓12/20石頭城—南京大博物館12/20丹陽(陵口、修安陵、景安陵、永安陵12/22初寧陵、蕭宏墓、万安陵、蕭績墓12/23南京—上海12/23上海—大阪

2003年04月02日～08月31日(中国) 04/02徳島05:05—07:35関空10:30—11:30大連12:15—13:00瀋陽(遼寧省文物考古研究所)04/03瀋陽08:15—長春(吉林大学專家留学生第3公寓)04/04吉林大学(遼寧考古研究中心)04/08非典型肺炎(SARS)の流行04/18吉林大学博物館04/22長春站21:05(渾江行快速)(夜行)04/23通化06:24着—バス—集安04/25集安10:00—12:40通化12:45—バス—16:45長春04/28大学(国際合作交流中心)からマスクと体温計、各所で消毒。旅行禁止。吉林大学病院で発症。長春滞在か帰国かの選択。05/01吉林省も流行地域(発症2例、疑似2例)06/11学生の外出禁止解除06/22長春08:18—哈爾濱—06/23阿里河03:15着—嘎仙洞洞窟—阿里河06:54—20:08海拉爾06/24海拉爾07:10—09:47滿州里11:48—(夜行)6/25長春15:23着6/26吉林大学06/27長春08:18—11:30哈爾濱12:00—バス—16:00牡丹江06/28牡丹江—東京城(上京龍泉府)—牡丹江06/29牡丹江—東京城—列車(夜行)06/30吉林05:48着—龍潭山城・東団山城—吉林站14:22—16:02長春07/02長春站11:42(夜行)07/03西安17:22着—西北大学07/05西安城・長安城跡07/13麟德殿跡07/15西安站14:19—10:52集寧南13:57(夜行)07/16林西05:42—09:00林東站—上京城07/18林東18:09—18:40巴林右旗(大板)—白塔子07/19慶陵—ワールインワイハ(ゲル泊)07/20西陵—12:30白塔12:50—16:00巴林右旗—赤峰站22:15(夜行)07/21北京站—天壇—考古研究所—北京西站17:12(夜行)07/22西安着07/23陝西省博物館07/24含元殿跡07/25明德門07/27西安—烏魯木齊—トルファン07/28ベゼクリク石窟寺院—高昌故城07/29烏魯木齊博物館—烏魯木齊空港—西安08/01西安—18:36鄭州—鄭州大学(専家北楼)08/02河南省博物院08/04河南省文物考古研究所08/06鄭州07:20—09:15安陽—臨漳(北朝墓群)—磁県(鄴城)—鄭州08/13鄭州—鞏義(永昭陵、鞏県石窟寺院)08/15鄭州—南京(南京大学外教公寓)08/19南京(南京大学、鼓楼、鶏鳴寺、皇城跡)08/20南京(南京師範大)08/20南京(中山東路)08/26南京(朝天宮、南京市博物館)08/31南京—上海—大阪

2003年09月14日～09月20日(韓国) 09/14大阪—仁川空港—唐城—白石里古墳群—旗安里製鉄跡発掘現場—海美—徳山09/15徳山—海美邑城—泰安(磨崖三尊仏)—安興(安興鎮城)—安眠島(古南里貝塚)—湖月湖—広川—群山(群山大学校博物館)—群山09/16群山—舒川(南山里山城)—務安—海際(円甲寺)—智頭(智頭郷校)—務安—木浦09/17木浦港—紅島—黒山島(黒山山城、邑洞三層石塔、黒山鎮跡)—黒山島09/18黒山島—長山島(道昌里古墳群、長山県城、大城山城)—木浦港09/19木浦(木浦大学校博物館)—珍島(龍蔵山城、松亭里支石墓、南桃石城)—木浦09/20木浦—ソウル金浦空港—仁川(仁川市立博物館)—仁川空港—大阪

2003年10月21日～10月26日(韓国) 10/21大阪—ソウル10/22～25〈高句麗研究会〉10/26ソウル—大阪

2003年12月14日～12月18日(中国) 12/14徳島08:05—関空13:55—上海13:55—15:20西安咸陽国際空港—12/15西安(唐華賓館着01:00)—陽陵—西安12/15研究会(陝西省考古研究所)12/18西安—関空

2003年12月19日～12月24日(韓国) 12/19関空09:50—11:40ソウル—公州(水村里古墳群)12/20公州大学校博物館12/21公州大通寺跡—扶餘(扶蘇山城、月含池、羅城東門、扶餘博物館)12/22扶餘(文化財研究所、王宮跡)12/23扶餘—ソウル(風納洞土城)—果川12/24果川—旗安里発掘—安養—仁川空港—大阪

2004年03月03日～03月08日(韓国) 03/03大阪—ソウル—光州(全南大学校博物館、杓山古墳)—03/03咸平(長鼓山古墳、金山里方形墳)03/05光州博物館03/07大田—ソウル(風納洞土城)03/08檀国大学校博物館—ソウル—大阪

2004年03月24日～03月28日(韓国) 03/24大阪—ソウル(中央博物館、風納洞土城、芳萐洞古墳群、石村洞古墳群)03/24夢村土城—公州(公州大学校博物館)03/25宋山里古墳群、柿

木洞古墳03/26韓国古代史学会(大田)03/27大田－公州(大通寺跡)－扶餘(宮南池、軍守里廢寺、扶蘇山城、陵山里)－益山(弥勒寺跡、益山王陵)03/28全州博物館－仁川空港－大阪

2004年06月27日～07月04日(韓国) 06/27大阪－ソウル(峨嵯山城)06/28～06/30〈高句麗研究会大会〉07/01峨嵯山城07/02峨嵯山城第2・4堡壘城07/04ソウル－大阪

2004年08月23日～08月30日(中国) 08/23徳島－関空13:10－13:40瀋陽－19:00錦州(広済寺)08/24錦州(広済寺)－義県08/25義県－赤峰08/26赤峰(赤峰博物館)－10:15巴林右旗(巴林右旗博物館)－祖陵・祖州城－巴林右旗08/27巴林右旗－白塔子(白塔子管理所、慶州城)－慶陵(東陵・中陵・西陵)、耶律弘木墓、耶律弘世墓－白塔子－巴林右旗08/28巴林右旗博物館－巴林左旗(上京府)－通遼08/29通遼博物館〈科爾泌歴史珍宝展〉－瀋陽08/30瀋陽－関空

2004年09月03日～09月06日(韓国) 09/03大阪－ソウル－高麗大学校(高句麗壁画研究会)09/04峨嵯山第1堡壘城(ソウル・ゲストハウス)09/05中央博物館09/03ソウル－大阪

2004年10月27日～11月03日(中国) 10/27大阪10:00－瀋陽－撫順(高爾山城、第3玄菟郡治)10/28撫順－新賓永陵(第2玄菟郡治、老城)－桓仁(馬鞍山城)10/29桓仁(五女山城、下古城子土城、上古城子墓群)－通化(赤柏松古城)10/30通化－関馬牆関隘－採石場－集安(通溝城、広開王碑、太王陵、將軍塚、臨江塚、禹山23110号墓、禹山992号墓、千秋塚、麻線溝2100号墓、山城子山城)11/01集安－桓仁(瓦房溝山城、城牆砬子山城)－新賓11/02新賓(杉松山城)－瀋陽11/03瀋陽(故宮)－瀋陽－大阪

2005年03月07日～03月13日(中国) 03/07大阪－上海－南京03/08南京(石頭城)03/09南京(長寧陵、蕭恢墓、蕭憺墓、蕭秀墓)03/10南京大博物館03/11南京(秦淮河)03/12南京站08:16－11:25上海站03/13上海－関空

2005年03月25日～03月30日(韓国) 03/25大阪－釜山－咸安(咸安博物館、城山山城、末山里古墳群)－晋州(晋州博物館)、慶尚大学校博物館)03/26晋州－新安(中村里古墳群)－生草(生草古墳群)－咸陽(白川里古墳群)－阿英(月山里古墳群、実相寺)－南原(広寒楼、万福寺)03/27南原－長水(三峰里古墳群)－居昌(居昌博物館)－高靈(池山洞古墳群、大加耶博物館、主山城)－海印寺03/28双柵(玉田古墳群)－昌寧(校洞古墳群、古墳展示館、牧馬山城)－昌寧(桂城洞古墳群)－昌原03/29金海(亀旨峰、大成洞博物館、金海博物館)－釜山(釜山市博物館、福泉博物館)03/30釜山－大阪

2005年04月03日～04月12日(アメリカ) 04/03徳島－大阪伊丹04/04大阪08:40－成田11:48－シカゴ11:35－13:30ボストン・ローガン空港－ハーバード大04/05～04/07国際会議高句麗セミナー(ハーバード大学)04/08エンチン研究所、ボストン美術館－ボストン空港－ニューヨーク04/09メトロポリタン美術館04/10自然史博物館－カーネギホール04/11ニューヨーク－04/12東京－大阪

2005年04月27日～05月04日(朝鮮) 04/27大阪10:00－13:15瀋陽桃仙空港15:00－17:10平壤04/28平壤(七星門、乙密台、玄武門、最勝台、清流亭、大城山城)04/29平壤(大同門、練光亭、民俗博物館、歴史博物館、人民学習堂・銘文城石、普通門)04/30平壤(湖南里四神塚、内里古墳群、土浦里古墳群、安鶴宮跡)05/01平壤(東明王陵、真坡里古墳群、定陵寺跡、樂浪古墳群、樂浪土城)05/02平壤(双楹塚、龍崗大墓、徳興里古墳、江西大墓、江西中墓、江西小墓)05/03平壤－沙里院・新院(長寿山城)、安岳(安岳3号墳)－平壤05/04平壤12:30－12:30瀋陽14:05－19:05大阪

2005年10月16日～11月07日(フランス・ドイツ・チェコ) 10/16徳島07:05－大阪関空09:40－12:00パリドゴール空港10/17ルーブル美術館－モンパルナス－10/18パリ10/19パリーベルリン10/20ベルリン10/21～10/23シンポジウム(ベルリン自由大学東アジア美術館)10/24ベルリン－プラハ10/25プラハ城、国立博物館－プラハ17:31－ベルリン10/26ベルリン・テーゲル空港09:55－11:45ドゴール空港13:45－10/27関空
08:20着

2005年10月31日～11月07日(韓国) 10/31大阪－ソウル仁川空港－ソウル大学校博物館、故宮博物館〈草原の支配者展〉11/01ソウル－京畿道加平大成洞－春川(翰林大学校)11/02春川(国立博物館)－全谷里遺跡－臨津江－瓠蘆古堡－六溪土城－鶴谷里積石塚－堂浦里城11/0

3 ソウル(峨嵋山城、龍馬山第2堡壘城)－土地博物館－ソウル11/04仁川空港－福岡空港－九大韓国学センター

2005年12月02日～12月04日(韓国) 12/02大阪－ソウル仁川空港－果川(韓神大学校博物館)12/03学術発表会〈高句麗壁画の図像復元〉高麗大学校美術学部)－京熙大学校博物館〈高句麗瓦展〉12/04広岩古墳－延世大学校博物館〈大学博物館特別展〉－仁川空港－関空

2005年12月17日～12月24日(中国) 12/17大阪10:35－12:30青島12/18青島－沂南(沂南漢墓博物館)－臨沂(銀雀山漢墓、金雀山、洗砚池晋墓、王羲之故居、臨沂市博物)12/19徐州(徐州博物館、雲龍山画像石)12/20徐州(獅子山前漢楚王陵、漢兵馬俑博物館、龜山漢墓博物館)－淮陰(博物館)－揚州(揚州賓館)12/21揚州(揚州城)－鹽城(博物館)－連雲港(天然居大酒店)12/22連雲港(連雲港市博物館、孔望山磨崖仏)－日照博物館－安丘－臨朐崔芬墓12/23清州市博物館12/24青島(青島市博物館)－青島空港14:05－17:20関空

2006年03月26日～03月31日(韓国) 03/26徳島港－関空－ソウル仁川空港－中央博物館－03/27普源寺跡－開心寺－益山(王宮里跡)03/28月桂古墳－七岩里前方後円墳03/29光州－潭陽(古城里月城古墳)－雁洞古墳(全南大学校博物館発掘)03/30桐華寺－樂安民俗村－仏巖寺－和順支石墓03/31光州博物館、光州市立民俗博物館－光州空港－仁川空港－関空

2006年04月13日～04月18日(韓国) 04/13大阪－釜山－鳳凰台遺跡04/14～15〈第12回加耶史国際学術会議；加耶、洛東江から栄山江へ〉「任那加羅と慕韓」発表04/16東三洞貝塚、東三洞博物館04/17晋州(慶南考古学研究所)－釜山(東義大学校博物館)04/18釜山－大阪

2006年09月18日～09月25日(韓国) 09/18大阪－釜山－慶州09/19慶州(路西洞)131号墳、馬塚、日精橋、四天王寺跡)－大邱09/20大邱博物館09/21大邱－公州(公州博物館)－ソウル09/22大邱－公州09/24ソウル歴史博物館09/25ソウル－大阪

2006年10月24日～11月04日(中国・韓国) 10/24大阪09:40－11:30ソウル13:45－14:10大連周水子空港17:15－18:30哈爾濱空港10/25哈爾濱－佳子斯－友誼鳳林城)－同江10/26同江(黒龍江)－富錦－綏賓－中興(中興土城)－(同仁)－集賢県・双鴨山(滾菟嶺土城)－佳子斯(佳子斯大学)10/27佳子斯(博物館)－七台河－牡丹江10/28牡丹江－東京城(上京龍泉府)－延吉－敦化(六頂山、城子山山城)－吉林10/29吉林(東団山城、龍潭山城)－長春－鉄嶺(博物館)－瀋陽10/30瀋陽(石台子山城)－撫順(施家墓群)－新賓(永陵鎮土城、赫図阿拉城、旧老城)－瀋陽10/31瀋陽(遼寧省博物館)－撫順(施家墓群)11/01瀋陽11/02瀋陽－19:55ソウル11/03韓国考古学会全国大会〈権力の発生〉(崇田大学校)11/04ソウル－大阪－京都11/05京都－徳島

2007年03月09日～03月16日(中国) 03/09大阪－大連周水子空港－大連駅北15:30－19:00盤錦03/10盤錦－溝邦子－北鎮(龍崗墓、崇興寺双塔)03/11北鎮(北鎮廟)－錦州－赤峰03/12赤峰－敖漢旗(博物館、塔)03/13敖漢旗(博物館)－赤峰博物館－赤峰站－(N156次)－天義(寧城)站－寧城03/14寧城－遼中京城址－天義站－(N156次)(夜行)03/15大連站－大連03/16大連周水子空港－仁川空港－関空

2007年03月25日～03月29日(韓国) 03/25大阪－ソウル－坡州(敬順王陵、瓠蘆古壘、鶴谷里積石塚、鶴谷里支石墓)－抱川03/26抱川(半月山城)－漣川(薪杏里古墳)－揚州(桧巖寺跡)－03/27丹陽(赤城碑)－順興(壁画墳)03/28忠州(中原高句麗碑、忠州博物館)－清州(国立清州博物館)－南山ゴル山城－龍仁(京畿道博物館)03/29城南(土地博物館)－ソウル(阿旦山城、峨嵋山高句麗堡壘城、風納洞土城展示館)－仁川空港－関空

2007年10月22日～10月31日(中国) 10/22大阪伊丹空港13:25－東京成田空港10/23成田10:00－12:30瀋陽－石台子山城－瀋陽站19:30－(列車2061次)－車中10/24加格達奇站13:53－(専用車)－塔河(塔河賓館)10/25塔河－漠河－塔河(塔河賓館)10/26塔河－阿里河(嘎仙洞、鄂倫春博物館)10/27阿里河(嘎仙洞、鄂倫春博物館)－加格達奇站－(列車)－海拉爾站－(列車)車中10/28－10/29瀋陽10/30瀋陽(遼寧省博物館)10/31成田空港－大阪伊丹空港－徳島

2007年09月13日～09月17日(韓国) 09/13大阪12:50－14:00釜山(水宮江、釜山港)09/14釜山(東義大学校博物館、慶星大学校博物館東萊福泉洞古墳群、福泉洞博物館、釜山大学校博物館)09/15釜山－茶戸里遺跡－昌寧校洞古墳群)09/16金海(首露王陵、国立金海博物館、龜旨峰、大成洞博物館、金海良洞里古墳群)09/17鳳凰台土城－釜山－大阪

2007年11月09日～11月13日（中国） 11/08大阪－ソウル仁川空港11/09仁川08:20－09:10
瀋陽－桓仁（望江楼墓群） 11/10桓仁－集安（山城下36号墓他）11/11集安（千秋塚他）11/12集
安－通化（万発拔子）－撫順（施家墓群）－瀋陽11/13瀋陽10:20－13:10仁川空港

2007年12月19日～12月20日（韓国） 12/19大阪17:15－19:25ソウル－西大門12/20〈高句
麗王陵研究〉（東北亜歴史財団）－仁川空港19:05－20:55関空

2008年02月15日～02月29日（中国） 02/15大阪10:00－11:30上海浦東空港－18:00武漢天
河空港－18:25武漢大学珞珈山荘02/16湖北省博物館－武昌站17:18発→18:41赤壁站－22:00長
沙－02/17懷化站－洪江市（黔陽）－黔城－懷化02/18懷化（沅州）－貴州省凱里－新昇－11:10
玉屏－岑鞏－貴州省黔东南苗族侗族自治州－青溪－三穗－台江－凱里東インター－凱里（黔東
南苗族侗族自治州民族博物館）02/19凱里－郎德上寨－南花苗寨－凱里－青曼鄉曼洞村－鴨塘
翁牙賽－凱里02/20凱里－貴陽－貴陽（汽車站、貴州省博物館）02/21貴州－11:30安順－安順
站－貴陽（13:40発バス）－15:10黄果樹瀑布公園－鎮寧－安順02/22安順南站9:00バス－天龍鎮
－天龍屯堡－安順－石頭寨（鎮寧布依族苗族自治县）－安順23:34－02/23 09:00昆明11:30－
大理－20:00麗江－02/24麗江古城10:10－19:00昆明－昆明站－雲南大学賓館02/25昆明12:23
－金沙江－16:18沅謀站－19:30德昌附近－20:30寧遠（西昌）－02/26 成都站06:30着－成都（永
陵博物館、王建墓、金沙博物館）02/27成都（武侯祠博物館）－成都站14:39－02/28武昌08:00
着－武漢市博物館－武漢大学02/29武漢（湖北省博物館）－武漢13:30－上海18:00－21:00大阪

2008年03月25日～03月30日（韓国） 03/25大阪－釜山－通度寺－蔚山（伴鷗洞）03/26蔚山
－中山里古墳群－関門城－遠願寺跡－慶州（四天王跡、望徳寺跡、神文王陵、新羅窯・科学館）
03/27慶州（月城）－慶山（林堂洞古墳群、嶺南大学校博物館）－大邱03/28大邱（大邱博物館、
啓明大学校博物館）－義城（鶴尾里古墳群、塔里古墳群、塔里石塔、景德王陵）－開慶（鳥嶺関
門）03/29開慶－咸昌（古寧加耶王陵）－尚州（沙伐王陵－報恩（三年山城）－善山（洛山洞古墳群）
－亀尾03/30亀尾－星州（星山洞古墳群）－高靈（池山洞古墳群）－金海空港－関空

2008年09月18日～09月29日（ロシア） 09/18（木）徳島13:05－14:25羽田空港－19:10函
館空港－函館09/19函館（北方民族資料館、函館市立博物館）－函館空港18:20－19:25ユジノ
サハリンスク空港－ユジノサハリンスク09/20ユジノサハリンスク駅（バス）－コルサコフ
（大泊）－コルサコフ博物館（タクシー）－鈴谷南貝塚チャシ跡－学校博物館－ユジノサハリ
ンスク－09/21サハリン州立郷土博物館－サハリン大学周辺書店－ユジノサハリンスク駅－18:
25－車中09/22ノグリキ駅08:25－ホテル－10:30博物館13:00－小舟（発動機船）－ヌイヴオー
ノグリキ09/23ノグリキ08:00－（ジープ）－ツイミ川－チル・ウンウド－13:00ティモフスク
（博物館）09/24ティモフスク駅07:24－12:50ポロナイスク駅－ポロナイスク博物館－ポロナ
イスク09/25ポロナイスク（プロムィスロヴォエ遺跡）－ポロナイスク12:50－車中21:00ユジ
ノサハリンスク09/26ホテル10:00－ユジノサハリンスク空港12:30－函館空港－函館駅－根
室09/27根室（研究フォーラム『夷曾列像』と道東アイヌ）09/28根室－ノサップ岬－釧路博物
館－白老アイヌ民族博物館－札幌09/29札幌空港－羽田空港－徳島空港

2009年03月25日～03月30日（韓国） 03/25大阪関空－釜山金海空港－釜山市立博物館－機
張（竹城里倭城）－陽北（感恩寺跡）－長鬐邑城－浦項03/26興海（玉城里古墳群）－神光（冷水里
碑）－松羅（宝鏡寺）－遠南（烏山里古墳群）－竹辺（蔚珍碑）－徳邱03/27三陟（竹西楼）－東海（三
和寺）－雪岳（神興寺）－統一展望台－花津浦03/28乾鳳寺－杆城邑城－洛山寺－連谷（領津里古
墳群）－江陵（下詩洞古墳群、江陵大学校博物館）03/29江陵（船橋荘、烏竹軒、窟山寺）－上院
寺－月精寺－原州03/30原州－興法寺跡－富論（法泉里古墳、法泉寺跡、居頓寺跡）－驪州（神
勒寺）－仁川空港－関空

2009年09月15日～09月26日（中国） 09/15大阪－長春－長春春誼賓館（旧ヤマトホテル）09
/16長春站－白城站－白城博物館－白城09/17白城站－20:00阿爾山站－阿爾山09/18阿爾山
8:00－ノモンハン戦場跡（戦争博物館）－阿爾山市－烏蘭浩特市（王爺廟）09/19烏蘭浩特市－科
爾沁右翼中旗－通遼駅18:00－20:00林東駅（巴林左旗）09/20巴林左旗（遼上京、南塔）09/21巴
林左旗－阿魯科爾沁旗（博物館）－耶律羽之墓・宝山墓－阿魯科爾沁旗09/22阿魯科爾沁旗－通
遼－庫倫旗（庫倫旗遼墓）－09/23庫倫旗－遼韓州故城－金寶屯鎮－双遼（鄭家屯）－四平市駅－

09/24哈爾濱駅01:30着－哈爾濱－哈爾濱駅－阿城駅－金上京－哈爾濱－長春09/25長春(吉林大学)－09/26長春－大阪

2009年11月05日～11月08日(韓国) 11/05徳島05:05－07:30関空09:30－ソウル金浦空港－忠州(中原研究文化院)－忠州－清州11/06清州(韓国考古学会全国大会)11/07清州(韓国考古学会全国大会)－国立全州博物館(馬韓展)11/08清州－ソウル金浦空港－関空

2009年11月14日～11月23日(中国) 11/14大阪09:25－10:55上海浦東空港－南京(南京大学)11/15南京－霍山県(南岳廟)－寿県(安豊塘)11/16寿県八公山－襄樊(寿県城)－安徽省博物館11/17南京(南京市博物館、秦淮河、石頭城)11/18南京(萬安陵)－湖州(沈氏故里)－杭州(浙江省博物館)11/19杭州(臨安城跡)－紹興(蘭亭、大禹廟)11/20嵊州(嵊県城)－新昌(石城山)－天台(天台山)11/21寧波－舟山(舟山本島、普陀山)11/22甬江河口－寧波(天一閣)11/23上海(華東師範大学)－上海浦東空港17:15－20:15関空

2009年12月18日～12月24日(韓国) 12/18大阪－釜山－海雲台12/19徳島大学韓国同窓会発足式12/20慶州12/21釜山大学校博物館、東義大学校博物館12/22大邱慶北大学校博物館、鳳凰洞発掘12/23慶州(博物館、皇吾里古墳群、月城、月精橋)12/24釜山－大阪

2010年03月06日～03月13日(ロシア) 03/06徳島空港09:30－12:20羽田空港－14:00新千歳空港19:35－20:00ユジノサハリンスク空港－ユジノサハリンスク03/07ユジノサハリンスク－アレクサンドロスコエ(土城)－ユジノサハリンスク03/08ティモフスク駅07:20着－09:30ノグリキ(ノグリキ博物館)－バル(ニヴブフ村)03/09ノグリキ博物館－ノグリキ駅－03/10ボロナイスク着00:55－ボロナイスク博物館、オタス－03/11ボロナイスク駅01:25－07:44ユジノサハリンスク(サハリン州郷土博物館、サハリン大学)03/12サハリン州郷土博物館、サハリン現代史公文書館03/12鈴谷南チャシー空港18:15－18:25札幌03/14札幌－東京－徳島

2010年03月17日～03月22日(ベトナム) 03/17徳島06:05－08:50関空11:00－16:05ハノイ03/18ハノイ(歴史博物館、安南都護府跡)03/19ザーラムバスターミナル8:45－13:00ランソン－ドンダン(中国国境)－ランソン16:00－19:00ハノイ03/20ベンスウバスターミナル－ドンソン－ハノイ03/21ハノイ(コーロア土城)03/22ハノイ0:30－06:40関空

2010年03月25日～03月30日(韓国) 03/25関空09:30－11:20済州空港－済州(三姓穴、国立済州博物館)03/26西帰浦－高山里遺跡－済州(済州牧官衙、済州邑城)03/27済州空港－釜山空港－金海(大成洞古墳群、鳳凰台)－進永(餘来里、荷溪里)－熊川(安骨里城、熊川邑城)－馬山(会原県城跡)03/28馬山－固城(松鶴洞古墳群)－巨済(見乃梁倭城、長木古墳)03/29巨済－固城(固城邑城)－泗川(勒島)－南海(城山土城)－昌原03/30昌原－釜山－大阪

2010年09月23日～09月29日(中国) 09/23大阪－長春－吉林(龍潭山霧淞賓館)09/24吉林(東团山城、帽兒山墓群、龍潭山城)－通化09/25通化(自安山城、万発拔子)－清原(関馬牆関隘)－集安(將軍塚、太王陵、広開土王碑)09/26集安(禹山3319号墓、山城子山城、国内城、七星山211号墓、千秋塚、西大塚、麻線2100号墓)09/27桓仁(五女山城、下古城子土城、上古城子積石塚、望江楼積石塚)－新賓(永陵鎮土城、旧老城高句麗山城)－撫順(施家古墳群)09/28撫順(労働公園玄菟郡治推定地、高爾山城)－遼陽(燕州城)9/29遼陽(白塔)－瀋陽－大阪

2010年10月31日～11月07日(韓国) 10/31大阪－ソウル－龍山－中央博物館11/01東北亜歴史財団－新龍山駅－論山駅12:45－16:20井邑－14:03羅州(文化財研究所)11/02羅州11/03井邑(郷校、忠武公園、井邑第1高等学校)－全州－15:20論山－15:10扶餘(文化財研究所、定林寺跡発掘、扶餘博物館)11/04扶餘－大田11/05～11/06韓国考古学会全国大会(韓南大学校)－忠部考古学研究所11/07ソウル－大阪

2010年11月15日～11月22日(中国) 11/15徳島－関空09:30－12:30大連－營城子漢墓博物館－大連站16:48－(列車)－11/16赤峰09:20着－赤峰市博物館－巴林右旗(博物館閉館)11/17巴林右旗(王府、白塔、慶陵、懷陵、祖陵)－巴林右旗11/18巴林右旗－經棚－正藍旗－上都鎮11/18上都鎮(上都)－18:15赤峰11/20赤峰－喀喇沁王府－赤峰(博物館)16:30－(列車)11/21大連11:00着－旅順(旅順博物館)11/21大連(旧満鉄本社、現代美術館)－大連14:15－関空

2011年01月08日～01月15日(中国) 01/08徳島08:05－10:40大阪13:50－16:05北京－北京西直門01/09北京09:50－烏魯木齊－喀什空港－喀什(其尼克賓館)01/10エイティガール清真

寺－ユスフ・ハズ・ジャジェブ墓－喀什地区博物館(休館)－カラハン廟－12:05喀什站－21:59
クチャ(庫車)(クチャ飯店)01/11クチャ－キジル千仏洞(17窟・38窟・48窟ほか)－クチャ01/
12クチャ－クチャ王宮(龜茲博物館)－龜茲城－汽車站(夜行)01/13 07:00烏魯木齊(新疆博物
館)－01/14烏魯木齊－北京－北京西直門01/15北京空港－関空

2011年02月17日～02月24日(ベトナム) 02/17大阪10:30－14:20ホーチミン空港－サイゴ
ン駅－ホーチミン市内02/18歴史博物館－動物園・植物園－美術博物館－ベントイン市場－1
8:30サイゴン駅－車中02/19 5:00フエ－車中02/20コーロア土城－ビエンメンバスターミナ
ル－ホエンキム湖－ハノイ02/21ハノイ駅－ラオカイ駅－バス－バックハー村－国境－ラオカ
イ02/22ラオカイ駅－ハノイ駅－ハノイ02/23ハノイ－歴史博物館－民族学博物館－ホーチミ
ン廟－タンロン安南都護府－ハノイ空港00:30－06:40大阪

2011年02月26日～03月04日(中国) 02/26関空－瀋陽(伯)02/27瀋陽－阜新(博物館)－千
寺(燕北外長城)－大五家子(西營子古城跡)－化子戈(燕北内長城)－七家子(阜新伯)02/28阜新
(高林台城跡)－鉄嶺(鉄嶺市博物館)－撫順03/01撫順03/02撫順－遼陽(遼陽市博物館、棒台
子1号墓、三道壕墓群、北園墓群)(遼陽)03/03遼陽－遼中(南崗漢墓)－鞍山－瀋陽03/04遼
寧省文物考古研究所－瀋陽12:30－15:25仁川空港19:05－20:45関空

2011年07月22日～08月03日(モンゴル) 07/22大阪12:20－16:00ウランバートル(フラワ
ーホテル)07/23ウランバートル－チンギスハーン像公園－21:00ドーリグ・ナルス遺跡発掘現
場(韓国隊)(ゲル泊)07/24バローン城－(マルガッドホテル)07/25ウランバートル(フラワ
ーホテル)07/26ドルガドル－ホスタイ07/27カンターイ 07/28ハルホリン、エルデニー・
ゾー、ホショツアイダム、ウギーノル 07/29 (テント泊)07/30モル・モドII墓群(テント
泊) 07/31ウランバートル(フラワーホテル) 08/01ウランバートル(ザナバザル美術館、
国立民族博物館、フラワーホテル)08/02ウランバートル空港06:20－11:20関空

2011年03月25日～03月30日(韓国) 03/25大阪－ソウル－龍門寺－高達寺跡03/26江陵江
原監營)－原州(原州市博物館)－法興寺－莊陵－溫達山城－水安堡03/27鳥嶺第1～3関門、
古道博物館－獅子頻迅寺石塔－徳周山城－長湍洞模塼塔－義林池03/28忠州(官衙、逢岷城土
壘)－清州(国立中原文化財研究所、中央塔、楼岩里古墳群、太和四年銘磨崖仏)－籠橋、籠橋
展示館03/29清州(邑城、百済展示館、新鳳洞古墳群、清州古印刷博物館、忠北大学校博物館、
井北洞土城)－ソウル(東大門歴史文化公園、東大門)03/30ソウル(円丘壇、彰義門、社稷壇、
国立古宮博物館、慶熙宮、ソウル歴史博物館、南山城郭、烽燧台)－仁川空港－関空

2011年08月28日～09月06日(中国) 08/28羽田－北京－長春－吉林08/29吉林(東团山城、
帽兒山墓群、龍潭山城)－羅通山城－通化08/30通化(自安山城、万發拔子)－清原(関馬牆関
隘)－緑水橋古代採石場－集安(五盤墳5号墓、四神塚、將軍塚、太王陵、広開土王碑)09/01
集安(禹山3319号墓、山城子山城、国内城、七星山211号墓、千秋塚、西大塚、麻線2100号墓)
09/02集安－桓仁(五女山城、下古城子土城、上古城子積石塚)－新賓(永陵鎮土城、旧老城高
句麗山城)－撫順(施家古墳群)09/03撫順(労働公園玄菟郡治推定地、高爾山城、白塔、露天掘
炭坑)－遼陽(燕州城)9/04遼陽(遼陽市博物館、白塔、北園墓、小青堆子墓、東門里墓、南郊
路壁画墓、南環街壁画墓、遼陽城東北隅遺跡)－瀋陽9/05瀋陽(遼寧省博物館)－瀋陽塔山空港
－成田空港

2011年09月22日～09月28日(中国) 09/22関空14:20－17:50哈爾濱09/23黒龍江省博物館
－阿城(金上京会寧府、金上京博物館)－牡丹江09/24牡丹江－東京城(渤海上京龍泉府、興隆
寺、三靈屯墓群、上官古橋)－江東二十四石－敦化09/25敦化－図們(豆満)江－窟隆山沃沮遺
跡－龍虎石刻－琿春(渤海東京龍原府、斐優城、中口国境、石頭河子古城)9/26和龍(西古城・
渤海中京顕徳府、龍頭山渤海墓群、貞孝公主墓、東古城)敦化09/27敦化(敖東城、六頂山墓
群・貞恵公主墓、城山子山城)－長春09/27長春07:50－13:30大阪

2011年10月31日～11月06日(韓国) 10/31徳島－関空12:50－14:05釜山金海空港－慶州(新羅文化遺産研
究院)(11/01慶州(邑南古墳群、邑城、慶州文化院、新羅金京跡)11/02慶州(国立慶州文化財研究所、四天王
寺跡、日精橋跡、月精橋跡)11/03慶州(国立慶州博物館、国立慶州文化財研究所)11/04慶州－慶山(嶺南大

学校、韓国考古学会大会) 11/05慶山(嶺南大学校、韓国考古学会大会一釜山、慶山市立博物館) 一大邱(国立大邱博物館) 一釜山東萊11/06釜山一閑空

Ⅳ 海外調査ノート

「調査ノート アルタイ・バジリク墳墓の発掘」(『歴博』51、1992年2月20日)

東アジアの考古学を専攻していることもあり、その歴史的環境を知るため、韓国や中国でフィールドワークをおこなってきた。松花江流域の黒龍江省哈爾濱から鴨緑江流域の吉林省種集安、長江流域の南京、福建省といった地域である。

ところが昨年(1991)の夏、旧ソ連のアルタイ山中でバジリク墳墓の発掘に参加する機会があり、蒙古高原・バイカル湖を越えてはるか西方、北方に旅することができた。

バジリク墳墓は、紀元前7世紀から紀元前3世紀に北方ユウラシアの草原地帯に栄えた遊牧騎馬民族、山地アルタイのスキタイ族がのこしたものである。

発掘地点は、アルタイ山脈の溪谷・草原、モンゴルと旧ソ連(ロシア・カザフ共和国)、中国新疆ウイグル自治区との国境地帯、ベルテック高原にある。

墳墓はアカハラ河の辺りに立地し、第1地点と約10km下流の第2地点にわかれる。発掘した墳墓は十数基で、シベリヤ青銅器時代のアフアナシェボ期(紀元前2000～3000年)の墳墓数基、バジリク期の墳墓、突厥墓であった。

第2地点のクルック・タッシュ1号墳は径27mの巨大積石墓で、墓壙に木槨と馬坑(殉葬馬7頭が埋葬)を設け、木槨内にくり抜き式の木棺を安置するという構造である。木棺は、グリフィンとともに聖なる動物として崇拝された「なまず」形で作られていた。

ところで〈アルタイ〉〈バジリク〉、この響きある言葉は耳をはなれない。モンゴロイドの発祥地としてのアルタイは憧憬の地であった。朝鮮の古代文化には、北方的要素が色濃くのこっている。悠久の歴史のなかでたえず北方文化との接触。交流があった。最近、金海大成洞遺跡で発掘された虎形帯鉤と銅鍔もしかりである。前者は紀元前後の青銅器時代末期のもので、匈奴文化と関係ぶかい。後者の銅鍔も、蒙古から中国東北部の匈奴・鮮卑族に愛用された煮沸用容器で、類品は楽浪の貞梧洞1号墳などで出土している。

朝鮮考古学を研究するうえで、シベリヤ・極東は重要な地域である。前期旧石器の系統論などがシベリヤとの関係で論じられている。青銅器も、中国東北部の遼寧青銅器文化やシベリヤ青銅器文化と直接、間接的につながっている。また4世紀に成立した新羅積石木槨墳とスキタイのも木槨墓文化との関係を想定する研究者もいる。そうした論の成否はともかく、スキタイ騎馬民族への関心は高い。

筆者も朝鮮考古学上の問題意識から、バジリク文化に興味をいだいていたが、その墳墓群の発掘・踏査をつうじて、遊牧騎馬民族の歴史環境をかみまみることができた。しかもこの発掘は国際的で、韓国・中国などの考古学者も参加した。韓ソの政治的冷戦の瓦解は急速で、航空・船舶の定期便の開設など経済的關係も緊密化している。昨年の9月にはソウルで、エルミタージュ美術館の「スキタイ黄金」展も開催された。こうした旧ソ連・中国・韓国・日本との学術的交流、共同発掘によって、騎馬民族国家だけでなく、民族の起源・形成問題、言語の系統論などさまざまな分野で研究が進展するものと期待される。

つぎに調査日誌抄をかみず、激動する「ソ連」のさなか、アルタイ山中での体験の一端を記しておきたい。

8月9日、新潟空港から日本海を渡り、わずか2時間でハバロフスクに着く。

8月10日、13時30分、空路イルクーツクを経てノボシビルスクに。空港での待ち時間(2時間)ふくめ約7時間半の所要。イルクーツク空港では、昨年2月にユネスコ・シルクロード〈海の道〉踏査で中国・泉州か

ら韓国まで同船したメドメーデフ氏に偶然会う。沿海州一帯の渤海遺跡などをフィールドとする考古学者である。

8月11日、11時にアカデミーの野外博物館からヘリで約3時間、ゴルノアルタイスクに。給油後、アルタイ山脈を越えて、16時ごろウコック高原のベルテック・キャンプ(第1地点)に到着。江上波夫・加藤九祚先生もキャンプに滞在中であった。モンゴルと中国の国境にそびえるフィテンウーク山(4653m)を近くに仰ぎながら2週間のキャンプ生活にはいる。

8月12・13日、第2地点のクルック・タッシュ墳墓、ベルテック墳墓群(アフアナシェボ期の墳墓と突厥墓)の見学。

8月14日、ベルテック12号積石墓の発掘。

8月15日、ウコック高原のアカハラ墳墓の踏査。国境緩衝地帯にある墳墓群で、昨年(1990)発掘された。凍結クラガンであり、1949年いらい数十年ぶり大発掘となる。大形木槨内から白樺で覆われた木棺、空想上の怪獣グリフィン・フェルト・馬具など数多くの遺物が出土し、木槨外では馬が陪葬されていたという。

8月16日～18日、12号墓は石槨で、その構造は同じアルタイ山中で発掘されたウランドリック墳墓群のものに類似する。17日は周辺の遺跡調査。18日は休み。アカハラ河支流の清流で魚釣りなどをおこなう。雷、大雨。

8月19日、午前の予定のヘリが遅れて飛来。13時30分、パジリク墳墓群などの遺跡踏査に向かう。約1時間アルタイ山中を飛び、クチャラの岩陰遺跡・岸壁画のある溪谷に降りる。岸壁には馬などの絵が描かれている。15時ごろ、ウスチカクサ空港に臨時着陸する。空港待合室のテレビのスポーツ中継がとだえ、音声のみに変わる。17時ごろ、政治の急変、ゴルバチョフ失脚という知らせを受ける。ヘリは急患を運ぶということで、われわれを空港に残して飛んでいったが、のちに政府高官?を乗せたことがわかる。19時10分、キャンプにもどる。その後、情報はまったく入らない。

8月20日、夜中に大雨。バンガロ内に雨水がしみこむ。11時ごろからキャンプ対岸の岸壁画の見学。12号墳の発掘は進む。政変に関する情報はなし。夜は予定通り、キャンプ内で歓送会。ロシア民謡がアカハラ河にひびく。

8月21日、デニソワのキャンプに移る予定となっていたが、ヘリは来ない。情報はなし。

8月22日、早朝は零下2度。朝8時ごろゴルバチョフが復権したことをロシア人が伝えに来る。キャンプに1台しかない短波ラジオで受信。9時から5分間、ラジオジャパン日本語放送が流れる。そのあとは甲子園の高校野球中継。昼食後、ヘリが到着。アカデミーや北方ユーラシア学会からのメッセージ・ファックスが読み上げられる。いったんノボリビルスクにもどり、政情を把握することにする。

8月23日、ソ連アカデミー考古学民族学研究所長と、今後の日帝を協議する。日本への国際電話も通じる。

8月24日、11時、野外博物館からのヘリでデニソワキャンプに移動。デニソワはソ連屈指の旧石器遺跡で、この十年来発掘が続けられている。

8月25日、ヘリでカラボム岩陰遺跡発掘現場をへて、シベ・クルガンの見学。巨大な積石塚が群在する。ツェクタ・パシヤダルのクルガンを眼下に、パジリク墳墓群に降り立つ。つかの間の時間を歩きまわる。

8月26日、トラックで約1時間、カミナイ岩陰遺跡を踏査。旧石器から青銅器時代の複合遺跡で、墳墓を残したスキタイ人のキャンプ地(生活址)といえる。

8月27日、ノボシビルスクに向かう。10時予定のヘリは17時に。14時55分、雷とともに1cm大の雹が降る。芝草一面はまたたく間に白色の世界になる。

8月28日、ノボシビルスク市街に(1ルーブル5円のレート)。

8月29日、20時40分発のノボロフスク行きの飛行機に搭乗。翌朝の5時20分に到着。

8月30日、13時20分離陸、新潟に向かう。

「鳥居龍蔵と遼東・朝鮮半島調査」(『徳島新聞』1993年10月26日)

1895(明治28)のアジア・シベリヤ各地への海外調査は遼東半島に始まった。少年期からアジアの諸文化・諸民族に思いをはせていた鳥居龍蔵に早くもめぐってきた運命的といえる機会であった。

その鳥居にとって、遼東半島と朝鮮半島の調査は一体のものであり、その後、朝鮮半島北部(咸鏡南道・江原道)の踏査をはじめ、半島全域にわたる考古学的調査を遂行したのである。

新石器時代いらい、遼東半島から遼河流域の文化は朝鮮半島と不可分の関係にあり、時代の移り変わりとともに、さまざまな地域間交流がおこなわれてきた。今日でも、環黄海文化圏・西海文化圏として、政治・経済・文化的に注目されている。

東北アジアにおいて、鳥居龍蔵は石器時代の存在を確認し、支石墓(中国では「石棚」とよぶ)や積石塚の調査をおこなった。

遼陽では、埴室墓や石室墓を発掘し、それらが高句麗でなく、漢代のものであることを指摘した。遼陽は遼東郡治の置かれた襄平である。それらの調査などをもととして、平壤の大同江岸に分布する墳墓群も、漢の武帝元封3年(紀元前108)に設置された楽浪郡の遺跡であることをはじめて主張し、その後の発掘などで追証されるようになった。そうした洞察力は、文献史料の渉猟、広範かつ緻密なフィールドワークにもとづくものであった。

鳥居龍蔵と支石墓とのかかわりはふかく、遼東半島から朝鮮半島全域へと調査を進めていく。今日、支石墓の型式論や年代論について研究がすすめられている。しかし支石墓分布圏も、中国(遼寧省・吉林省)・北朝鮮にひろがり、そこに諸々の政治的制約もくわわり、東北アジアを舞台とした自由な研究が阻害されている。

1992年、北朝鮮の遺跡を歩いたさい、鳥居の報告する咸鏡南道咸興林道元の支石墓の所在についてはわからなかったが、同じ咸興で、典型的な北方式(卓子式)支石墓を調査することができた。現在、鳥居のグローバルな視点と各国による共同調査研究が不可欠となっている。

第2回の満州旅行は、1905(明治38)年であり、朝鮮半島との国境地帯を流れる鴨緑江流域の集安一帯を踏査している。一行は列車・馬車・徒歩によって、老嶺の山々を越え、集安に至り、広開土王碑・將軍塚。国内城・山城子山城などを調査した。広開土王を太王陵に比定し、高句麗都城・山城にかんする考察をおこなっている。

朝鮮半島においては、支石墓とともに新石器・青銅器(無文土器)時代遺跡の分布調査や発掘を目的意識をもっておこなった。当時、日本の学界では、鳥居自身が提起した弥生人・縄文人の人種をめぐる論叢があり、弥生時代=金石併用時代途が提唱されていたところである。

そのころ、韓国の慶尚南道金海貝塚では、「任那日本府」問題もからんで、数次にわたる調査がなされ、鳥居も二度発掘している。その報告は刊行されていないが、『有史以前の日本』(1925年)のなかで、出土土器を検討し、鉄器の存在を重視するなど、金海貝塚の中心時期が金石併用時代でなく、「金属器時代」つまり鉄器時代であることを明瞭に指摘した。

その後、有光教一氏によって、金海貝塚の再検討がなされたのは、鳥居没後の翌年(1954)であった。その「金海文化期」とよばれた時期は、今は原三国時代(紀元前後～3世紀)と称されている。

今日、各国においては、遼東半島・朝鮮半島一帯における鳥居龍蔵の先駆的研究を継承しながら、調査研究がおこなわれつつある。

「鳥居龍蔵と東北アジア」(『論集徳島の考古学』2002年3月)

わたし自身、中国東北地方へはじめて旅したのは1981年(岡崎敬代表の訪中団)であった。北京から夜行列車で瀋陽に行き、大連から長春、哈爾濱、吉林市、長春、北京という旅であった。集安への旅行への可能性をもあつてのことだった。それはかなわぬことであったが、遼東半島の列車の旅は楽しいものであった。渤海湾に面する北辺に塩田がひろがっていた。哈爾濱での金上京府の調査にくわえて、阿城県博物館で展示されていた膨大な遼金時代の鉄器に興味をひ

いた。哈爾浜からの帰路は吉林市経由であった。龍潭山城に登り、土城の切り通しを見学した。池やら山頂近くの円形貯水池(「牢獄」と表示)も実見した。時間の関係で、そこから土城まで駆け上がったこともおぼえている。同一構造の円形石組み遺構は百済公州の公山城で発掘されている。吉林市博物館では、大きな隕石を見学したが、その博物館ものに焼失した。吉林からは長春を経由して瀋陽に向かった。真夜中に停車した撫順駅をなぜかよく覚えている。その北方に高爾山城があったのだ。

(中国) 東北地方の集安への旅行が外国人に開放されたのは1994年のことであった。その翌年に鴨緑江を臨むことができたが、はや10数年を経た。しかし未だ踏査には困難な問題も多い。鴨緑江から長白山(白頭山)、図們(豆満)江流域も中国側からたどることができた。

1992年には、関空→北京→ピョンヤン→北京→瀋陽→大連→北京というような旅行に参加した。いつかは満浦鎮から集安に汽車ではいりたいという想いにかかられた。

1993年秋、遼寧から吉林省の高句麗山城・墳墓、析木城の支石墓の調査をおこなった。

鳥居龍蔵は、1907年11月1日、赤峰から車で、老哈河を渡り、黒水・海山阜・馬迷水をへて朝陽に入り、北塔・南塔、喇嘛廟などを調査した。2001年の8月、内蒙古の赤峰から遼寧省朝陽へと、三燕・北朝の遺跡を踏査した。鳥居龍蔵が、朝陽で宿とした佑順寺境内は朝陽市博物館としても利用されていた。鳥居龍次郎さんが写真をとるため登った屋根はどこそこであったかとあらためて思いおこす。

1999年4月29日～5月9日、渤海の遺跡を中心とした旅行に参加した。ロシアから中国に入国し、さらにロシアにもどるという、渤海の日本道をめぐる行程でもあった。

新潟→ウラジオストック→ユジノウスリスカヤ城跡→クラスノヤールスカヤ城跡→コビンスキー寺院跡→シェレニコボ山城→グラゴボ駅→綏芬河駅→大城子城跡→牡丹江→東京鎮や上京龍泉府→三霊屯墓→敦化→六頂山古墳群→西古城→東古城→延吉→琿春→石頭河子城跡→クラスキノ城跡→ポシエト湾→ウラジオストック→ロシアアカデミー考古学研究所→アルセイニエフ博物館→ウラジオストック→新潟

鳥居龍蔵の1909・27年の調査の一部である。1994年の延辺への調査をあわせて、渤海の領域についてまとめた。それ以来、1985・1992・1993年、1995年からは毎年調査をかさねている。

これまで遼寧・吉林・黒龍江の東北三省、内蒙古赤峰以南、ロシア沿海州の諸地域(内蒙古東部、黒龍江省松花江以北の「満蒙」の地はのぞく)を踏査することができた。ただそれは列車・車・小型バスによる調査行である。鳥居龍蔵の徒歩・馬・馬車・列車・トラックによる、のべ数年、いや50年余におよぶ調査に、さまざまな面において及ぶべくもない。フィールド調査の方法もさることながら、往時の国際的な政治状況も今日と比較にならない。鳥居龍蔵の業績をはじめ、八木槌三郎『満州考古学』、浜田耕作『東亜考古学論攷』、原田淑人『東京城』、池内宏・梅原末治1940『通溝』、三上次男『満鮮原始墳墓の研究』、三宅俊成『東北アジア考古学の研究』、藤田亮策『朝鮮考古学』などがある。解放後の中国人研究者による研究の蓄積があり、1993年に『中国文物地図集吉林分冊』、1996年に『中国考古集成東北巻』全20冊が刊行された。今日、そうした先人の研究成果をもとに踏査することができる。

本書の編集者である天羽利夫さんは、永年鳥居龍蔵研究にたずさわっている。筆者も朝鮮考古学・東北アジア考古学を専門領域をして、鳥居龍蔵のフィールドと重なるところもあり、その観点から研究ノートとしてまとめたしだいである。

この間、共同調査を進めている、源健男、北垣聡一郎、田中俊明、南秀雄、山田隆文、松波宏隆さんらに感謝したい。本稿は「特定領域研究(A)・日本人および日本文化の起源に関する学際的研究」(代表春成秀爾)の研究成果による。

「北朝鮮の遺跡を訪ねて一邪馬台国ゆかりの地へ」(『徳島新聞』2002年9月25日、『岐阜新聞』2002年9月27日、『沖縄タイムス』2002年9月29日など)

2002年の7月下旬、平壤の楽浪郡治跡と黄海北道鳳山郡の帶方郡治跡を訪れた。これまで1910年代の土城の写真や、平壤で出版された『朝鮮遺跡遺物図鑑』などをながめては踏査への念をつよくしていたが、やっと実現した。

今日、日朝関係の国交交渉再開という平和的気運が生まれ、小泉首相の訪朝という歴史的出来事も実現した。こうした時期に、邪馬台国ゆかりの地ながら、これまでほとんど伝わってこなかった帯方郡の遺跡を紹介し、日朝関係の一層の深まりに期待したい。

楽浪郡は漢の武帝の紀元前108年に設置された。日本列島の弥生人は、ここを窓口にして鏡やガラスなど中国文物を入手し、その仲立ちで使者も送った。

楽浪郡治の所在地について諸説あるが、平壤を流れる大同江の南岸に位置する城跡と推定される。今日、高層アパート群が建てられているが、建築にさきだって数百基以上の墳墓が発掘され、膨大な遺物が見つかった。そして川べりに、土盛りの城壁の一面が保存されている。

一方、帯方郡は204年に遼寧省を拠点とした公孫氏が楽浪郡の南に設置した。倭国王卑弥呼は魏が公孫氏氏政権をたおす238年まで、その帯方郡を交渉した。大阪府安満宮山古墳や京都府大田南5号墓で見つかった青龍3年(235)の方格規矩鏡は帯方郡から流入したと考えられる。

卑弥呼が魏と交渉したのは、その翌年の239年であった。帯方郡は313年ごろまで存続し、卑弥呼は245年、247年と何度も帯方郡に使いを遣わしており、倭国にとって重要な国際交流の舞台だった。

その帯方郡治がどこに置かれたか。漢江流域のソウル説、黄海道説、ソウルから黄海道への移転説がある。そのなかでもっとも有力な説が、黄海北道鳳山郡の「唐土城」である。現在、智塔里土城とよばれている。

土城は周囲2256mの矩形を呈する。北壁(545m)と西壁(428m)は直線的、東壁(727m)・南壁(556m)は曲線的である。そのプランは平壤の大同江南岸に位置する楽浪郡治と類似する。

鳥居龍蔵は大正5年(1916)、「黄海道鳳山郡土城面松山里土城」を調査した。「沙里院ノ西方二里餘ニシテ所謂学者ニ據リテ帯方郡治ト称セラルル大ナル土城アリ、此處ニテ本員は其北壁ノ西部分カ崩壊シ畑地トナレル中ヨリ石器時代ノ有紋土器ヲ得タリ。這ハ小破片ナリト雖モ貴重ノ資料ニシテ則チ漢族カ土城ヲ築カサリシ以前既ニ石器時代ノ民衆カ居住セシ事ヲ推知サルハナリ、而シテ此民衆カ厚手有紋土器ヲ使用セシハ殊ニ注意スヘク、彼ノ大同江畔楽浪故城ノ称アル城址内及温井里附近城峴里ノ漢土城内ニモ是等破片存在セリ之ニ因テ考フレハ漢族カ設ケシ勢力ノ中心点トスヘキ城邑ノ地ハ、故有史以前夷族の拠レル土地ナリシ事ハ最モ考フヘキコトナリ、即チ此事実ヨリ推セハ、新来ノ漢族ハ其夷人等ノ住ヒシ跡ニ又モヤ中心ノ本拠地ヲ設ケシモノナリ、是等ハ西部朝鮮ノ古代史ヲ研究スル者ノ頗ル思慮ヲ費スヘキ事ニ属ス」(「平安南道黄海道古蹟調査報告」『大正5年度古蹟調査報告』1917)。

鳥居は関野貞らの楽浪土城・古墳＝高句麗説にたいして、漢代の土城であると主張し、帯方郡の位置についても端的に指摘している。1957年、朝鮮社会科学院考古研究所によって、土城北壁近くの下層および城内で新石器時代の住居跡が発掘された(『智塔里原始遺跡発掘調査報告』1961年)。

智塔里土城の北数kmの墳墓で、「帯方太守張撫夷」・「戊」・「申」銘の磚が出土したことから、近辺にあるこの土城が郡治とかんがえられてきた。その張撫夷墓は塋室墳で、後室に龕室(側室)のつく構造である。問題は「戊申」を288年・348年のいずれにあてるかで、意見がわかれている。そこで墓室の構造を検討すると、むしろ3世紀代に位置づけられ、磚の銘のとおり帯方太守の墳墓といえる。智塔里土城は帯方郡の中心地であった。1957年、土城内の北壁付近で、新石器時代の遺跡が発掘されたが、上層で帯方郡の時期の磚や土器がみつかった。

倭王・卑弥呼は、245・247年となんどもこの帯方郡に使いを遣わした。帯方郡は公孫氏・魏晋にとって、馬韓・弁韓・辰韓・濊・倭との外交の窓口であった。倭は、その北の高句麗や夫餘の国々についても情報をえていたにちがいない。倭国は、帯方郡などを舞台に国際交流をすすめていた。

3世紀前半、卑弥呼は、魏が公孫氏政権を倒した238年まで、公孫氏政権の支配下にあった帯方郡と交渉した。同時に馬韓諸国の月支国にいた辰王と交渉していた。私は、長野市浅川端遺跡で見つかった馬形帯鉤はそのころの交流の産物かと推測している。倭国が魏と交渉したのは、その翌年の景初3年であった。

おもえば1975年、帯方郡ソウル説にたって、仁川港から「邪馬台国への踏査」航海実験の参

加したことがあった。その帯方郡治がどこにあったか。3世紀の倭・韓・魏晉との国際関係など、解明すべき重要な問題のひとつである

大同江の河口堰をわたり、黄海南道殷栗郡の高句麗の九月山城などもめぐった。冠山里埴室墳なども分布し、357年に築造された冬壽墓(安岳3号墳)も存在する。

黄海道南北道の安岳郡、殷栗郡、鳳山郡一帯の帯方郡の故地は緑豊かな水田地帯であった。青々とした稲が実りの時をまち、豊作も予想された。しかし帰国後、2・3日後の中国東北地方をふくめて豪雨があったときく。7月下旬に梅雨入りし、平壤や開城では小雨であった。松林でおおわれた山野、黙々と働く人々の姿、大同江に遊ぶ子供たち、けっして戦争は起こってはないという感情がこみあがってきたのであった。

「国境を超えたまなざしー21世紀の平和の礎に」『没後50年今、鳥居龍蔵を考える4』（『徳島新聞』2003年2月15日）

鳥居龍蔵は、満州(中国東北地方)、蒙古、朝鮮、台湾、中国西南部、樺太、シベリヤ沿海州の考古学・民族学的調査研究をおこなった。そのうち朝鮮半島における調査に、1910年から1916年までの7年間、のべ約2年以上を費やしている。

朝鮮半島は地理的な呼び名であって、一般的に白頭山(長白山)を境に西に流れる鴨緑江、東に流れる豆満江(図們江)以南の地をさす。その朝鮮半島が国家の領域として、枠組みの形成されたのは、歴史的にみて高麗時代(918～1392年)からだ。その以前、東北アジアには諸民族・諸国家が興亡した。『三国志』魏書東夷伝には、魏・公孫氏とその郡(遼東・楽浪・帯方郡)、高句麗、夫餘、挹婁、沃沮、濊、韓と倭が存在した。鴨緑江・豆満江流域を境域、国境とした歴史はそれほど永くはない。「大東亜共栄圏」なる侵略思想、軍国主義がはびこったのはわずか半世紀まえのことだ。

鳥居龍蔵の東北アジア諸民族の研究にあって、「蒙古」「満州」「朝鮮」をわけへだてる意識はなかった。民族は民族、国家は国家としての研究姿勢を貫いている。

満州・朝鮮は地域呼称であり、自ら便宜的に予備をふくめ、7回の「朝鮮調査」として記述している。

1910年、「朝鮮総督府」の嘱託となり、予備調査として、釜山から仁川、ソウルから釜山をまわった。汽車で釜山に向かう「途中の光景は、私としてはすべて眼新しく、その山河の景観や村落、家屋、人物の往来等、いずれも珍しく、飽くことを知らなかった」(『ある老学徒の手記』)と回顧している。朝鮮の自然・人々へのまなざしはあたたかい。

鳥居に委嘱されたのは、「朝鮮人の生体測定と石器時代の遺跡」調査で、「朝鮮の古俗やシャーマン巫女等の調査」もあわせ、計画どおり「朝鮮全土の旅行調査」をおこなった。

そうした鳥居の調査研究において大きな問題が生じてきた。第1回の報告書を「学務課にさし出したが、同課で紛失の禍」にあった。そのため「僅かに第五回の調査報告は出して置いた」ということがあった。しかし「採集品はことごとく総督府に納め、これは博物館に保存されている」と記す。じっさい鳥居の採集、発掘資料や写真ガラス乾板は現在の韓国中央博物館に保管されている。その目録5冊が1997～2001年に毎年刊行された。

鳥居は1910～1916年の7年間、総督府嘱託として調査に従事した。鳥居の撮影した資料は、『ガラス原板目録集I—小板1909年～1930年—』に収録されている。

第1～4回の調査報告は未刊であるが、『目録』からその膨大な調査の一端がうかがえる。まさに「朝鮮全土の調査」であった。

その写真には、豊臣秀吉の文禄・慶長年間の侵略以後、朝鮮戦争で焦土化した以前の、朝鮮半島の人々、風土や文化が映しだされている。

1916年(大正5)年の第6回の朝鮮調査をさいごに、総督府嘱託の職が解任されている。「最初の目的たる朝鮮に石器時代の存在を知り、……私は以上を論文として発表しようと思ったが、その時すでにおそし、最終回の調査以後は、もはや私は同府の嘱託はとかれ、黑板博士及び東西大学各位の仕事となり、私にはこれと関係させず、以上の人人で、歴史、考古学の仕事をし、その他の人もこれに入れないで、官学者唯一となったから、私は遂に総結論をも

することが出来ず、そのままになった」と述懐する。

フィールド学派の鳥居にとって、楽浪郡・石器時代存否問題などの論争がからんだり、学閥の弊害のため、調査体制から排斥されたという思いがつよかったにちがいない。その年の3月、朝鮮総督府から『朝鮮古蹟図譜』第3冊が刊行された。鳥居龍蔵が長年にわたって、歩きまわった各地の遺跡の写真も掲載されている。

2002年、徳島県立鳥居記念博物館において、鳥居の未発表資料の一部が見つかった。調査をともにした鳥居龍次郎さんが保管してきたものだ。博物館では、その4月から膨大な資料の整理に着手しはじめ、目録づくりをおこなっている。

「鳥居龍蔵の東北アジア踏査」（『史窓』34、2004年3月）

2003年4月2日から2003年8月31日までの5ヶ月、中国の各地を踏査した。吉林省長春に3ヶ月、陝西省西安に1ヶ月、河南省鄭州、南京にそれぞれ半月という日程であった。その間、吉林省集安・吉林、黒龍江省鄂倫春自治旗・牡丹江市東京城、内蒙古巴林右旗・巴林左旗・白塔子など高句麗・渤海・遼の遺跡などを踏査、鳥居龍蔵の足跡をたどった。

鳥居龍蔵と今日の調査とでは、交通手段は当然のことであるが、中国東北地方から蒙古をめぐる、「満蒙」の歴史環境がことになっている。しかし高速道路時代に移りつつある今日の中国社会にあっても、いぜんとして未知の世界である。汽車・バスによる旅であったが、「満鉄」の線路は今ものこる。私の2003年の調査と100年まえの鳥居龍蔵の調査行とかさねあわせながら、記述する。

4月2日、関西国際空港から10時5分発の瀋陽行に乗る。約2時間半で大連空港に着く。入国手続きを終え、再び乗り、瀋陽に向かう。約1時間の飛行で、13時ごろに瀋陽空港に着陸する。空港では吉林大学の王培新、遼寧省文物考古研究所の李新全さんと会う。

1981年に岡崎敬団長の調査団に同行して、初めて東北の地を訪れた。北京からの夜行列車で、おりたったのが瀋陽駅であった。その後、北京から飛行機で、瀋陽や長春に入り、ソウル経由で瀋陽におりたことがある。最近では、大阪から大連・瀋陽への直行便を利用する機会がふえた。大阪―瀋陽は、ソウルを中心に550～850kmの範囲にある。福岡―ソウル―瀋陽は半径550kmの同心円上にある。それに気がついたのはソウルから瀋陽に飛んだときであった。東京からの瀋陽行南方航空便に急病人がでて、平壤空港に緊急着陸、手術のあと、瀋陽にもどったというニュースがあった(2003年12月27日朝日新聞)。ソウル・平壤・集安・瀋陽・長春は近い。

瀋陽では、遼寧省文物考古研究所の田立坤さんから三燕文物に関する論文をいただき、三燕文化の編年問題などについて話す。同年の11月に韓国考古学会で発表する予定もあって、最近の調査成果についてきく。研究所では数年まえから遺物展示室が公開されている。瀋陽に一泊して、翌日吉林行の特快で長春に向かう。約4時間である。鳥居龍蔵は、瀋陽・四平・長春間を何度も行き来していたことをおもいだす。私にとっても、1981年いらいでなつかしい気分になる。最近では車を利用するからだ。

4月3日から、3ヶ月長春の住人になる。長春市街の同光路の吉林大学医科大学キャンパスにある専家留学生公寓に宿泊する。まわりに「満州国」の建物群がのこる。

テレビでは、「イラク(イラク)」戦争の報道をみる。CCTVでは、毎日戦争状況を刻々伝えていた。やがて「非典型肺炎」(SARS)が流行してきていることをきく。連日特別報道があり、うがい・手洗い、消毒、マスクの使用、健康管理がよびかけられるようになる。全国的に広まりつつあることがわかる。

4月22日、長春駅から渾江行の快速に乗る。待合室では、マスクをつける人もめだち、駅員もマスクを販売する。長春―通化の列車は、1985年に初めて集安に來たときくらい。そのころは、北京から夜行で、長春に行き、さらに夜行で通化(賓館)に早朝につき、仮眠して集安まで老嶺越えの汽車に乗るのが、唯一ともいえる交通手段であった。今回は一人であり、懐かしさもあって、久しぶりに汽車に乗ることにした。蒸気機関車からジーゼル機関車にかわっていた。ただ通化からはバスにした。通化から、集安まで舗装された道路を通ったことがあった。鳥居

龍蔵は1838年、馬車で集安に行った。

集安では各所で発掘されていた。太王陵・臨江塚・四ツ塚、国内城、山城子山城、七星山、千秋塚、西大塚などの都城・山城、墳墓である。「世界遺産」指定のための基礎資料の収集、整備事業のための発掘である。

太王陵から広開土王碑のまわりは、民家も立ち退き、整備されている。そして陵園にかかわる諸施設が発掘されている。鳥居龍蔵は1905年、將軍塚・太王陵・広開土王碑・母丘儉碑などを調査した(『南満州調査報告』1910年)。太王陵の南約100mの所で瓦・磚、礎石を見つけ、「当時此の地に一大建築物ありしなるべく、而も其の建物は將軍塚(現太王陵)に関係あるものなるべし」として、陵園制にかかわる建築であることを指摘している。のちにその観点にもとづき、遼の陵園制について考察する。

集安から長春にもどってからは、「非典」予防のため、都市間の移動が禁止、ないし各地で検査があり、潜伏期間の関係のため、一周間前後「隔離」検査が義務づけられる。駅・バスターミナル、大学など諸施設で体温検査、さらに消毒が徹底化されてきた。6月半ばになると、予防対策が効を生じ、流行が鎮静化した(抗非典)。流行以前に帰省した学生も、「返校」、検査のうえ学校にもどれるようになり、外出禁止処置が解かれはじまる。20日過ぎには、旅行も解禁された。私は、吉林大学への滞在を1ヶ月延ばして、中国にとどまっていたが、7月には当初の予定どおり西北大学に移ることにした。その6月末の短い期間に、黒龍江省・吉林省・内モン古への旅行を計画した。

大興安嶺・オロチョン・鮮卑 内蒙古自治区鄂倫春自治旗。6月22日、長春8時18分の快速K129次(35元)で哈爾濱に向かった。哈爾濱で阿里河への列車に乗り換えるためだ。列車の票は途中駅では予約・購入ができない。電算化が進んで中国で未だ、オンラインシステムは全国的に実施されていない。したがって長春から、北京発の図里河行に乗車できないのだ。哈爾濱14時10分発図里河行(K629次空調軟座特快臥、231元)に乗車する。旅行は解禁されても、火車票を買うさい、検温のうえ「健康申告カード」を提出することになっていた(7月には廃止)。

哈爾濱から西は初めてで、松花江を渡り、齊齊哈爾に。1981年、松花江畔で鉄橋を過ぎる蒸気機関車をみたことを思い出しながら。齊齊哈爾は18時20分、列車は嫩江に沿って東北方に進む。22時45分嫩江駅を過ぎ、内蒙古自治区、大興安嶺に入る。早朝3時9分(日本時間4時9分)に阿里河駅につく。阿里河は鄂倫春自治旗政府の所在地である。高緯度の地は明るい。白夜ではないだろうが、夜があげてている。駅員に駅招待所で休息することをすすめられたが、待機していた唯一のタクシーに飛び乗る。嘎仙洞洞窟に。モンゴル族の女性運転手はその場所を知っていた。地元では著名なところなのだ。20分ほどであった。阿里河から「西北一〇公里」という記載と略図だけが手がかりであったので、多少の不安があったが、おもいのほか簡単にみつかった(米文平「鮮卑石室の發展与初歩研究」『文物』1981-2)。洞窟の入り口付近で、北緯 東経である。この嘎仙洞洞窟で拓跋鮮卑のこのした石刻碑文がみつかり、大興安嶺のこの一帯が鮮卑族の発祥の地として知られたのである。2001年8月、大同での北朝史学会に参加したが、平城、永固陵・万年堂、雲崗石窟とともにホリンゴールの盛樂城を見学した。いわば鮮卑の南遷の地を歩いたことになる。

嘎仙洞から、鄂倫春博物館を見学する。6時54分発(656次、無座、29元)で海拉爾に行くことにしたので、短い時間となった。吉林大学魏存成さんからの紹介状を持参したこともあって、博物館長に連絡。早朝にもかかわらず、面会できた。博物館の展示はオロチョン族の民族資料と鮮卑関連の遺物で構成されていた。

中国・ロシア国境(内蒙古自治区満州里) 海拉爾から満州里にまわることにした。決めたとたん汽車で大興安嶺を越えるとは、わくわくした。この路線は前もって「鐵路旅客列車時刻表」で探しえず、いったん齊齊哈爾までもどらざるをえないとおもっていたのだ。駅で時刻表をみて急に変更した。海拉爾駅には20時08分着の予定であったが、すこし遅れる。鐵路のとおり大興安嶺は、なだらかな山並みがつづく、丘陵・平原地帯といってもよい。木造の村が点在する。木材の積み出し駅が目につく。12時間以上の長旅であるが、あくことがない。海拉爾で一泊する。

6月24日、7時10分発満州里行(K491次、25元)に乗る。9時47分、定刻で満州里に着く。大興安嶺の越えた、黒龍江の上流のハイラル川流域は、海拉爾付近では砂漠・砂丘地帯と変わる。鳥居龍藏は、哈爾濱からの往路、海拉爾付近は「昨夕の光景と一変して、茫々たる砂土の広原、処々に松の木が生えて単調を破って居り、又彼処此処に砂丘が緩く起伏して居る。この辺は昔松の森林であったかも知れぬ。この荒涼たる砂土の眺めが満州里まで連続して居る」(『人類学及人種学上より見たる北東亜細亞』1924年、『鳥居龍藏全集』8)。

慶陵と遼上京(内モンゴル自治州巴林左旗・巴林右旗白塔子) 7月15日、西安から遼上京・慶陵に向かう。西安駅14:19分発の676次呼和浩特行の列車で内モンゴル集寧南に向かう。翌日大同をへて、10時32分に着く。同行は北京大学院生の篠原典生さん。何度か中国の旅を一緒にしている。

大同から、列車は御河に沿って北上し、「方山」の西側の谷を通る。この方山に北魏の孝文帝481年に文明皇后の馮氏の永固陵と、自らの寿陵万年堂、さらに塔院をつくった。北魏の陵寝制である。2001年の8月、大同での北朝史学会に参席したさい、この地を踏査した。丘陵から鉄道を見下ろしたことがあった。学会では米文平さんにお目にかかった。その時以来、嘎仙洞や大興安嶺へも踏査への想いがつづいた。集寧南駅から、吉林省通遼行の汽車(6051次)に乗り換える。集寧南駅は、北京から二連特浩をへて、ウランバートル、イルクーツクへの交通の分岐点にあたる。駅の時刻表には、北京7時40分発モスクワ(莫斯科)行国際列車は、集寧南駅16時23分、ウランバートル(烏蘭巴托)は翌日の22時50分、モスクワには4日目の14時30分に着くという。

翌朝、林西を5時42分、大板を6時53分、林東駅に9時に着く。西安から二晩かかったことになる。林西・大板(巴林左旗)・林東を結ぶ、北方の扇の要のような位置に白塔子がある。鳥居一行は昭和8年、白塔子まで、林西から「シナ大車2台とシナ兵10名(馬隊)と料理人」で未明に出発して、翌日に着いている。

林東駅は町の北はずれに位置し、小型バスで約20分で、林東バス乗り場に着く。途中、ウルジムレン河を渡り、遼の上京の城壁を横切る。林東は巴林左旗。城壁は徒歩10分ほどである。

遼上京の南城壁は、シラムレン河の氾濫などによって大半が壊れているが、その他の城壁・雉城・門は遺存している。城寧に宮殿・寺院址があり、石像物ものこる。翌月の8月、巴林右旗を震源地とするM6の地震があった。石仏は、コンクリートで補強されていた。震災後の中央電視台のテレビ画面の石仏は、見た目には変わりがなかった。

白塔子は、大板(巴林左旗)からが便利だときき、もどることにした。バスで行くつもりであったが、最終便は発車したところであった。さいわい朝に乗って来た17時48分発の列車に間に合い、大板に午後8時3分に着いた。林東駅まで突然の大雨にあい、ずぶぬれになりながら、河を渡った。ビニール張りのバイク(摩托車)ではしかたがなかった。

大板のホテル(天馳大酒店)で、新築の小綺麗な宿であった。明け方、1時30分、激しい雨音で目がさめる。雷雨と朝方まで降り続く。慶陵付近の天気が気になる。大板から白塔子行のバスに乗る。9時ごろに出発、12時に着く。バスから白塔に目にはいる。午後からまた雨が降り出す。タクシの交渉するが、泥濘の道でジープでしか不可能であるという。白塔文物管理处・博物館に行く。慶州城・白塔を雨のなか調査する。白塔子バス停まえの旅館(1泊20元)に泊まる。旅社(木賃宿?)は2〜3軒あるようだ。

7月19日、巴林右旗博物館に連絡したところ、中国中央電視台が番組制作のため、慶陵取材するとのことで、同行することになった。11時過ぎに四輪駆動車3台で、小雨のなか慶陵に向かう。この数日來の雨で、牧場の道、山道は泥地で、地元民のいうとおり普通乗用車では困難であった。

まず東陵の南西250mのところ、新しく発見された遼の壁画墳に行く。墓の近くまで林道がとおる。テレビ撮影ということで、特別に墓室内が見学できた。墓室内の建築に彩色され、花文が描かれる。墓室内に火災をうけた建築部材が散在する。羨道入り口の門にも彩色された斗栱建築がのこる。三陵がいいに、皇帝の家族や臣下などの墳墓が築かれたことが知られた。白塔から東陵まで、直線距離で約13kmである。

そして歩いて数分、約180mのところ、東陵があり、その南面に前殿址が位置する。東陵の

墓室上に盗掘穴がのこる。地下の墓室内は水没状態であるという。

慶陵の三陵の比定については、鳥居龍蔵のいうように、中陵(聖宗)が築造された後に、東陵(興宗)、さらに西陵(道宗)がつくられたのであろう。風水の地理的条件から類推される。

電視台の取材陣とわかれ、歩いて中陵をめざす。西に谷を横断せずに、道なりにもどり、谷筋を通ったのがまずかった。2時間以上かかり、中陵前面の丘陵にたどりついたのがやっとであった。ジープの迎えの時間もすぎ、約束の場所まで急いだ。しかしジープで、白塔子まで帰らず、蒙古人のパオに泊まることにした。モンゴル料理の夕食をとるだけの予定であったが、急遽泊まることになった。最近、いわゆる「草原ツアー」をはじめたばかりのパオであった。夫婦と長女とその弟の四人家族の経営である。このあたりは、農牧地帯であったが、近年禁止されたという。自然環境保護区となっている。鳥居龍蔵の家族は、東陵の近くでテントで野営した。

翌朝、西陵を見学する。その後、マールマンハのパオから出発して、12時30分発のバスにぎりぎり間に合う。バスの運転手・車掌がはじめて白塔を見学することになり、けっきょく12時50分に大板行のバスが出る。来るときに、帰りの便のことを話していたことが効があった。大板まで約3時間、16時ごろ到着。巴林右旗博物館に寄らずに、赤峰に向かう。北京行は「無座」で、やっと確保した座席で過ごすことになった。

北京では、久しぶりに天壇に行く。非典流行影響か、欧米人や韓国人にくらべて、日本人旅行者とほとんど会わない。社会科学院考古研究所に立ち寄って、北京西駅から夜行列車で西安にもどる。

鳥居は東北アジア一帯の調査をおこなった。今日、中国・モンゴル・(北)朝鮮・韓国・ロシアと、「国」は異なるが、諸民族、人々が生活している。今日の国境と歴史上の領域とは別の問題であるはずだ。東北アジアの諸民族と向きあった鳥居龍蔵の没後50年の節目を、21世紀の東北アジアの平和へのいしずえとしたい。

2002年2月16日の徳島地方史研究会・大会では、「鳥居龍蔵と東北アジア」(『論集徳島の考古学』2002年3月)『徳島新聞』1993年10月26日、2002年9月25日、2003年2月15日などをもとに報告した。そのご大興安嶺や遼上京や慶陵を踏査し、鳥居龍蔵の踏査の一端を追体験することができた。

「遼の文化を探る旅」「再び鳥居龍蔵を考える(上)―鳥居記念博物館40周年企画展」(『徳島新聞』2005年2月1日)

昨年(2004)の8月、70年まえに鳥居龍蔵が踏査した『遼の文化を探る』の行程をたどった。

遼寧省瀋陽から、義県万仏堂石窟寺院・泰国寺、錦州広済寺塔、朝陽北塔、内蒙古自治区寧安の遼中京跡、赤峰、巴林左旗遼上京跡、祖陵、慶州城白塔、慶陵、通遼など、三燕・北魏・唐・遼代の遺跡である。

慶陵は遼(916～1125年)の皇帝の三陵(聖宗・興宗・道宗)である。鳥居龍蔵は1930年の10月に調査し、東陵の壁画などを学界に紹介した。

その三陵を見学した。中陵の聖宗の墓は、昭和8年(1933)の調査時は室内は水浸しの状態であったが、今回墓室内に入ることができた、水がたまったり、一部の天井に氷が光っていた。東陵も後室に盗掘坑がみられ、西陵は埋めもどされていた。

1933(昭和08)年、1935(昭和10)年の2次にわたる紀行記である『遼の文化を探る』(章華社、1937年1月)には、『考古学上より見たる遼の文化』を完成するため出版する旨のこと、さらにその終わりに、「私の明治四十一年以来、着手し続行している遼。契丹の政治的・文化的研究を、ほとんど完成の域に達せしむることが出来た」と締めくくっている。

『遼の文化を探る』の「はしがき」が昭和11年12月15日で、出版の日付は昭和12年01月である。11年(1936)06月にはすでに『考古学上より見たる遼之文化図譜』1～4冊が刊行されているにもかかわらず、なぜ「はしがき」に書かれていないのか、不思議である。

図譜は全6冊の予定で、第5冊は画像石の巻で製版は終わっていたらしい。未定稿は400字詰め原稿用紙で、約1600枚、図版は約600枚におよぶ。未定稿ゆえに、『鳥居龍蔵全集』全12巻

(朝日新聞社)には収録されなかったという。なぜか『図譜』の出版元である東方文化学院東京研究所を1936年に辞している。出版にさいして、諸事情があったようだ。

そして近年、それらの原稿類の存在があらためて注目されるようになった。

鳥居記念博物館は開館40年の節目をむかえ、あらたに鳥居龍蔵学の研究拠点をしてふみだそうとしている。またそのように期待される。今こそ、アジアに視座をすえた鳥居龍蔵を見直すことは、今日の東アジア世界にあって重要である。

鳥居龍蔵資料の整理は一步ふみだされている。さらなる一步は、『考古学上より見たる遼の文化』の本文・図版の刊行であろう。

鳥居龍蔵は遼の研究にあたって、同時代の東アジア、北宋文化、平安文化、さらに高麗文化との比較研究の重要性を説いている。

鳥居龍蔵は、1939(昭和14)年、請われて北京の燕京大学の教授に就任した。69歳のときであった。晩年「シナ考古学といえば周・漢のみと心得て居る人がほとんど皆であるに、この北宋考古学、契丹の考古学は、何だか学界に一エポックを形成し、一鮮味を与えるような気がしてならない」(「私共の今回旅行した地方と其の仕事」『ドルメン』1-8、1932年)と若い世代によびかけている。

「高句麗遺跡」「再び鳥居龍蔵を考える(下)―鳥居記念博物館40周年企画展」(『徳島新聞』2005年2月2日)

昨年7月、中国と北朝鮮にまたがる高句麗遺跡が「世界遺産」に同時指定された。吉林省集安の積石塚、壁画古墳、広開土王碑、山城子山城、国内城、遼寧省桓仁の五女山城、さらに北朝鮮の平壤、南浦市、黄海南道一帯の壁画古墳である。世界遺産として、公開されるようになった。高句麗と倭の歴史的つながりはふかい。

その高句麗文化の研究の先駆けとなったのが鳥居龍蔵であった。1905(明治38)年、日本の考古学者としてはじめて、桓仁・集安の高句麗遺跡を踏査し、『南満州調査報告』(明治43年)をまとめた。明治の末年にあって、高句麗の歴史にたいする認識を高めたのであった。

遼東半島で、青銅器時代の支石墓や漢代の遺跡、高句麗山城を調査し、高句麗初期の王都であった桓仁の五女山城、積石塚群、さらに高句麗の交通路の南道・北道を踏査し、通化から集安に入った。平壤の楽浪遺跡と対比しながら、高句麗の存在をうかびあがらせた。

鳥居龍蔵は將軍塚や太王陵などの巨大積石塚と広開土王碑文に着目した。

太王陵の南100mの畑に古瓦、磚が多く散乱し、軒丸瓦を採集し、礎石(八角形の柱座のある)を発見している。それらの建物は、墓と関係のある施設で、「墓守の制度」があったとされている。それから一世紀をへた2004年、その痕跡が発掘されたのだ。太王陵のちょうど南100mで門跡と城壁(垣牆)が確認された。

広開土王碑文の拓本をたずさえるとともに、碑文じたいの研究にも着手していた。碑文にみえる「烟戸」などの陵戸についてふれ、陵園制のあったことを遺跡・遺物から考証したのだ。陵園制と王権のあり方とは密接に関連する。

その太王陵の基壇の近くから「辛卯年好太王口造鈴九十六」と刻まれた銅鈴がみつかった。ただし辛卯年は391年か、その前後の331年か451年のいずれかである。この銅鈴によって、太王陵の被葬者が広開土王であることが決定したという意見がある。しかし「好太王」という名称は諡で、「王」に「太」、さらに「好」という美称がついたものだ。「明治好王(文咨王)」「陽崗上好王(陽原王)」などという王がほかにもいる。

広開土王碑文(414年に長寿王が建立)の字体などに類似し、391年である可能性がつよい。太王陵は広開土王陵でなく、その以前の王ということになる。まだいくつかの解釈の余地がある。

なお碑文にみえる、「辛卯年」に倭が海を渡ったというのは、高句麗が新羅や百済を征服するための大義名分で、倭を仮想敵国としたにすぎない。

鳥居龍蔵は、魏の將軍毋丘儉が、244・245年に高句麗に侵攻したことを記した碑文を学界に紹介した。その発見を契機に高句麗の王都である「丸都城」「国内城」についていち早く考証している。その国内城・山城子山城の発掘調査も2004年に大々的におこなわれた。

鳥居龍蔵に集安調査いらい、100年、高句麗の考古学研究はあらたなる画期をむかえている。鳥居龍蔵の『南満州調査報告』（明治43年）に次ぐ、『通溝』（1938年）そして『集安高句麗王陵』・『国内城』・『丸都山城』・『五女山城』の報告書が刊行された。

「世界的人類学者とその妻 鳥居龍蔵・きみ子」郷土文化講座（県文化振興財団主催）「阿波の歴史を彩った人々」（講演要旨）（『徳島新聞』2005年10月21日）

私は東北アジアを対象に3世紀の『魏志東夷伝』にみられる世界、つまり漢魏から、朝鮮の楽浪・帯方郡や高句麗、その後のツングース系の渤海、モンゴル系の契丹族が建てた遼といった諸民族の歴史を調べており、鳥居龍蔵の研究領域をほとんど重なる。

昨年夏には、70年以上前に鳥居龍蔵が踏査した平壤周辺の世界遺産・高句麗古墳群、遼代の遺跡慶州城、白塔などを調査することができた。そのような遺跡を訪ねると、必ず鳥居が踏査していて、後を追いかけている気がする。

また鳥居は69歳から81歳まで、北京の燕京大（現在の北京大学）の客員教授を務めたが、私は今年4月に同大の姉妹校にあたるハーバード大学で、高句麗についてのシンポジウムに出席したが、そのときは鳥居のことが話題となった。韓国の留学生で、鳥居の研究をしたいという人もいた。

鳥居の初めての海外調査は25歳の時の中国・遼東半島で、大連から旅順へ4ヶ月徒歩で踏査し、析木城では青銅器時代の支石墓（ドルメン）を初めて紹介した。その後も毎年のように各地で調査を行い、5世紀の高句麗遺跡の將軍塚を発見して写真を撮り、有名な「広開土王碑」の拓本を取って分析している。この碑は傷みがはげしく、鳥居の拓本は貴重な基礎資料となっている。こうした調査を鳥居は家族とともにこなっていて、とくに東京帝大助教授を辞任して以降の満蒙調査などでは、家族ぐるみといえるものだ。

きみ子夫人は徳島県出身で、上野音楽学校に在学中の1901年、鳥居の恩師で東大人類学教室教授・坪井正五郎と徳島出身の国学者小杉楹邨の媒酌で結婚。1906年に夫婦そろって、モンゴル・喀喇沁王府に日本語教師として赴いて以来、生涯にわたって鳥居のフィールドワークを支え続けた。

きみ子自身も1906年に旅行記『蒙古行』を出版、さらに1931年には、それまでの論文をまとめた大部の学術書『土俗学上から観たる蒙古』を出している。当時女性として民族学的調査をする人はおらず、画期的な出来事だ。きみ子は不屈の精神と体力、さらに語学力で蒙古の風俗・民俗調査をおこない、音楽や服装を研究した。きみ子は人類学者として位置づけられる。

そんな鳥居夫妻には、長男龍雄（1905年生）、長女幸子（1907年生）、次女緑子（1910年生）、次男龍次郎（1916年生）の4人の子供がいる。このうち龍雄は、人類学者をして将来を期待されながら、バリ留学中に21歳の若さで亡くなっている。

徳島と縁が深いのは龍次郎で、1998年に82歳で亡くなるまで「鳥居博士顕彰会」の事務局長として、県立鳥居記念博物館（鳴門市）の管理・運営を担った。写真の腕はプロ級で、遼関係の調査はほとんど龍次郎が撮影を担当した。鳥居は、フィールドワークにガラス乾板式の写真機を初めて導入したことで名高いが、それを支えたのがこの人だ。

幸子と緑子はスケッチや見取り図を描くのが上手で、緑子は慶陵の皇帝遼墓にのこる四季の壁画などを模写したことがよく知られる。幸子はパリに留学しているので、学術報告書に必要なフランス語の抄訳の手伝いもしたと思われる。龍蔵、きみ子、幸子、緑子の4人の共著に『西伯利亞から満蒙へ』があり、やはり家族が”人間・鳥居龍蔵”の姿を身近で見てつづった旅行記には、父親としての顔が出ていて興味ぶかい。

こうした家族ぐるみの調査成果をおさめたのが鳥居記念博物館で、2002年には、遼を中心として大量の未発表原稿が発見された。そんな鳥居再評価の動きが高まるなか、老朽化を理由に記念博物館を閉館する動きがある。そうなれば、徳島県にとって大きな痛手だ。

和歌山県田辺市に「南方熊楠記念館」、高知市に「牧野富太郎記念館」という、それぞれ地元出身の世界的な学者の名を冠した公立の施設がある。徳島で「鳥居龍蔵」の名をなくしてはいけなし、顕彰していく場が必要と考えるので、県民の声を結集し、保存を訴えていきたい

と思っている。

「鳥居龍蔵の中国西南部踏査一足跡をたどる(上)(下)」(『徳島新聞』2008年5月21日、5月22日)

鳥居は1902(明治35)年7月30日、横浜を出港し、8月6日に上海をへて、長江をさかのぼり、同十五日漢口(湖北省武漢)に着いた。貴州へは湖北から四川省重慶を経る北道でなく、長江から洞庭湖を渡り、岳陽へ、そこから沅江(長江支流)を上る湖南路をとり、10月1日黔陽(湖南省)に到着した。水行2ヶ月であった。翌日、陸行貴州に向かう。漢口からは、「麻陽船」とよばれる湖南麻陽県人の貨物旅客運搬船に乗る。途中常德府のはからいで「砲艦」(艦長と水夫一二人)に護衛された。「艦の形は純然たる演劇気分の三国志式」で、海賊から守護するためであった。

貴州鎮遠府の樓閣石橋、貴定、貴陽南方の青岩や恵水八蕃、安順、朗岱の苗族・布依族の寨(村)、黄果树の滝、雲南省板橋の羅猓(彝)族、雲南昆明から四川省成都へ、金沙江をさかのぼり、成都に至る。途中、西昌(寧遠)で彝族やチベット族の村々をたずね、人々と出会い、調査した。成都から再び、船で重慶をへて、2月24日漢口までもどる。2月28日上海に、3月13日横浜に着いた。じつに7ヶ月余の調査行であった。

鳥居の調査方法の特色は滞在型でなく、踏査型だ。1日20～30km、朝7時ごろから夕方まで、乗馬による踏査であった。同行者は通事(通訳)と人夫2～3人。ところどころで数時間から数日、滞在しながら、言語、風俗、集落構造、家族関係を調査した。その記述は、陳寿編纂の『三国志』魏書東夷伝を彷彿させる。赤壁の戦いの地を船でとおり、『三国志』の世界に思いをはせている。

湖南省沅州から便水への道、冷水舖に近い、「この附近は山の傾斜やや急であって、その裾に水田を設けて居るが、この状態はもとより、その他四周の地勢・風景等、総て余が郷里徳島の八万によく似て居る」と記し、その前の洪江司でも「余が昨年旅行した所の四国の山中、阿波的那珂川上流の景色」と似ると望郷の念をいだいている。昇州で山越えて貴州に入り、はじめて苗族と出会った。

わたしの旅は飛行機と列車・バスを利用した15日間であった。関空から上海、武漢まで飛び、翌日夕方(17時18分発)の夜行列車で早朝、懷化に着いた(5時43分着)。うまいぐあいに駅前で客待ちをしていた洪江市(黔陽)行のバスに乗りあわせた。黔陽は鳥居が船を下り、陸行をはじめた地だ。黔陽(黔城)は明清時代から栄えた商城都市で、石畳の道路や商館などの建築がよくのこる。懷化(沅州)からは高速バスで貴州省凱里にはいった。貴州高原は平坦で、奇岩・烏帽子形の山がつづく、山頂近くまで開墾され、貴州の風景をかもします。貴州との省境で、車中から畑作業する苗族をみた。凱里周辺では黔东南苗族侗族自治州民族博物館、郎徳や上郎徳苗族寨(村)や南花苗族寨、舟溪曼洞苗族寨を歩いた。曼洞では旧暦1月13日(2月19日)の迎春祭りの舞踊がくりひろげられていた。単調なリズムで、同じ所作がたんたんとくりかえされる。鴨塘鎮の寨では銅鼓を打ち鳴らす踊りをみた。凱里から貴陽に。貴州省博物館では、現在の諸民族についての展示のほか、戦国～漢代に貴州に存在した民族によって建てられた「夜郎国」の特別展が開かれていた。

貴陽から安順へは路線バスで。安順から黄果树瀑布と近くの石頭寨(鎮寧布依族苗族自治县)をたずねる。石頭寨は大集落で、周辺の村々から人々が祭りに集っていた。

安順北東の天龍鎮の屯堡城は屯田兵の城塞だ。鳥居は飯籠塘に至り、「此処はシナ人の一小市街であって、戸数五、六十戸ばかり、やはり苗族と雑居して居る」。近くに鳳頭鶏と称する民のむらがあり、そこに明代の遺民、明代の「苗族征伐」に屯軍(屯田兵)として派遣、移住した漢族の末裔がいることを記す。その婦女子が鳳凰の頭のように前髪を高く束ねるのは江南地方の髪のかい振りの遺風だという。鳳頭鶏が屯堡人であることなど国立民族学博物館の塚田誠之さんによって調査されている。明代における苗族征伐、苗族の抵抗、派遣された兵の境遇など、支配、被支配側の両側面からみている。鳥居は「蛮族」という言葉をつかうが、清朝末期の政治情勢と無関係でない。わたしも旧道を通り、安順に向かった。

貴州安順から雲南昆明まで、鳥居は20日間をかけ、西に進み、峠を越えた。わたしは日程上、やむなく列車(23時34分～9時10分)に乗らざるをえなかった。バスならば一昼夜かかる。線路は北に迂回、咸寧を大回りして昆明に至る。目が覚めたのは雲南の曲靖駅であった。貴州から雲南への東西の道に沿って高速道路の建設が予定されている。近い将来く開通するのであろう。

昆明から麗江まで行き、ミャンマとの国境の山並みを見ることにした。昆明から高速バスで大理(約五時間)、麗江から一般道路で3時間を要した。途中で、白族の村々が点在する。昆明から12時23分発の列車で、金沙江を北上し、成都に行く。鳥居の通った百年前の道に沿い、鉄道が敷設されている。

100年前に鳥居が撮影した貴州・雲南の50余枚の乾板写真はかけがえのないものだ。黄才貴『ガラス版に映し出された文化―鳥居龍藏博士の貴州人類学の研究』(貴州民族出版社、2000年)は貴州最初の民族写真と評価している。黄才貴さんは1998年2月に鳥居記念博物館を訪れ、鳥居龍次郎さんに会っている。

鳥居の民族学的調査はなによりも先駆けであった。1907年の『苗族調査報告書』、1926年の『人類学上より見たる西南支那』は中国内外の研究者にとって基本文献となっている。それらではさらに福建・広東・広西などからインドネシアにかけての調査の必要性を説き、「未だ暗黒界裡にある西南蛮夷」に光明をあてたいと記す。しかしながら、その後、台湾や西南中国から蒙古・朝鮮・樺太・シベリヤ・中国東北への調査をすすめた。鳥居の主眼、問題意識はアジア全域にひろがってゆく。未知の世界への探検であった。そして晩年の10年は遼の研究についてやした。

鳥居龍藏の民族学・考古学的調査・研究成果は、今日の視点から評価することによって、よりいっそう意義がたかまる。鳥居龍藏の偉業は国際的、学際的に注視されている。その鳥居学の拠点となりうるのが鳥居記念博物館である。今、その移転問題に直面している。1992～1993年、国立民族博物館・徳島県立博物館で開催された「鳥居龍藏の見たアジア」特別展は民俗資料を中心に展示された。今後、鳥居記念博物館が保管する多くの未発表原稿や考古資料、借用資料をふくめ、常設展示として再現する。全国で唯一の博物館だ。こんにちの鳥居龍藏・鳥居きみ子が果たした考古学・民族学的研究を再評価し、人と仕事を顕彰し、伝えていけるのは徳島の地をおいてほかにない。

「黒龍江(アムール)・大興安嶺」(『総合科学部人間社会文化研究』17、2009年12月)

黒龍江省同江・佳木斯 2006年10月24日～10月31日、中国とロシアの国境を流れるアムール川(黒龍江)とその二大支流の松花江、ウスリー川(烏蘇里江)の三江平原地帯を踏査した。3世紀の史書『三国志』魏書東夷伝の歴史をさぐる、国立歴史民俗博物館のプロジェクトの一環として踏査した。東夷伝に記録された挹婁、夫餘、沃沮、高句麗など、ツングース系の諸民族が興った地域であった。黒龍江南岸の中興城(金)、佳木スの鳳林土城や滾兔嶺土城(挹婁)、吉林の東団山城(夫餘)、龍潭山城(高句麗)などの遺跡を調査した。

黒龍江省同江のアムール河畔に立った。黒龍江省東北端の地。その一帯は、漁獵民族の赫哲族(ロシアではナナイ族、ゴリド族とよばれる)の居住地である。

凌純聲によると、中国内の赫哲族は松花江から烏蘇里江流域に分布する(凌純聲1934『松花江下游の赫哲族』(『中央研究院歴史語言研究所季刊甲種之十四』)。

松花江流域(四百餘人)：樺川縣境(蒙古力、蘇蘇屯、萬里霍通)、富錦縣境(哈庫碼、富克錦、嘎爾當、霍通吉林、窪其奇)、同江縣西(古必扎拉、圖斯科、泥爾博)、黒龍江省綏濱縣境(顎爾米)

混同江(三百八十餘人)：同江縣東(拉哈蘇蘇、齊齊喀、穆紅闊、哈義、街津口、得勒奇)、撫遠縣東(俄圖、秦皇魚通、上八叉、下八叉、義日嘎)

烏蘇里江(四百餘人)：撫遠縣南(交界牌、海青魚廠、別拉紅)、饒河縣境(饒河口、團山子、杜馬河、紅石礮子、阿巴清、西博格林)、虎林縣境(黃崗、黒咀子、松曩查)

泉靖一は1936年に黒龍江省蘇蘇屯(旧三江省旧樺川県城)のゴルジ族を調査した(泉靖一・赤松

智城1938「赫哲（ゴルジ）族踏査報告」（『民族学研究』4巻3号）。当時周辺の松花江流域に蘇蘇屯9家族、万瓦霍吞（ゴルジ語の古土城趾）に5～6家族、富錦西方1里の大屯と富錦間に30家族、同江・豊清附近に若干が居住していた。

1919年の鳥居の調査後、数十年にして同世紀末に大興安嶺から黒龍江・アムール流域の考古学的・民族学的調査が着手、推進されつつある（大貫静夫・佐藤宏之2005『ロシア極東の民族考古学』六一書房）。

2000年の第5次人口統計によると、赫哲族は4640人、中国の人口のうち最小の少数民族の一で、56民族のうち55番目という（張敏杰2008『赫哲族漁獵文化遺存』黒龍江人民出版社）。凌純聲の調査をふまえ、赫哲族の固有の文化の物質的、非物質的文化遺産の研究、民族資料の収集がすすめられているという。

2007年10月20日～10月31日、国立歴史民俗博物館のプロジェクトで、大興安嶺を縦走するかたちで、大興安嶺北端、黒龍江の漠河まで行く。

10月23日、遼寧省瀋陽北方の高句麗の石台子山城に行く。瀋陽発19：30の列車で哈爾濱を経由して内蒙古加格達奇に向かう。

10月24日、加格達奇に13：53着。マイクロバスに乗り換え、約4時間、大興安嶺の山並みにそって北にむかい、塔河にまで行く。18：30に到着。

10月25日、朝7時に出発。加漠公路（317号線）で塔河から西に大興安嶺を横断して山中の漠河まで向かう。山中に雪がのこる。14時すぎに到着。流氷の黒龍江辺に立つ。対岸はロシアのイグナシーナ。金鉱で栄えた漠河の港は上流側にある。現在「北極村」として観光地化されている。旅館も多く、従業員も多い。「北極郷中学」もある。16時ごろ漠河を離れる。雪道のうえ、日が暮れ、徐行運転。18時30分、西林吉までもどる。塔河に着いたのは0時30分であった。

10月26日、09：45塔河から顎倫春自治旗の阿里河に向かう。予定の十八站のオロチョン村落へは断念する。阿里河では嘎仙洞鮮卑碑文を調査し、顎倫春博物館を見学する。阿里河は2003年以来2度目。同年6月末、滞在していた長春で乗車、哈爾濱で乗り換え、夜明けまえの03時09分に阿里河に着いたのだった。阿里河では顎倫春博物館を見学。オロチョンの民俗室、生態（自然環境）室、鮮卑室からなる。烏盟地区出土の銅鍔、鉄鍔、渦紋装身具などの遺物が展示されている。大興安嶺山中の嘎仙洞洞窟に行く。

10月27日、深夜に雪。阿里河一帯では初雪であった。海拉爾まで行く予定を変更せざるをえなくなる。雪の嘎仙洞を再び訪れる。夕方、加格達奇まで移動。

10月28日、加格達奇発6：37で海拉爾に向かう。18：42に到着。約12時間で大興安嶺を横断する。その夜、大連行きの列車で瀋陽まで行く。2003年6月には海拉爾まで行って宿泊し、翌日に満州里まで行った。またしても札賚諾爾遺跡に踏みいれることができなかった。

10月29日、瀋陽に到着。遼寧省博物館に。10月30日、遼寧省博物館をへて帰国。

鳥居龍蔵は1919年大興安嶺山中を踏査し、1923年に大興安嶺をこえ、海拉爾・満州里まで行った。すでに大興安嶺の自然環境の破壊がはじまっていたことを指摘している

北のオロチョンは嫩江の北西に走って居る興安嶺の山中から、アムールの対岸の方面にわたって分布し、南のオロチョンは墨爾根あたりから南の興安嶺の山中に分布して居る（鳥居龍蔵1924『人類学及人種学より見たる北東亜細亜』）。

元来この辺のオロチョンの分布地帯として最も鞏固なる区域であった。ロシア人がこの附近に鉄道を敷設しない以前は、南方オロチョンは終始此処に水草を追うて仮小屋生活をなし、狩猟を業として肉を食い毛皮を売り、以てその桃原的生活を楽しんで居たのであった。然るにロシア人がひとたび東清鉄道を敷設するや、彼らの住居地は遠慮なく切断せられ、彼らが生活の資源たる野獣の棲息せる山林は濫伐せられ、一朝にして彼らの樂園は破壊されたといつてよい。殊に材木屋の山中侵入、露人、シナ人の奥深く這入り込んで来たのは、彼らの住地を他に求めしめる原因となった（鳥居龍蔵『人類学及人種学より見たる北東亜細亜』）。

泉靖一は、1936年に大興安嶺南部のチョル川流域のカントラー帯を1ヵ月にわたって調査した。今日の牙克石市博古図鎮、綽源鎮、巴林鎮の地域である（泉靖一1937「大興安嶺東南部オロチ

ョン族踏査報告」(『民族学研究』3巻1号)。

今西錦司らの興安嶺探検は1942年5月～7月であった(今西錦司1952『大興安嶺探検』毎日新聞社)。大興安嶺山系のドラガチェンカからガン河の流域、ビストラヤの源流、黒龍江の黒河から漠河、チーリンジからターリンホ河水系の自然環境、オロチョンの生態が調査された。

顧徳清は1982年～1985年にかけて、大興安嶺一帯のオロチョン・エヴェンキ族の生活風俗、狩猟についての記録をのこしている(顧徳清2001『獵民生活日記－1982～1985探訪興安嶺』山東画報出版社)。1982年6月15日～1982年7月14日に阿里河の東北、加格達奇、塔河、十八站、白銀納、呼瑪、黒河、新生、愛輝、遜克、新顎、新興、嘉蔭、1982年11月16日～12月5日に阿里河の南、加格達奇、朝陽、古里、大楊樹、烏蘇門、1984年3月17日～4月30日、阿里河の西北方、敖魯古雅の鄂温克族郷、1984年7月17日～9月14日、飼養馴鹿鄂温克族の生活風俗、1985年3月8日～3月24日に漠河境内の狩猟、1985年7月8日～8月4日に敖魯古雅、交労格道の狩猟を記録している。顧徳清の「飼養馴鹿鄂温克狩猟民風俗撮影」展が海拉爾、北京民族文化宮などで開催された。

大塚和義は1985年から1986年、大興安嶺一帯の満帰、敖魯古雅、阿里河、南屯、大楊樹、古里、烏魯布鉄などの地域でオロチョン・エヴェンキ族の民族学的調査をおこなった(大塚和義1988『草原と樹海の民－中国・モンゴル草原と大興安嶺の少数民族を訪ねて』新宿書房)。

2003年夏、中国内のオロチョン族による狩猟生業は終焉したとの報道があった。

2009年9月15日～9月26日、大興安嶺から阿爾山、モンゴルとの国境、ノモンハン戦場、大興安嶺南麓の内蒙古の遼上京、遼墓、黒龍江省阿城の金の上京をめぐる。

2009年9月15日、関空から長春に飛ぶ。春誼賓館(旧ヤマトホテル)に泊まる。1981年いろいろの宿泊となる。

9月16日、長春駅から列車で白城駅に出発。白城博物館で鮮卑、遼の遺物をみる。

9月17日、白城駅発の列車で阿爾山駅に向かう。20:00ごろ到着。零下にちかい。

9月18日、朝08:00ごろタクシーでノモンハン戦場跡に行く。大興安嶺を越えて、草原、砂漠地帯の戦場跡。戦争博物館がつくられている。砂漠地帯の戦場の一端をかいまにる。阿爾山市にもどって、バスで烏蘭浩特市(王爺廟)にむかう。

9月19日、烏蘭浩特市からバスで科爾沁右翼中旗をへて、通遼にたつする。18時の列車で林東(巴林左旗)に行く。20時ごろ到着。

9月20日、遼上京、南塔をまわる。

9月21日、巴林左旗からバスで阿魯科爾沁旗に。博物館。午後、遼の耶律羽之墓・宝山墓に往復。耶律羽之墓の北西に鳥居の調査した白城土城が位置する。

9月22日、阿魯科爾沁旗からバスで通遼をへて庫倫旗まで行く。

9月23日、庫倫旗から車で遼韓州故城を見学して金宝屯鎮。バスで双遼(鄭家屯)まで行く。列車で四平市まで行き、哈爾浜行きの列車に乗る。哈爾浜に深夜01:30に着く。

9月24日、列車で阿城県の金上京に行く。哈爾浜をへて、長春にもどる。

9月25日、長春市内。9月26日、長春から関空へ。

「サハリン(樺太)調査」(『総合科学部人間社会文化研究』17、2009年12月)

9月18日、徳島(14:50)から羽田空港(14:25)を経由して、函館空港(19:10)に着く。19日、函館空港発12:45が遅れるので、その間を利用して函館市内の北方民族資料館と函館市立博物館に行く。16:00空港に行き、出国手続き。18:20に離陸。予定より8時間の遅れ。その間どうもソウルまで往復したとのこと。乗客は13名。ほとんどビジネス客。19:25でユジノサハリンスクに着陸。約1時間、近い。現地時間は+2時間の21:25。約20分でホテルにつく。関根達人(弘前大学)さんと同行。通訳は在ロシアの韓国朝鮮人の徐載万さん。

9月20日、ユジノサハリンスク駅前のバス乗り場からコルサコフ(大泊)に行く。20～30人乗りのバス。湿原地帯を南下し、約1時間でコルサコフ市街地にはいる。建市60周年記念祭がおこなわれ、市内の交通や博物館は無料。コルサコフ博物館に行く。一室が博物館、入り口に樺太アイヌと「鈴谷南貝塚(大泊郡千歳村大字貝塚)」の土器、石器が展示されている。近くの日

本の統治時代の神社の跡地をたずねる。近辺に日本人墓地もある。タクシーで貝塚に行く。南貝塚のチャン跡を見学。壕と堅穴の痕跡がのこる(新潟武彦・宇田川洋1990『サハリン南部の遺跡』北海道出版企画センター)。近くの学校(小学から高校)に隣接して博物館があるが、管理人不在で入館できなかった。アニワ(巫庭)湾の景観がわかる。ユジノサハリンスクにもどる。レーニン通り、広場でスターリン像を見る。

9月21日(日)、サハリン州立郷土博物館の見学。サハリン大学周辺の書店をまわる。18:25発の列車でノグリキに向かう。寝台車(4人部屋)。北上して、ドリンスクを過ぎると、オホーツク海岸を走る。20時ごろまで薄明かり。

9月22日(月)朝8時25分予定どおりノグリキに到着する。駅近くのホテルに線路沿いに行く。ホテルで入境者登録。10:30ごろ博物館に行く。周辺の考古・民族資料が展示。ニヴフのつくった最後の舟も展示。13時ごろ小舟(発動機船)でヌイヴォに行く。ツイミ川が流れこむヌイヴォ潟(湾)を横切る。ニヴフの漁村。潟の砂州上に離れて3軒も漁村。夏場の漁屋。二家族共同でサケなどの漁撈をおこなっている。一家族は三世代からなる。第一世代の女性と第二世代の夫婦、第三世代の兄弟からなる。隣接する家族(親族)も三代からなる。家屋はカマドを備えた台所と寝室(一室)と作業場、物干し場、トイレからなる。離れたところに共同の井戸がある。内湾でのサケ猟のため網を仕掛ける舟に同乗して、対岸まで送ってもらう。満潮をまって猟にでたが、湾内は浅瀬で、船に藻がからみつく。湾の本土側に網をおく。途中水鳥を鉄砲で射止めていた。ご馳走になったスープにはいていたもの。純粹のニヴフの家族はすくなくなっているという。ロシア人と婚姻する。沖合に天然ガスの採掘ボーリングがみえる。

9月23日(火)朝8時ごろ、ジープをチャーターして、ツイミ川を遡ってティモフスクに向かう。途中チル・ウンヴドへ至るツイミ川の橋が崩壊、遮断されていた。このチル・ウンヴドはニヴフなどの諸族を集めた村落であるという。204人のニヴフとロシア人をふくめ、360人が住む。ノグリキに600人、バルに180人、オハに80人、ネクラフサカに220人、マスカリボに44人、リブノェスクに15~20人、ポロナイスクに480人が住むという。スラヴォ附近のツイミ川をみながら、13時ごろティモフスクにつく。博物館の見学。ティモフスクはツイミ川上流域にあたり、その南はボロナイ川の上流域にあたる。鳥居龍蔵はこの地からツイミ川を下ったのだった。

9月24日(水)、ティモフスク07:24発の列車でボロナイスクに。12:50に到着。博物館見学。

9月25日(木)、午前中にプロムィスロヴォエ遺跡の見学。港から渡しで中州に行く。河口では干満を利用したサケ猟をしている。08:10ロシア製ジープに乗り、浜辺や砂州、海岸段丘上を走る。砂浜には沙鉄が縞状に堆積している。途中、ニヴフ人とロシア人の村をすぎる。遺跡はサハリン博物館と日ソ極東・北海道博物館交流協会が共同調査がなされた。その後もボロナイスク博物館は継続調査を実施している。ほぼ3時間の踏査をおえ、ボロナイスク12:50発のユジノサハリンスク行の列車に乗る。21:00に到着。

9月26日(金)10:00にホテルを出て、空港に行く。飛行機は予定どおり、12:30に離陸する。アニワ湾上空、宗谷海峡をまたたくに越え、函館に着陸する。2008年3月、雪の礼文島の岬に立って、サハリンをのぞんで、はやくも実現した旅であった。函館から根室に向かった。翌日の〈研究フォーラム『夷酋列像』と道東アイヌ〉に参加するためだ。

9月27日(土)研究フォーラム、9月28日(日)ノサップ岬、釧路博物館、9月29日(月)白老アイヌ民族博物館。

サハリンのノグリキの海岸からコルサコフ、北海道の根室へとオホーツク海域をたどり、千島列島をのぞんだ。

1808年の間宮林蔵、1871年の岡本韋庵(1839~1904)につづき、鳥居龍蔵は1899年に千島列島、1921年に樺太を調査した。わたしも間宮林蔵の200年後の2008年にサハリンの地を歩いた。シベリヤ出兵から世界第2次大戦、日ロの領土問題、天然ガスの開発と、サハリンは変貌をとげつつある。

「鳥居龍蔵と私」(『徳島新聞』2011年5月23日)

徳島市出身の考古学、民族学、人類学の先駆者・鳥居龍蔵(1870~1953年)は、満州(中国

東北部)、蒙古、朝鮮、台湾、中国西南部、樺太(サハリン)、シベリア沿海を調査した。アジア考古学を専門としている私と研究領域が同じだったこともあり、私は鳥居が踏査した東アジア地域のうち、千島、アムール川下流をのぞいて、ほとんどを歩いてきた。いわば鳥居の100年後に、私も同じ足跡をたどったことになる。

そこであらためて驚かされたのは、鳥居の問題意識の鋭さだった。鳥居は、東アジア全域の中で、日本の歴史や文化、民族が形成されていったと考えていた。史書などの文献資料を読みこなしたことで、広範なフィールドワークにもとづくものであった。

私と鳥居との出会いは、学生だったころにさかのぼる。考古学を専攻した私は鳥居の『有史以前の日本』にめぐりあっている。松本清張の小説「断碑」にも、木村卓治(考古学者・森本六爾)の媒酌人として鳥居夫妻の名前が実名で登場した。清張は鳥居の銅鼓論についても高く評価していた。鳥居は西南中国の調査で、貴州省貴陽から持ち帰った銅鼓について研究し、銅鐸の銅鼓起源論を発表している。銅鐸は今でこそ朝鮮青銅器文化の小銅鐸を祖形としていることが明らかになっているが、その以前に、銅鼓と銅鐸を詳細に比較したのだ。

九州大学大学院の学生時代、指導教授だった岡崎敬先生にいわれ、「鳥居龍蔵全集」第6巻の校正を手伝ったことがある。その巻には『遼の文化を探る』などの遼関連の論文がおさめられていた。私はそのとき初めて、遼の文化がどんなものだったかを知り、鳥居に対する関心をつよめていった。

奈良県立橿原考古学研究所を経て1992年、徳島大学へ赴任したとき、あいさつ状に「鳥居龍蔵の研究をしたい」と書いたのも懐かしい記憶だ。20年近く経った今もとくんでいる。

去年は鳥居龍蔵をモデルとした映画「地平線」(大宅壮一脚本、1939年9月公開)を徳島ホールで上映された。脚本やチラシをみて、重要な事実に気がついた。映画は、同年5月11日開戦のノモンハン戦争の前夜の状況をものがたっている。数ヶ月にわたるロケが戦争と同時進行しておこなわれていたのだ。

日本軍は大敗した。しかし映画では勝利したことになる。つまり、軍国主義という時代背景の中で、鳥居をモデルにした主人公は、国策にうまく利用されてしまったのだ。その年の8月、鳥居はハーバード燕京研究所の客員教授として北京に渡った。その9月に封切られた映画は見えていないかもしれない。

たしかに鳥居が、日本の植民地主義、帝国日本の大陸進出にそって、東アジアの踏査を進めたことは事実だ。しかし、軍事的な侵略に積極的に加担したわけでは決してない。知的探求のため、学問的な純粋な目的で機を生かしたのだ。

私は2009年、吉林省長春から列車で旅をし、平原や砂漠地帯が広がるノモンハンの戦場に立った。かつての戦場の一角には戦争博物館が建つ。2010年には、その西方、モンゴルの首都ウランバートルから東北約360kmのロシア国境付近で、韓国隊によるドルリックナルス匈奴墓群の発掘現場を見学した。鳥居が調査した大興安嶺からモンゴルにかけては、鮮卑や匈奴の文化がひろがっている。

モンゴル東部の国境地帯を南北に縦断し、王府を訪ね、モンゴル族の民族調査をした鳥居。ウランバートルの歴史民族博物館に展示された往時の写真を見て、龍蔵・きみ子夫妻の調査記録は、百年前のモンゴルと、戦争や平和を映し出していると痛感せずにはいられなかった。

「自助にして自力」。他人の力に頼らず、自ら己を助けて、自らその力を尽くす。鳥居の座右の銘だった。形質人類学、地質学、冶金学、植物学、言語学など多彩な分野にも関心を示し、自分で勉強していく姿勢は、学ぶべきものが多い。

百年前は移動も大変だった。鳥居は何度も何日もかけて踏査した。常にフィールドワークの中で物事を考えた。

鳥居が残した膨大な写真は普遍的価値をもつ。鳥居が踏査した地を訪ね歩いて、百年前と同じ場所で写真を撮り、それを実感している。

私は今、鳥居と同じフィールドワークを土台にして、鳥居龍蔵論まとめたいと思っている。鳥居の晩年の仕事である遼の歴史と文化など、東北アジア考古学の研究に励みたい(聞き手・柏木康浩)。

「鳥居龍蔵とアジアの近代－満蒙調査と張作霖事件・ノモンハン戦争－」（『鳥居龍蔵研究』創刊号、2011年2月）

I 満蒙調査と張作霖事件

鳥居龍蔵一家は1928年4月12日～1928年7月13日にシベリヤから満蒙へと旅している。その間に「張作霖事件」に遭遇した。6月4日、奉天（瀋陽）の皇姑屯で張作霖の乗った列車が爆破された。関東軍参謀河本大佐らの策謀であった。その日、鳥居龍蔵らは奉天から新京（長春）をへて、吉林に滞在していた。張作霖事件前後の「満州」情勢の渦中にあった鳥居龍蔵の行方をたどる。しづかに浸透してゆく「満州」支配、戦争の時代の世相をかいまみる。

1928年の旅は極東シベリヤ1ヶ月、満蒙3ヶ月におよんだ。その旅行記は鳥居龍蔵・君子・幸子・緑子1929『西伯利ヤから満蒙へ』（昭和4年5月、大阪屋號書店）である。

はしがき シベリヤの旅 シベリヤで調べたこと ハルビンから大連まで 東京から大連へ
奉天とまた大連 蒙古の調べ オボ山麓の墳墓 ハルビンから マンヂユリへ 阿什河と金の上京
ハルビン 吉林から敦化まで 敦化から哈爾 巴嶺山脈まで 敦化を出て吉林に帰る 吉林から長春
奉天を経て大連に帰る 鞍山の調査 鞍山苗圃群の発掘 千山と桜桃園 旅順へ 大連から日本へ

1928年4月12日に東京を出発。4月14日に敦賀港から乗船し、4月16日に浦潮（ウラジオストック）に上陸した。

4月19日に極東大学を見学したあと、午後3時に領事館内で、ウラジオストック居留民の茶会があり、鳥居は「渤海の遺跡」について講話する。

4月21日、午後8時40分の汽車でハバロフスクに向かう。

4月22日、夕方の6時、ハバロフスクに着く。川角領事の出迎え。

4月23日、総領事とともにアムール湖畔をドライブ。

4月25日、午後8時20分の寝台列車で、アルハラに向かう。ハバロフスクの外事課長ウエクスレル、通訳のニーナが同行。

4月26日、午前6時にアルハラ駅に着く。鉄道宿所。

4月27日、午前8時、ブラゴエ行きの列車（臨時列車）で、ブラゴエチエンスクに向かう。午後2時、ある駅で食事。夜11時、ブラゴエチエンスクに到着。平塚領事が出迎え。

5月1日、朝5時の汽車でハバロフスクに向かう。モスクワからの急行に乗れず、臨時列車の三等寝台に乗る。5月2日朝7時にハバロフスクに到着。

5月5日、晩にウラジオに向かう。

5月7日、正午の汽車でニコリスクに行く。アルセニフ博士同行。ニコリスクのフェオドル教授宅でアルセニフ博士らと晩餐会に招待される。

5月9日、午後5時の汽車でハルビンに向かう。ウスリー流域を走り、グロデコウを経て、夕方の7時頃ボクラチヤに着く。清溝嶺の麓にある、ロシアと支那の国境。満鉄出張所の満鉄代表の楠瀬長生等が出迎え。

5月10日、松花江流域の阿什河を経てハルビンに到着する。プラットホームで考古学者のトルマチョフ教授や満鉄の堀内竹次郎等の出迎えをうける。

5月11日、ハルビン市街を見物。トルマチョフ教授によると、ハルビン博物館は支那政府の管下になったという。

5月12日、大連に向かう。長春で満鉄線に乗り換え、ヤマトホテルで休憩。5月13日晚9時ごろ大連に到着。

5月14日、朝8時10分の急行で大連駅を出発。午後3時奉天駅に着く。満鉄医科大学佐藤教授が出迎え。ヤマトホテルに入る。日本の総領事館を訪問、林總領事に「御目に掛り蒙古人の打合せをした」。「南北戦争の為、敗残の北軍が算を乱して、何日何時北方の何れかの方面に武器を持って乱入して来るか計られぬとの事」であった〔鳥居君子1928〕。

5月16日、午後1時半、大連行きの汽車に乗る。龍蔵は午前中、満鉄の医科大学病院で耳の治療をうける。車中、マンチュリの日本領事館の田中領事に会う。

5月17日、午前8時半大連駅に着く。島崎の出迎え。ヤマトホテル。満鉄本社を訪問。「大

連御滞在の肅親王は、川島氏と共に私共を訪問された」。

5月18日、奉天にもどる。熱河をへて蒙古に入るのは危険、林總領事と相談し、鄭家屯に出て肅親王の紹介のトシエト蒙古に入り、東西チョロツト蒙古からアルコンチン蒙古を通り、バーリン蒙古の遼の遺跡地に進むことにし、護照の手配を依頼した。

5月19日、午後5時ごろ護照がおりる。奉天を出発して四平街に夜10時ごろ着く（植半旅館）。5月20日、満鉄支社を訪問。宇佐見顧問と会う。

5月21日、朝7時発の汽車で鄭家屯に向かう。午前中に着き、午後日本領事館を訪問。領事の話によると、「大分北京方面の様子は悪く、既に在留邦人の内婦人子供の或部分は、此の街を引上げ今領事婦人も、お引上げのお支度の最中で、御目にかかる事が出来なかつた」。鄭家屯の満鉄公所長の菊竹が出迎え。トシエト蒙古廻りを又中止して此处より蒙古入りの用意に取りかかる。馬1頭の相場は百円位であった。車2台、馬夫2人、ボーイ2人、厨子、通訳、護衛兵数人、テント、寝具、炊事道具、二三ヶ月分の食料品などの準備を菊竹公所長に依頼。

5月22日、満鉄公所を出発。三頭立の馬車2台に分乗してウブグン廟に日帰りする。

5月23日、「不安」な情報はいる。菊竹の採集品を調べているが、領事館から「鳥居一行の蒙古入は見合せる様に」との通知があった。満鉄本社からも同じ通知であった。「マンチュリの方から這入ることにした」。

5月26日、鄭家屯から四平街をへて、長春に向かう。ヤマトホテル泊。夜半長春発の汽車でハルビンに向かった。

5月27日、朝ハルビンに着き、北満ホテルにはいる。ハルビンの街は「外国人五分、支那人四分、日本人一分」であるという。外国人の多くは露国の帝政時代の人々。日本總領事館その他満鉄公所を訪問。

5月29日、早朝、ハルビン駅からマンチュリに向かう。大興安嶺山中を横断する。

ハイラルからマンチュリに着く。ホテルの隣りが領事館。田中領事と会う。田中領事から、「七日間以上の蒙古入を禁ぜられる」。「万一の場合探しに行くのが大變だから」という。目的地にたつするまで約2週間を要するから、断念する。「明朝は早速にハルビンに引返へす事として、今夜はすっかり荷物の準備をした。之迄寝具類其他食糧品類の重荷を折角此處まで運んで来たが、もう必要ないのですっかり捨てる事にして、ホテルに残した」のであった。

1919年7月6日鳥居龍蔵は日本軍司令部高柳参謀長と同行してオムスクに向かい、チタに到着している。セメノフ将軍と交渉し、駐屯師団司令部および特別機関を訪れた。チタは「コサック軍団本部（セメノフ将軍）の所在地」である。チタから満州里地域の政治状況を記述している。

満州里は「ロシア人、シナ人の土人多く、蒙古人も亦來集しつゝあり。商業上將來注目すべき要地なり」。さらに海拉爾に往く。この地はシベリヤ、満州、蒙古の三方面に於ける各民族の集合場で、バラカ蒙古、ソロン人、ダウル人、附近にオロチョン人が居住するという。清朝に衙門を設け、満人の官吏を常に駐割させ、近時海拉爾附近に呼倫貝爾政庁を設け、「シナ政府の手を離れて自立独立の国をなしたり」。

此の独立には、背後にロシア操縦の手潜みしが如きも、兎に角シナより独立したるが事実なり。而して政庁に属する民族は、ダウル人、ソロン人、バラカ人、オロチョン人其他なほ種々あり。

人口一万人余を算す。而して政庁は独立権を以て紙幣を発行し、布令布達をなし、租税の徴収をも執行す。在留のシナ商人も、甘んじて租税を納附するの状態なり。興安嶺の西、海拉爾を中心とせる一郭に於て、斯かる政庁の存在することは頗る注意すべきものとす。而して政庁を組織する人々は、固よりシナ人に非ず、又ロシア人に非ず、一種特別なる民族の結合に依るもの、亦興味ある事実と謂ふべし（鳥居龍蔵1922『北満州及び東部西伯利亚調査報告』）。

この「極東共和国」は日本軍のシベリヤ撤兵の20日後にソビエトロシアに吸収され、滅びた。極東共和国は1920年11月に日本軍の支援したセミョーフ軍がソビエテ・ロシアがチタから撤退した後を襲って、クラスノチョコフを首班として成立した。これは、バイカル湖以東の日本

軍とソビエト・ロシアとの直接対決を避ける緩衝国家として、ポリシェヴィキが巧みに考えついた側面がつよい〔山内昌之1999〕。

5月30日、ハルビン行きの汽車に乗ることにして、発車時間まで郊外の丘にのぼる。停車場では露西亜人と支那人らの税関吏が来て荷物を調べた。

私共は又先に通つて来た道をあかず眺めながらハルビンへと向つた。道すがら停車の時間が少し長いと、夫や島崎さんは一寸飛び下りて植物を採集して下さる。興安嶺の驛では山躑躅の花を露西亜少女が賣りに来て居たのを買った〔鳥居君子1928〕。

午前中にハルビン駅に着き、北満ホテルにはいる。

5月31日、ハルビン駅から東支線で阿什河に向つた。金の上京に到着。6月1日午前中にハルビン、北満ホテルにはいる。

6月2日、スガリに行く。日本人の本屋の主人が『満蒙の探査』をみて、阿什河に行ったという。鉄橋附近に支那の軍艦2隻が投錨。ボートに乗る。

私共は之から蒙古入の出来なかつた其のかわりに、もつと有益にあと一二ヶ月は過ごしたいものだと考へた。それで少し危険ではあるが、長春に引返し、あれから吉林省の奥に這入つて見たいと思った〔鳥居君子1928〕。

6月3日、午後3時長春駅に着き、ヤマトホテルにはいる。ほかに日本人経営の富士屋ホテルがある。領事館と満鉄公所を訪問。夜の汽車で吉林に向かう。吉林では名古屋ホテルに泊まる。

6月4日、吉林の天主堂でミサ（天津の博物館長のリサン霊父）。幸子に前年の1月に亡くなった「巴里のお兄さんは如何」と聞かれたという。この日未明、張作霖事件がおこる。

6月5日、龍潭山に行く。吉林駅にもどる。同じ宿に泊まる敦化の満鉄公所の河野公所長に会う。敦化まで同行することになる。6月6日、吉林から汽車で老爺嶺駅までくる。6月7日老爺嶺から蛟河。6月7日、二道河子から蛟河、六道河子に行き泊まる。

6月9日、朝5時に出発。昼ごろ大沙河の吉敦鉄路工務段に到着。二道河子から4里。段長の宿舍で泊まる。

6月10日、大沙河から威虎嶺、陳家河、魚亮子をへて黄泥河駅に着く。「朝鮮人の家族が所々野地の中に掘立小屋を造つて其の周圍を少しずつ開墾し始めて居る所があつた」〔鳥居君子1928〕。

6月11日、7時頃出発。巡警6人が護衛。約4里で臭季子溝で昼食。太平嶺に進む。午後5時ごろ敦化に入る。満鉄公所の河野公所長の部屋に泊まる。

6月13日、敦化古城（敦東城）調査。満鉄公所に帰り着いたころ、敦化県の徐彬敦化知事が訪問、敦化城西南方1里半の山城についての調査をすすめられた。

6月14日、河野公所長の招待。敦化街の支那料理屋。敦化電報局長黄憲章、敦化商會副會長蘇履成、東北陸軍歩兵十三旅第七團少校團附趙賡善、そのほか敦化の重要な役職数人が招待。

6月15日、朝6時、敦化城から石頭河の村に着く。大石頭河と黄泥河の合流地点の山城（城山子山城）。徐彬敦化知事に教えられたという。午後3時、知事の招待会があつた。知事官邸内の広間でおこなわれた。列席は河野公所長の宴とおなじ20名ほどであつた。

6月16日、朝6時、敦化の東方、安図へ至る哈爾巴嶺の麓に高麗の遺跡遺物の調査。帰路、二道梁子の豪農家に泊まる。

6月17日、黄土腰子をへて、12時ごろ牡丹江に出る。午後2時ごろ満鉄公所に帰り着く。

6月20日、5時半に敦化を出発。臭梨子溝をへて黄泥河子驛に到着し、行きとおなじ大工宅に泊まる。

6月21日、5時半に出発。陳家店に着く。12時ごろ威虎嶺のトンネル（工事中）東口に入る。西口では土砂の崩壊。威虎嶺の公務段で昼食。2時半ごろ鉄道線路の新道をとおつて、大沙河の公務段。泊。

6月22日、端午の節句。モーターカーで蛟河まで、午前11時ごろ着。この日、汽車が開通した。

6月23日、8時10分発の吉林行き列車で出発。午後1時吉林駅に到着。領事館を訪問。午後5時発の長春行きの列車に乗る。8時ごろ長春に着き、ヤマトホテルに泊まる。

6月24日、午後3時の大連行列車で出発。公主嶺から蒙古学者の菊竹氏が同乗。午後10時半、奉天に着く。ヤマトホテル。奉天から大連に帰る満鉄松岡副社長に会う。奉天から、同行の島崎写真技師は大連の自宅にもどる。

汽車が奉天に近づいた頃であつた、列車のボーイが張作霖の殺されたという云ふ、場所を見せてくれた、私共は先に敦化に居た時、此凶報を耳にしたのであつた、夜であつたが、電氣の光で能く見えた、恰も上の方を私共の汽車が走つて居る、此レールと十字形になつて居る處の、その下のガードを、東の方へ少し出た處に、焼け残りの汽車や、曲つたレール、ガードの煉瓦が、ひどく破れた箇所など無惨な跡が其儘に残つて居て、當時の物凄かつた様子がまざまざと見える様で、思はず身内が震えるのを覺えた〔鳥居君子1928〕。

6月25日、總領事館、満鉄公所を訪問。城外の骨董店をまわり、満鉄公所に立寄つて、奉天駅に急ぐ。午後1時30分発の大連行の汽車に乗る。夜の8時30分に大連に着く。「何だかもう日本に帰へつて来た様な気がする」〔鳥居君子1928〕という。ヤマトホテルに泊る。

五月十五日であつた、大雪の日に此ホテルの二階から、街を眺めて居た事を、思ひ出して見ると、教の淋しさは、どうしたのかと不思議な位にひつそりとして居た、停車場に集ふ人も稀で、廣場に客待の馬車も腕車も大變淋しさうであつた〔鳥居君子1928〕。

總領事館から帰へつてから、菊竹さんの御案内で、城内の満鉄公所を訪問した。城内でも一流の場所で、建物も大變美しいものである。階上の見晴らしに導かれて眺めた、城内は一望の内に指摘され、張作霖の居つたもと満州の宮殿も、近くに眺める事が出来る、喪の假屋が白く高く、宮殿奥の方に聳えて居た〔鳥居君子1928〕。

此處の満鉄公所では、鎌田所長に御目にかゝつた、私は始め支那人と思つた位、支那服が能く似合つて居られる、多くの支那の大官連と、親交のある方で、張作霖や吳俊陞の死を非常に悼んで居られた、そして従容として、支那人達の處置を稱へて居られた〔鳥居君子1928〕。

此骨董店に居た時前の通りを多くの大官連が、自動車飛ばして、張作霖の葬儀場に行くのを見た〔鳥居君子1928〕。

鳥居一行は5月21日、鄭家屯の日本領事館で北京の政治状況の様子を聞いていた。「領事」婦人引き上げの情報は信憑性があつた。危機的状況にあつた。

6月26日、午前11時の列車で鞍山に向かう。夕暮れ時に鞍山駅に着く。駅には林所長、矢澤校長、梅本先生などが出迎え。満鉄倶楽部に泊る。

6月27日～7月7日、鞍山に2週間滞在。漢代墳墓数カ所、苗圃附近の2基の古墳を発掘。千山の画像石、遼金の土城、明の古城、桜桃園のストーンサークル、遼代の鉄の採掘跡？などを調査。

7月8日夜半、鞍山から汽車で大連に向かう。7月9日朝に大連。満鉄本社の松岡副社長、岡理事に挨拶。「其他數カ所訪問して」、午後から自動車で旅順に向かった。関東庁を訪問、木下長官は不在、博物館を見学。ホテルに木下長官から電話があつた。星ヶ浦の料亭で満鉄本社の招待（満鉄重役代）をうける。7月10日大連発の亜米利加丸に乗る。7月13日早朝、神戸に着く。

鳥居一行が各地の領事館、満鉄公所でえた情報は、同じ年の1928年5月国民革命軍の北伐が北京にせまる政治情勢にほかならなかつた。6月4日午前5時23分、張作霖は関東軍參謀河本大作大佐の策謀で爆殺された。爆破の日、鳥居一行は吉林にいた。その3週間後に爆破現場を通過した。鳥居たちは吉林にいたのであつた。

鳥居らが接したのは領事館であり、満鉄公所であつた。事件の情報をえる条件にあつた。日本国内では翌年の1929年に議会で問題となつたという。その関東軍の秘密性と暴虐はノモンハン戦争につながる。

鳥居一行の旅は、1918年（大正7）のシベリヤ出兵から10年、1922（大正11）年のシベリヤ撤兵のから6年、北伐、1927～1928年の山東出兵、張作霖爆破事件の最中、満州事変（1931年）の3年前のことであつた。

II 映画〈地平線〉とノモンハン戦争

2010年2月15日、『徳島新聞』で鳥居龍蔵をモデルとした映画「地平線」（大都映画株式会社）が存在することが紹介された。8月12日～14日、西口泰助（映画史研究者）、梅津龍太郎（アナウンサー）、杉田卓武（徳島ホール・マネージャー）さんらの尽力によって、徳島ホールでその上映が実現した。その35ミリフィルムは東京国立近代美術館フィルムセンターで唯一巻のみ保管されている。

大宅壮一脚本で、脚色村山知義、監督吉村操・白井戦太郎。あらすじは田所慎一（鳥居龍蔵）、娘の陽子（鳥居幸子、甥の弘一と現地人親子が駱駝でモンゴル平原・砂漠地帯をハラホト城（黒城）を探して旅する。田所夫婦は蒙古人のための学校を開き、日本語を教えた。その妻はその地で亡くなったという設定である。日本語を学んだモンゴルの「ハルマ王」の王子に遭遇する。王子はソ連軍を行動をとともにしていた。「内蒙軍」の進撃、弘一の救出作戦もくみこまれる。「外蒙古」と「内蒙古」軍との国境戦争が勃発し、勝利する。田所慎一一家は「日の丸の旗を打ち振る博士一行」（「シナリオ地平線」『日本映画』1939年8月）。映画は「内蒙古軍」の凱旋で終わる。「満蒙」国境線攻防の宣伝映画だ。

映画のチラシによると、映画の後援は現地〇〇部隊指導、蒙古軍騎兵团、満蒙聯合委員会、蒙古連盟自治政府、風俗考証チハル盟長、蒙古現地ロケ二ヶ月、映画に出場する人馬、羊五千頭、ラクダ一千頭、牛馬数千頭、蒙古軍騎馬一千頭、蒙古人エキストラ延人員一万五千人、ロケ行程二千五百キロ。

そして「撮影準備開始以来実に半歳愈々初秋九月登場」とある。1939（昭和14）年の9月である。9月15日には、ノモンハン戦争の停戦協定が結ばれた、まさにおなじときである。

1939年5月11日開戦のノモンハン戦争の前夜の状況を物語る映画である。チラシの宣伝文が事実ならば、まさにノモンハン戦争を同時に進行、制作されたものとなる。制作日数は6ヶ月あるいは9ヶ月を要したという。

出演した水島道太郎（従兄弘一役）の「わが青春の大都」（『写真集懐かしの大都映画—もう一つの映画史』（ノーベル書房、1992）によると、往時の撮影の状況がうかがえる。

14年の「地平線」も思い出深い作品である。吉村操監督で、私たちははるかモンゴルロケを敢行した。著名な民族学者の鳥居竜三の自伝的映画だった。その鳥居役は藤間林太郎（現俳優の藤田まことの実父）、私は彼の助手という役所であつた。釜山から北京、そしてウランバートル近くまでの延々の旅だったが、パオで起居し、見渡す限り大草原でのロケは今も記憶に鮮明である。そのロケに何故か大宅壮一が同行していた。同行の理由は定かではないが、パオの中に入り、たずねまわっていたエネルギーな彼の姿が印象に残ってくる。

鳥居龍蔵夫妻は明治39（1906）年、蒙古の喀喇沁王府語学堂の日本語教師となった。明治40（1907）年鳥居君子・幸子とともに赤峰からシラムレン河を渡り、ブイルノール湖畔から巴爾喀蒙古、ハルハ河に沿って外蒙古のデッタバイシン、大興安嶺をへて、赤峰にもどる。蒙古人の人体測定、民俗、遺跡の調査をおこなった（鳥居龍蔵『蒙古旅行』明治44年）。のちにノモンハン戦場となった国境地帯だ。

鳥居龍蔵は、1930年8月～12月に、遼の慶陵、遼太祖陵などの調査をおこなった（鳥居龍蔵・きみ子『満蒙を再び探る』1932年1月刊）。あとがきにあたる「満蒙の風俗と生活」の末尾に記す。

私どもは一日に早く平和の日が来るように祈っている。…中国人も蒙古人も愉快なところがあって、ある一部の日本人のように陰気でない。自国の文明に自惚れないで、隣国の同胞を尊重して、大いに学ぶべき点が少ないはあるまいかと思われる。どうしても日本は早晩中華民国の人々と共に協力して、極東の発展シンポジウムを計るようになる時代が来なければならない。

昭和六年十二月三十一日 鳥居人類学研究所にて 鳥居きみ子

同年の1931年9月18日、「満州事変」が始まった。鳥居龍蔵・きみ子はけっして戦争を賛美してはいない。

1939年7月、田村實造・小林行雄らが慶陵の調査に向かった8月、燕京大学客員教授として

北京に赴く。69歳であった。

鳥居龍蔵は映画の企画や上映について知っていたか、日記などにのこしているか確認できていない。脚本では慶陵、遼の皇帝陵の調査についてはふれていない。

2009年9月18日、吉林省長春から列車で興安嶺の阿爾山を越え、ハルハ河沿いに平原・砂漠地帯のノモンハン（諾門罕）の戦場に立った。戦いが勃発して70年である。戦場の一角に戦争博物館がつくられている。78年まえの「満州事変」勃興の日だった。

2010年7月、ウランバートルから東北360km、ロシア国境に近い 東部地域では韓国隊によるドルリックナルス匈奴墓群の発掘を見学した。モンゴル東部から興安嶺、鮮卑や匈奴、さらに西にはスキタイ文化がひろがっている。鳥居龍蔵の蔵書に『スキタイ』（仏語）がのこされている。鳥居龍蔵はモンゴル東部の国境地帯を南北に縦断し、王府をたずね、モンゴル族の民族調査をした。ウランバートルの歴史民族博物館では往時の写真が展示されている。鳥居龍蔵・きみ子の調査記録は百年前のモンゴル、戦争と平和を映しだしている。

2008年、城戸久枝『あの戦争から遠く離れて一私につながる歴史をたどる旅』（情報センター出版局、2007）は第39回大宅壮一ノンフィクション賞をうけた。「残留孤児」の父親の生い立ちを描いたものだ。牡丹江流域の頭道河子村（旧牡丹江省）の地で育てられた。城戸久枝さんは徳島大学と吉林大学で学んだ。わたしも長春の関東軍司令部近くの吉林大学の宿舎に3ヶ月滞在したことがある。黒龍江省佳木斯から牡丹江市をへて、寧安東京城の渤海上京龍泉府を歩いた（2011年3月3日、鞍山から列車で瀋陽に）。

鳥居龍蔵1922『北満州及び東部西伯リア調査報告』『朝鮮総督府古蹟調査特別報告』2（『鳥居龍蔵全集』8）

鳥居龍蔵1928『満蒙の探查』萬里閣書房（『鳥居龍蔵全集』9）

鳥居龍蔵・君子・幸子・緑子1929『西伯利亚から満蒙へ』大阪屋号書店（『鳥居龍蔵全集』10）

鳥居龍蔵・きみ子1932『満蒙を再び探る』六文館（『鳥居龍蔵全集』9）

鳥居龍蔵1943『黒龍江と樺太』生活文化研究會（『鳥居龍蔵全集』8）

鳥居龍蔵1953『ある老学徒の手記』朝日新聞社（『鳥居龍蔵全集』12）

山内昌之1999「アジアとヨーロッパー日本からの視角ー」（『岩波講座世界歴史』23、岩波書店）

東潮2009「鳥居龍蔵のアジア踏査行ー中国西南・大興安嶺・黒龍江（アムール川）・樺太（サハリン）ー」（『徳島大学総合科学部人間社会文化研究』17）

徳島新聞2010「鳥居龍蔵モデル70年前の映画ー県内上映目指す」（2010年2月15日）

徳島新聞2010「モンゴル舞台冒険活劇ー鳥居龍蔵の映画上映」（2010年8月5日）

徳島新聞2010「鳥居龍蔵モデルの映画「地平線」ラジオキャスター梅津龍太郎さん語る」（2010年8月8日）

日本学術振興会（科学研究費）、由良大和古代文化研究協会財団、福武財団、三菱財団、韓国文化財団、松本清張記念博物館からの研究助成、国立歴史民俗博物館、文化学園大学文化ファッショ機構の共同研究、日本学術振興会・文科省の在外研究をつうじて、フィールドワークもおこなうことができた。海外調査の記録については共同研究などもふくめ、渡航歴としてまとめた。田中俊明・奥谷勝さんら、参画する機会をあたえてくださった方々に感謝したい。

この間、学部・大学院、本学の集中講義（非常勤講師）において諸先生の講義を拝聴することができた。

奈良県立橿原考古学研究所、国立歴史民俗博物館、旧大阪外国語大学、徳島大学などの諸研究機関にお世話になった。感謝したい。

（東潮）